衛宮士郎が大真面目に存在が不真面目なサーヴァントを呼ぶようです

融合好き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルの通りの一発ネタ。直前までジャガーマンとどちらにするか悩んだ。候補としてはジャガーマンの他に水着軍団か魔法少女か謎のユニバース集団かサンタハロウィンの季節色物達あたりからランダムに選びました。今は反省してる。

目次

無窮の武練（偽）：A＋ ―― 1
戦闘撤退：A ―― 11
うたかたの夢：EX ―― 29
啓示：― ―― 47
自己変革：A ―― 63
我が神はここにありて：C ―― 84
対英雄：E ―― 100
カリスマ：― ―― 113
霊基変換：B ―― 128
紅蓮の聖女：D ―― 156
■■■■■■■■■■■：EX ―― 172
優雅に歌え、かの聖誕を：A＋ ―― 189
霊基復元：EX ―― 208
エピローグ ―― 224

無窮の武練（偽）：Ａ＋

いつか、師匠と仰ぐ人物に言われたことがある。
『ありきたりではありますが、人を殺すということは、その者の罪を背負うということではありません』
手元が狂った、などと言い訳するつもりはなく、襲い掛かられて迎撃、つまりは明確に害意を持って為した行為。不意を打たれ、手加減の余裕も余地もなく、状況も合わせて流されるままに行われた私の『悪』。
『かくいう私も、誰かを憎んだことはあります。神も人も、ありとあらゆる全てを憎いと思ったことがある。この世には明確に強者と弱者が存在し、特に人類は、互いが互いに喰らい合い、命を浪費することでここまでの発展を成し遂げました。
ですから、言ってしまえば、貴女の葛藤は、人類におけるシステムの一つでしかなく、利害関係が成立する場合において、私は貴女の行為を否定は致しません』
でも、私は彼を憎んだわけではない。もしかしたら誤解から生まれた戦闘だったのかもしれない。話し合えば、全ては円滑に解決したのかもしれない。そうかもしれない。そうなるべきだった。そうするつもりだったのに、私は、その悉くを奪ってしまった。
『……あえてこのように表現しますが、貴女は何も知らないままに、容易く人を蹂躙できる力を手にしてしまった。この世界では弱者は踏み躙られる運命にあり、貴女は紛れもなくあの場面において強者だった』
お師匠様はそこで一度言葉を区切り、ここからが本題だと言わんばかりに告げる。
『ですが、貴女の行った罪は全て、貴女が持つ尊い想いから成るモノ。自分を、誰かを守りたい。そう願うことで、人々は悪を為してきた。そしてそれは、これからもそうでしょう』
ですので、そう続けた彼の表情は本当に穏やかで、私が為した悪など些細なこと、後悔はしても、背負い続けるほどのものではないと、諭

すような口調で続ける。
『貴女の意思を、私は否定しません。それを悪だと、赦されないことだと悔いる前に、その行為によって守られたモノ、救われたモノに目を向けるといいですよ』
その言葉は、彼を表す肩書きの如く、まるで聖人のように優しくて、でも。そんな優しさを向けられることが、とても恥ずかしくて。それ以上に、罪悪感でいっぱいで。
結局、文字通り全てが帳消しになるような偉業を成し遂げた後も、私は名も知らぬ暴漢の一人である「誰か」のことを、最後の時まで、いつまでも忘れることはできなかった。

☆☆☆

「名前が、知りたいのです。誰かも分からない、その人の名前を」
ランサー。偽名と言うには些か記号的な意味合いの強い名前を名乗った少女は、この戦争に参加した理由についてそのように述べた。
聖杯戦争。聖杯と呼ばれる万能の願望器を巡る、七人の魔術師達による殺し合い。他でもない自分がその参加者になったのだと少女から聞かされ、仔細を訪ねた後の会話、自然と転び出た話題――つまるところ、参戦した動機について。
かつて自分が殺してしまった誰か、その名前を胸に刻みたい。愛らしい外観に反する物々しい願いではあるが、その心情はある程度理解できる。
かつて、冬木に起こった大災害――それにより「名前」を喪ってしまった自分も、己が真の名を知りたくない、と言えば嘘になってしまうからだ。
「じゃあ、あいつは……」
「マスターを襲ったのは、参加者であるサーヴァントの一人です。先程も言ったように、魔術師同士の儀式は一般に秘匿されるもの。そう

でなくても、魔術師（ひとでなし）にとって、神秘の目撃者の処理は義務とされています」
「なんだよ、それ……!!」
険しい顔で淡々と語られる内容に、憤慨して唇を噛みしめる。
神秘の秘匿。理念こそ立派でも、やってることはあまりにも度し難い。そも、こんな街中で派手に殺し合いをやっている時点で、ロクな連中ではないことは明らかだ。
目撃者を始末する。ミステリー小説なんかでは良くある展開でも、深夜とはいえ、学校のグラウンドでドンパチやってるような連中に義務で殺されかけた身としては堪ったものではない。
止めさせないと。自然とそんな考えが浮かぶ。俺も立場的には彼らと同じ魔術師の端くれではあるが、それでもこんなことは間違っていると断言できる。ふつふつと湧き上がる義憤が身を焦がす。そうだ、この馬鹿げた争いは現在進行形で行われているのだ。藤ねぇを始めとした街の住民――罪もない人々が脅かされる可能性が、今も脅かされている可能性だって否定はできないのだから。
「そうですね。そういう話でしたら、最近この街で、何かおかしな事件はありませんでしたか？　例えば、おおよそ人の手によって起こされたとは思えない殺人があったとか、似たような不審死が多発しているだとか、最近妙に行方不明者が多いとかそういったものが」
「……!!」
言われて一つ思い立ち、衝動的にテレビの電源を入れ、ブラウン管の画面が徐々に明るくなるのも待ちきれずに最近の新聞を引き出し読み漁る。
偶然やっていたニュース番組、及び新聞の片隅に映るのは、冬木で最近起きている事故、冬木で多発しているガス漏れによる昏睡事件――
「――具体的な企業名が何処にも挙げられていませんね」
「ああ……」
「ガスによる昏睡は生命に直結します。しかもこれほどの規模、被害が多発しているとあれば、本来なら賠償責任の話、区画の閉鎖くらい

はやって然るべきですが」
「魔術……でも、こんなことに、何の意味があるんだ？」
「サーヴァントの身体は魔力によって維持されます。今もマスターの身に多少の倦怠感があるのでは？」
「つまり、その負担を抑えるために、他人から無差別に魔力を奪ってるってことかよ……！」
「魂まで絞らないだけマシです。そして、現状をマシとまで言える悪辣さこそが魔術師の魔術師たる所以。
　魔術の基本は等価交換。ですが、人一人を犠牲にようやく使える奇跡も、術者本人がその代償を支払う必要はありません――ないのです」
「くそっ」
　いつか爺さんも言っていた気がする魔術師の当然、その真意と悪辣さに眩暈がする。
　ああ、いくらせがんでも爺さんが俺に魔術を教えることに難色を示していた本当の理由が今更になって理解できた。この、見るからに純真な目の前の少女が、それでも魔術師を指す言葉として当たり前に用いた「ひとでなし」――であれば、養子とはいえ人の親が、そうなる要因を継がせたいなどと思うはずがない。
「とはいえ、魔術とは学問。使い方次第です。他所から持ってくるのが手っ取り早いというだけで、彼らにも彼らなりのリスクリターンは存在しますし、美学に類するそれなりのこだわりはあります。特にこれらの事故は明らかに最近のもの、となれば聖杯戦争絡みの事件に間違いはないでしょう」
「どうしてだ？」
「聖杯戦争という儀式において、召喚された英霊は現世との擦り合わせのため、今の時代や聖杯戦争そのものに対する知識が刻み込まれるんです。それによると、このフユキ市には御三家と呼ばれる管理人が存在し、それらが表立っての隠匿や制裁を行なっている。でも――」
「……ああ、今回の事件はその御三家とやらにも隠匿し切れていない。つまりは人知を超えた存在である英霊、サーヴァントの仕業である可

能性が高いってことか」
　妙に意識して論理的に並べて語ろうとする彼女の言葉からその先を推察し、誘導先である原因に当たりをつける。
　……何故か目を見開いて驚かれた。なんでさ。確かに直情的な反応を見せてたけど、俺だって考えなしってわけじゃないんだぞ。
「でも、サーヴァントに立ち向かってましたよね？」
「うっ、でも、あの時はサーヴァント云々なんて」
「知らなくても、勝てないことは否応なしに理解したはずです。女性だからと侮った？　そんなはずはありません。あるいはそうであるならば尚更、マスターはこの戦いを降りるべきです」
　サーヴァントとは見た目が全てではないのですから。そのように続けられて、事実、俺が手も足も出ずにいた見えない武器を構える怜悧な印象を受ける外人の少女を容易く退けた、少女と言うにも抵抗がある幼い子供、自称、人類史に刻まれた英霊であるランサーを見やる。
　なるほど、襲撃者も撃退者も、互いにとても戦士とは思えない。そうでなくとも、同年代でも恵まれた体を持つ自分を、年下にしか見えない少女がやすやすと吹き飛ばすなど普通は無理なのだ。
　であれば必然、俺が昨夜に相対した相手は普通ではない存在ということになる。しかも話を聞くに、あの少女も目の前の少女も、その正体は歴史で語られるほどの傑物。立ち向かうなど、勇気を通り越して無謀。だからこそ彼女は、僅かでも俺にその可能性があるのなら、この戦争に参加する資格はないと告げている。
「でも、俺は、このまま手をこまねいてるつもりはない」
「はい」
　我儘に近い俺の主張。それに対し、彼女の返答はまさかの肯定。てっきり咎められるか諭されるものだと考えていた俺は、思わず答えを返した彼女を凝視してしまう。そして、気づく。
「そうです。こんなことは、許されるはずがない――」
　フルフルと、フツフツと、俯く彼女の全身から溢れ出す震えと怒気。俺が抱いた義憤をまとめて押し流すほどの本物の怒り。それほどの感情。

俺みたいなにわかではなく、本当の魔術（キセキ）を知るが故の憤り。魔術を用いて人を害する者に対した、悪意への反感。
「マスター、いえ、衛宮士郎さん」
「なんだ？」
「貴方は、ここまで話を聞いて、なお。この戦争に足を踏み入れるつもりですか？」
「……ああ」
「その理由は？」
「アンタと同じだ。こんな非道は許されない。許されるはずがない」
「なら、ダメです。却下です」
「なっ……」
「正義感だけで動くには、いくらなんでも相手が悪すぎます。コソ泥や不審者を捕らえるのならとにかく、貴方に正真正銘のシリアルキラーの相手は力不足です」
そして、と続ける彼女の言葉は妙に実感がこもっており、まるで友達がそうであるかのごとく説得力に満ちていて、即断された否定に対する反感も、どこかに消え去ってしまい――
「――私は、私の意思、私のワガママから、犯人を止めに行きます。どうかご安心を、マスター。貴方は、貴方の街は、愛する人たちはこの私が守ります。七天の英霊が一角、槍兵（ランサー）の称号（な）の下に」
それでもなお、大真面目にそう告げる彼女に、俺は何の言葉も返す事はできなかった。

☆☆☆

「はい。まずは管理人の元へ進言しようと考えています」
「……管理人？」
あの話し合いからしばらくして。

時間は深夜。場所はそのままに、具体的にはどうするのか、せめてそれだけでもと尋ねると、意外にも素直にそのような回答が返ってくる。

管理人。そういえば、先程の会話の中にもちらっと出ていたような気もする。確か、御三家と呼ばれる魔術師の家系が、冬木の街を、もっと言うとこの聖杯戦争を管理している、だとか。

「そうです。遠坂、間桐、アインツベルン。聖杯からの知識では家名しかわかりませんが、特に遠坂は、この土地のセカンドオーナーも兼業しているようですね。ですので」

「……ん？」

「どうかしました……ああ。貴方もこの街の住民なら、もしやご存知だったりしますか？　どうも相当古くからこのフユキとも関わりがあるようですし」

「知ってる……というか、遠坂はとにかく、間桐？　まさか、そんな……でも」

あまりに聞き覚えのあり過ぎるその名前と、彼女達が持つ肩書きと関係性との齟齬が記憶を侵して眩暈がする。まさかそんなはずはない。そう確信している自分と、それでも現状の危機、特に自分が殺されかけた恐怖が疑心暗鬼を生み出し、探りたくもない腹を邪推してしまう。

間桐。すなわち間桐桜に間桐慎二。どちらも俺にとって得難い大切な友人であり、桜に至っては今でも毎日のように家まで遊びに来る可愛い後輩だ。そんな彼女が、彼が魔術師？　しかもこんな悪趣味な戦争を創り上げた連中の一人だって？

浮かんだ疑問を、分かりやすく疑問符を上げる彼女に対して説明する。すると、

「むむむ。話を聞くに、モグリの魔術師の監視にしては行動が献身的過ぎますし、何より無駄が多いですね。なんでしょうか。最初はそういう目的もあったのかもしれませんけど、接していくうちに絆されてしまったとかはありそうですね。ただ、いずれにしろやぶ蛇であるのは間違いないかと」

「……」
「その人たちの真意はどうあれ、今はまだ行動を起こさないようにお願いします。いざとなれば私を切り捨てても構いませんので、原則、いのちをだいじに、です」
「アンタは、それでいいのか？」
「願いについてはとにかく、せめて昏睡事件の犯人くらいは己が手で捕まえたかったのですが、それでマスターが傷つくようなら話になりません。サーヴァント失格です。そも、私は稀人……本来なら、この世界にいてはならない存在です。逆に、もし私の身柄や霊基と引き換えにマスターの安全が図れるようなら、喜んでこの身を捧げます」
「それは――」
　直立してなお、正座する俺の頭を少し超える程度に位置する胸を張りながら、彼女はこちらを不安にさせまいと気丈に微笑む。サーヴァントだって、元は人間だ。その時が怖くないはずがないだろうに、それでも柔らかく笑う少女に見惚れそうになる。
（……ん？）
　その時、ふと、彼女が先に述べていたサーヴァントについての解説が頭に浮かぶ。
　サーヴァント。神話や伝説の中で為した功績が信仰を生み、その信仰をもって人間霊である彼らを精霊の領域にまで押し上げた人間サイドの守護者。魔術概念における正式名称は境界記録帯（ゴーストライナー）。魔術師が作り出した使い魔ではなく、人類史そのものから召喚する使い魔であるため、「かつて記録された現象を呼び出す」という意味で境界記録帯と呼称される。
（そして、サーヴァントはそれ故に、基本的には死亡時ではなく、その英霊が〝最も強かったとき〟である全盛期の姿で召喚される――なら）
　未だ直立したまま、身の丈を超える槍を構える目の前の少女を無遠慮に眺める。今更、彼女の言葉を疑うつもりはない。つまり、この少女は。
「……なあ」

「――すみません。話の途中ですが、おそらく敵襲です。可能なら、息を潜めて適当な場所に隠れていてください。サーヴァントならともかく、人やワイバーンなら運が良ければ見つからないかも……っ、ごめんなさい！」
「なっ――」
瞬間、とても少女の力とは思えない尋常じゃない膂力によって襖ごと隣の部屋に突き飛ばされる。
直後に鳴り響く金属音と連続する震音。複数の足音と怒号には届かない高めの声が響きわたり、慣れ親しんだ我が家を異空間に染め上げる。
しかし、それも俺が身体を起こし終えるまでの僅かな期間。彼女たちサーヴァントにとってはそれだけで戦闘としては十分に成立どころか1R程度は余裕らしく、外れた襖の奥に広がる光景はこの短期間の諍いでできたとは思えない乱雑さであり、同時に背景に似合わないほどひどく滑稽な状況だった。
「動かないでください」
襲撃者と思わしき、鋼のような印象を受ける大男。
赤い外套を纏うその肉体は解析するまでもなく限界まで鍛えられ上げられていて、およそまともでない存在感が、あからさまに只者ではない雰囲気を醸し出している。
しかし。
「まさか貴方がこんな悪趣味な戦争に参加しているのは予想外でしたが、ご自慢の武具もこの状況では形無しですね」
「ぐっ……」
そんな襲撃者に当然のように天井を仰がせ、身の丈を超える槍を首元に突きつける小学生にしか見えない少女。なんだこれは、と己が目を疑った自分は悪くないだろう。
いや、理解はできているのだ。男子高校生をやすやすと吹き飛ばせるならば、成人男性を転ばせる程度は訳無いと。そうでなくても、柔道や合気道なんかでは体格差をものともしない達人はいくらでもいる。彼女が歴史に名を刻む英雄であるならば、その程度はなんてこと

ない。
だが、理解できるのと納得できるかは違う。一体、何の冗談なのだ。確かにあの俺を襲った少女も相当な力量だった。それを退けたなら、おかしくない光景であるはずなのに、どうしても常識が目を疑ってしまう。
――正義感だけで動くには、いくらなんでも相手が悪すぎます。
つい先程、彼女が言った台詞を思い出す。なるほど、そんな常識に縛られるようなら、確かに俺は命知らずだ。頑なに参戦を拒むのも、彼女が他のサーヴァントの凶行を止めたいと主張するのもよく分かる。
しかし、それでも。そう考える自分は、ある種の傲慢なのだろうか。少なくとも、彼女が言った通り、命知らずではあると思う。尤も、現状ではその実感が薄いのだが。
膠着した状況を呆然と見守っていると、今更ながらに視界の片隅で見知った顔が存在していたことに気づいて、そのことに愕然とする。もはや少女の言葉は疑いようもなく、確かに疑念は抱いていた。だが実際に目にするのとでは衝撃の格が違うことに、今になって俺は気がついた。
「遠坂……？」
「衛宮、くん……？」
何故なら、単なる同級生。その程度の印象しかなかった人物――遠坂凛が魔術師で、聖杯戦争（ころしあい）の参加者だった……そんな事実。ただ一点、それだけのことに、これほどに心を揺さぶられてしまうのだから。

戦闘撤退：A

「どうしてお師匠様は、私の前ではいつも仮面を被っているのですか？」

ふとした疑問。それを師匠に問いたのは、果たしていつのことだっただろう。

たまたま仲のいい友達も居らず、彼と二人きりだったことは覚えている。逆に言えば、その程度の記憶しかない些細な出来事。しかし、その問答の内容だけは、深く心に刻まれていた。

「仮面をつける。それにはいくつかの意味があります。ですが貴女が聞きたいことはもっと単純な理由のようですので、私で良ければお教えしましょう」

未だ年若く見える師匠は、私と同様に、見た目通りの年齢ではない。否、私とは真逆、彼は肉体だけは年若くして、そこいらの老人よりも遥かに深く、過酷な人生を歩んでいる。それこそ、こうして笑っていることが奇跡であるかのように。

「とはいえ、私の理由は基本も基本、仮面の本質に拠るものです。本当の自分を隠す。そのために私は、貴女の前では、いえ、貴女の師匠として振る舞う際は、なるべく仮面をつけるよう心掛けています」

どうして。そのように問い返す。師匠は立派な人物だ。今だってハキハキと、私の知らなかったことを優しく丁寧に教えてくれている。貴方の行為は、誰にも恥ずべきことではないのに。

「ははは。まあ正直な話、それはぶっちゃけ認めたくないからと言いますか、いや、流石にこれは冗談ですが、仮面の本質はズバリ本当の姿を隠すことに他なりません。私は本来であればとても貴女の師として振る舞えるような人間ではありませんので、こうして仮面をつけてカタチだけでも正体を誤魔化してるわけです。貴女もいずれは、そういう機会が訪れるやもしれませんね」

何故、疑問は続く。何故、彼はそう言うのか。確かに私たちの関係

は、例えばスカサハさんとクー・フーリンさんのような、一般的にイメージされる堅苦しい印象を受ける師匠としては物足りないのかもしれないが、先達として、尊敬する人物としてならお師様は十二分に役目を果たしているのではないか。

「いえ、こうして仮面でもつけなければ、私に貴女の指導役など勤まりませんよ。それを自覚させ、また本来の私を抑制するために私にこの役目を押し付けたのなら……あの方は本当に、我々をよく理解していますね」

仮面には、様々な意味があっても、根本は同じものである。あの時はよく分からなかった言葉だけど、今なら多少は分かる気がする。

私もいずれ。彼は言った。その行為は、必ずしも悪であるとは限らないと、つまり。

――遠坂凛は、彼の前では、ううん、きっと常日頃から仮面を被っている。

しかしそれは、師匠と同じように、悪意から成るものではない。

隠したモノが、誰かを傷つける、その真実が害になる。そういった思いやりこそ、彼女の動機。

魔術と呼ばれる悪意の塊（しんぴ）から、一般人（つみなきひと）を守るための苦肉の策。

そしてそれ故に、彼女はかの女神（善なるもの）の依り代として選ばれたのだ――と。

☆☆☆

懸念していた管理人との話し合いについては、非常にスムーズに終わったと言っていいだろう。

何せ事前に相手の最大戦力を無力化しているのだ。マスターと彼女の関係がなくても、相手がこの戦争に関わるつもりである以上は、その時点で何かしらの譲歩をせざるを得ない。尤も、私にとってもマスターにとっても、彼女と共同戦線が組めたのは偶然の要素が大き

い。何だかんだと子どもには甘いアーチャーさん……サンタムさんが油断していたのと、私自身が彼と幾度となく矛を交えた経験がなくてはああもあっさり伏せることは不可能だっただろう。
　その上で、事情を聞いた彼女との目的がこちらと対立することはなく、共同戦線を結べた。これが奇跡と言わずに何という。特異点においてはどの英霊であっても共通する「人理のため」で割りかし成立した利害関係も、こと魔術師による悪趣味な儀式下においては信じられないことだ。
　しかし、だからこそ、彼女が我々を謀る可能性は非常に高い。マスターの意向から、同盟を結ぶ条件に令呪だって使わせていない（そもそもマスターに令呪の説明をまだしていない）。故に、私は警戒する。それが例え、見知った性格の人物であったとしても。
　そうこうしていると、不意に件の彼女が私に話しかけてくる。大した度胸だと思う。仮にも私は少なくとも、彼女の護衛を下す実力はあるというのに。
「貴女も、座ることはしないのね」
「貴女『も』？　ですか？」
「あいつよあいつ。口だけ立派なくせして、実は大したことないあのアーチャーも、見張りだのなんだのと理由をつけてどっかに行っちゃったし」
「ああ……」
「あ、私の方が非常識って思ったでしょ。まあ否定はしないけど、既に今更よ。まさか衛宮くんが理由なく私を殺すとは思えないし、その気があるなら同盟なんて成立しない。貴女が私達を見張るのは順当ね。あんな事件を前提に、仲良しこよしができるわけないもの」
「……」
　サバサバと、半ば諦めたように彼女は呟く。とはいえ正直なところ、私は彼女の善性については疑っていない。
　聖女として定義されたこの肉体は、自身に注がれる悪意を多少なりとも見透かしてしまう。便利だとは思わない。むしろ辟易するだけだ。言葉の裏表を読んで答えると、反応を伺うのが定石化すると、自

分も同類だと思わされてしまうから。
「遠坂さんは、眠らないのですか？」
「眠れないのよ。色々とあったし、そもそもこの時間は本来、魔術の修行に費やしていたから。そもそも衛宮くんだってあれ、眠るってよりかは気絶でしょう？」
「なるべく魔力消費は抑えたつもりなんですけど、召喚したてで二連戦は流石に厳しいものがあったようで。霊体化を多用して消費を抑えることも出来ましたが、何よりもまず説明が先決かと」
「ま、聖杯戦争を知らなければそうでしょうね。たった一晩で二騎のサーヴァント相手によくもまあ上手く切り抜けたもんだと感心するわ」
「……」
「……悪かったわよ。私だって、彼を巻き込むつもりなんてなかった。いえ、これも言い訳ね。彼が魔術師であるはずがない、そう思い込んでいた。だけど、事実が異なっていたからには、それは単なる私の不得。でも、まさか刻印の継承どころか魔術についてロクな知識もないモグリの魔術師が潜んでいたなんて思うわけないじゃない。
そして、彼が魔術師であったにも関わらず余計なお節介を試みた私も、そんなど素人にあっさりと負けた事実も、聖杯戦争そのものを管理しきれずに被害を出している現実も、ぜんぶぜーんぶバカみたい。愚痴の一つや二つ、勘弁して欲しいものだわ」
……ああ、本当に、この人は変わらない。
もちろん、私が知るカルデアでの依り代としての彼女と、ここにいる人間としての彼女は規格からして異なる存在であるのは理解している。でも、それでも、人間とは理屈（ロジカル）だけの存在でないのは重々承知の上。たとえ別人だったとしても、私にとっての彼女は、私が知る彼女のままだ。
（……いっそ気付かなかったのなら、もっと賢い選択とやらができたのでしょうか）
とはいえ、それは不可能だと理性が訴えている。そもそもマトモな英霊とは言い難いエミヤさんに気づいた時点で、私の知るエミヤさん

に関わりが強い人物に焦点が当たるのは必然。
その上で、カルデアにおいても異質な特異点である炎上都市フユキに興味を示すサーヴァントは沢山いた。であれば、生まれた時からサーヴァントであった私は、その候補を擁立する程度訳はない。
でも、それはきっと、貴重な情報と引き換えに己を削る諸刃の剣。多用すれば、私は私でいられなくなる。そして私にはその素質がある。望めばいくらでもカタチを変えられる、逸脱者としての素質が。
だから私は、彼女を羨ましく思うのだろうか。神霊に憑依されてなお、自分は自分だと言える頑なさ、いっそ憎らしくもある頑固さを。
「でも、まさか貴女のようなちみっこいサーヴァントに負けるなんてね～…」
「……お言葉ですが、私は単純なステータスではあのアーチャーさんより一回り高いですよ？」
「それでもよ。いや、そもそもそれが驚きなんだけどね。こうなったからには言っちゃうけど、これでもアタシはアーチャーのことをそれなりに信頼していたわけ。そりゃあ皮肉屋でナルシー気味の変なヤツではあったけどさ、それでも」
「――でも、彼は……」
「ん？」
「いえ。失敬、なんでもありません」
ついうっかり滑りそうになった口を噤む。正直に言えば、色々と物申したいことはあるのだが、ここで私がアーチャーさんを知ってることを彼女にバラすわけにはいかない。
今でこそ味方でも、いずれ敵となる関係。トナカイさんはなあなあで最後の最後まで誤魔化せる胆力と天運を持ち得ていたが、今の実直なマスターにそういう腹芸は期待できない以上、立場的にも汚れ役は私が担うべきなのだ。
「それより、眠らないとしても、本当にここに泊まるつもりですか？
いえ、今のマスターが貴女に狼藉を働けるとは到底思えないですけど、念の為に」
「ええ、そのつもり。成り行きとはいえ、一度告げたことを翻すつもり

はないわ」
「ですが、その、ずばり世間体とかは」
「……薄々思ってはいたけど、アンタやっぱり見た目通りの年齢じゃないのね」
　何を今更、とは思ったが、改めて言うまでもなく英霊とは奇跡の産物。そうそうと目にする機会などあるはずがない。かくいう私ですらアンデルセンさん、エレナさん、エジソンさんと言った面子なんかは未だ伝承との齟齬に戸惑うことがあるのだ。そう考えると、その反応も当然と言えるだろう。
　尤も、厳密には私は、彼女の考えているものとは逆なのだが。
　そのまま頑として譲らない遠坂さんと暫し他愛のない話などを繰り広げ、やがて彼女にとっての寝る時間が近づいたのか、居間から客間へと歩いていく後ろ姿を見送る。
　部屋を静寂が支配し、本能的に湧き立つ恐怖心を抑えるため、小さく呟く。
「見た目通りじゃない、ですか……」
『私』が複数人存在したカルデアとは違い、今の私は『??????・??????』として、その名に相応しいよう霊基を歪められている。そも、??より私が具体的には何者であったのか、私自身すらはっきりしていなかったのだ。この程度の変質は当然だろう。
　何故ならば、『??????・??????』とは、歴史上に一人しか存在しないのだから。
「……まあ、成長した私も、正しく成長した私も、夏の暑さでおかしくなった私でも、私は私です。問題は無いでしょう。モーマンタイ、です」
　その呟きは、虚しく虚空へ消え果てる。そして、そんな仮面を塗り固めた無貌の如く曖昧な存在であればこそ存在できるこの私に、私は深く、深いため息を吐くのだった。

☆☆☆

間桐桜は喜んでいた。
先日、藤村先生からこの日には所用があると聞いてから数日、厄介ごとを無感情でこなしつつも表面上だけは努めていつも通りに過ごしていた私だが、この日は違う。
肩の荷が下りた、というのだろうか。依然として自宅は厄ネタの宝庫であるが、兄さんの自己顕示欲とお爺様の方針が上手く噛み合った結果、召喚したサーヴァントへの魔力供給さえ十全にこなせば聖杯戦争中でありながらも私は普段通りに過ごしていい、むしろそうしないと不自然という状況に持ち込むことができたのだ。加えて、お爺様の関心もそちらへ向いているのか、明らかに私への対応がおざなりになっている。これを喜ばずしてどうしようか。
まあ、召喚したライダー……神話に語られるあのメドゥーサにすら心配されるような状況で何を、というものはあるし、実際、正直なところライダーの魔力供給だけでも割と一杯一杯ではあるのだが、ライダー自身は善良であるし、何より本当に今更だ。僅かな希望にでも縋らなくては、いつか心が壊れてしまうだろう。
それでもほんの僅かの期間、この倦怠感に耐えるだけ。それだけでこの日常を謳歌することができる。更に、その記念すべき初日には朝から先輩と二人きり。表面上はいつも通りながらも、はっきり言って間桐桜は内心ウハウハ状態だった。
お爺様に不自然に思われないくらい、気持ち早めに家を出て、浮かれ気分で何時もの道を歩き、然程も経たずに呼び鈴を鳴らす。この家に暮らす意中の人は一人暮らし。となれば必然、応対するのは彼となる。ごくたまに職員会議なんなりで藤村先生が扉を開け放ったりすることもあるにはあるが、今日に限ればそれもない。
『はーい、今開けますね～』
しかし、ここに例外が存在する。予想だにしないその声に身構え、私は怪訝な顔をする。
（……誰？）
聞き覚えのない声だ。それはまあいい。そもそもここは先輩の家、たとえ中に誰がいたとして、私は口出しできる立場にない。

女性の声だった。それもいい。いや、良くはないが先輩のことだ。彼に一晩やそこらで女性をコマすような度胸も能力もない。そうであるならいつでもウェルカムな私の立場がないので、これは限りなく正解に近いだろう。

だが、それが明らかに未成熟の少女が放つような甲高い声で、それも玄関を任される状況とはどういうことなのだ？

そのように考えていると、ガチャリ、と扉が開き、中から現れた声相応の姿と、あからさまに奇異な格好に目眩がする。

「えっと、貴女は……」

「あ、もしかして間桐桜さん、ですか？　マス……げふんげふん。士郎さんから話は伺っています。中へどうぞ」

「は、はい……」

混乱する脳をフル回転させてかろうじて対応するものの、正直言って叫びたい気分でいっぱいだった。

マスター、上手く誤魔化したつもりかどうかは知らないが、彼女はまず間違いなく先輩のことをそのように定義した。それに加え、不自然なほど整った容姿に奇異な格好。何よりもライダーに勝るとも劣らない異常な魔力…！

おまけに、目を凝らせば私のマスターとしての能力で、彼女のステータスを視認することもできる。ここまで材料が揃えば、私がどれほど愚鈍でも、彼女の正体については察せられる。すなわち、サーヴァント。

でも、どうして先輩の家にサーヴァントが。だって先輩には、魔術なんてそんな穢れたモノは、きっとだれより似合わない人、なのに――

私が玄関前で呆然としていると、件の彼女が話しかけてくる。

「あの、大丈夫ですか？　低血圧でしたら、よろしければ肩をお貸ししますが」

「あ、いえ、貴女は――」

「ああ、私ですか？　諸事情により昨日からこちらに居候しています。ランサーとでもお呼びください」

隠す気ねぇなこのガキ。
昨日から唐突に現れた居候を自称する少女。それだけでも役満なのに、クラス名まで名乗られてはもはや誤魔化しようもない。というかもう少し考えてから発言しろと言いたい。サーヴァントを兄に譲ったとはいえ私はマスターだぞ。仮に私が兄さんのように血気盛んな人物だったらどうするつもりだったのか。それともこれは余裕の表れか。だれが何をしようとも迎え撃つ、と。
ともあれ、ここまで明け透けに対応されると流石の私も彼女のことを報告せざるを得ない。そうなると必然、この家にもお爺様の干渉が及ぶわけで、彼女がどういうつもりで話しかけて来たのかはわからないが、敵のマスターである私を絶望させるために言い逃れできない状況を作り出したのなら大したサーヴァントであると思う。まさか彼女が私の事情を知る由もないし、そんなはずはないと分かりきっているが。
軽く絶望したまま、されるがままに衛宮家の居間にまで案内され、そこでようやく意識が回復する。その時、胃痛のタネにして元凶が柔らかな口調で声をかけてくる。
「粗茶ですが、どうぞ」
「あ、ありがとうございます。ええと、ら、ランサー……ちゃん？」
テーブルの上に置かれる湯呑み。私はそれを、特に警戒もせずに受け取ると……いや、待て。
（……これ、どこから――）
今、私が手に持っているどこにでもあるような湯呑み。並々とお茶と思しき液体が注がれているこれを、彼女はどうやって用意した？
いくら呆然としていたからと、事前に湯呑みが置いてあれば気づくし、要注意人物である彼女からは片時も視線を逸らしていなかった。それは細かな所作まで確認できるほどの精神状態ではなかったが、彼女がキッチンへと向かっていないのは明確な事実。彼女の能力ないし魔術の一種、だろうか？
「お越しいただき誠に申し訳ありませんが、今、家主は体調不良で寝込んで……あ」

「？」
「いえ、訂正します。どうやら起きたみたいですね。グッドタイミング、です」
待て。今、どうやってそれを知った。物音一つしなかったぞおい。サーヴァントとしての力か。マスターと繋がってるから？　そうなんだろコラ。
あ、怪しすぎる……。正直、先輩のサーヴァントじゃなかったら今すぐに兄さんを煽って突撃をかましたい。兄さんの現状からして実に名案だと思う。それはできない、という一点を除いての話だが。
そもそも、この子の格好はどういうことだ。全体的に子どもっぽいのは外見に合っているからともかく、妙に露出度が高いのは一丁前に先輩を誘惑しているつもりか。ふざけるな、先輩はその程度の露出では靡かんぞ。なんせ風呂上がり濡れバスタオル姿の私が目の前を通っても料理に集中しているくらいだからな！
（あ、やばい。なんか泣けてきた……）
だが、悪いこととは重なるもので、直後に私は、とんでもない光景を目にすることになる。
「士郎～～、牛乳～～」
「わかった、わかったから離せ遠坂！　俺を揺すっても牛乳は出ないぞ!?」
「わぁってるわよ～～、胸を絞るんでしょ～～」
「違う！　というか触るな！　寄り掛かるのもいい加減に……桜!?
いつのまに――」
「……」
ぴきり。私のこめかみに、そんな効果音が鳴らされた気がする。
否、気がする、どころではなく、比喩表現ではあるが、推定サーヴァントである隣の少女が思わず後ずさる程度には態度にも出してしまったらしい。失態だ、と悟るよりも先に、私は感情に任せ、この状況に激昂する。
「――遠坂先輩？」
「ん～～？　って、さくら……桜!?　どうして――」

「どうして、は私の台詞です。先輩も、もっと抵抗らしい抵抗を示してください。まさかとは思いますが、役得、なんて思ってはいませんよね？」
「っっ～～!!」
　そこでようやく戸惑いよりも羞恥心が勝ったのか、慌てて彼は遠坂先輩を引き剥がす。この時点で多少の溜飲は下りたが、まだ納得はしていない。むしろこっちが本題だ。何故、こんな朝早くから、遠坂先輩がこの家にいる？
　言い逃れができないようにやんわりと追い込みながら追及すると、遠坂先輩はバツが悪そうに、
「あー……そのね、桜。私実は、士郎と付き合うことになって」
「言い訳はいりません。というかそれ、言い訳としては最上ですけど、それはそれで問題が大きくなってる気がします。うっかりそう言ってしまったのなら改めてください。……この尻軽」
「うぐっ……って。なんか今、聞き捨てならない言葉が聞こえてきたんだけど」
「気の所為では？　一晩でロクに交流のない同級生と恋人になった遠坂さん？」
「あーもう！　言いたいことがあるならはっきり言いなさいよ！」
　右拳を外受けの如く天に構えて遠坂先輩が吠える。言いたいこと、それは山程あるとも。しかし私は、それを面と向かって言う気はない。いきなり脈絡もなく同級生の家に泊まり込むような慎みのカケラもない尻軽女とは違うのだ。
「やれやれ。これで乗せられるようなら、まだまだ未熟者だな、凛」
「アーチャー！　勝手に出てきて、いきなり言う言葉がそれ!?」
「勝手に、とは心外だな。この家の者の許可は得ているとも。そこの小僧の代わりに朝食を用意するよう依頼されてな。身から出た錆だ、まさか断れまい？」
「くっ……！」
（……アーチャー？）
　またしても唐突に、今までいつのまにかキッチンを我が物顔で支配

していたらしい色黒の男性が、いくつかの器を持ちながらひょいと顔を出して遠坂先輩を煽る。
何を勝手に、と先に黒い感情が漏れ出そうになったが、状況を推察することを優先して無理やり気を落ち着かせる。
アーチャーと、確かに遠坂先輩はそう言った。聞き覚えがあるのは、それもそのはず、その称号は、今もまだ隣にいるこの少女と同じ、聖杯戦争の――
（まさか、同盟？　昨日の今日で――でも、先輩も姉さんも、今起きてる昏睡事件のことを気に病んでるとしたら、あり得なくは――）
今ひとつ経緯こそ掴めないが、彼女がこの家にいる理由は納得した。とはいえ、流石に泊まり込むのも抱きついて牛乳をねだるのもどうかと思うが。もしも最悪の事態に陥っていた場合、私は彼女を包丁なりで刺す必要があるため、互いのためにもここは追及を避けるべきであろう。
そうだ、そうするべきなのだ。ああ、でも、でも！　どうして、よりにもよって遠坂先輩なのだ。もし、もしも彼女と比較されでもしたら、私は身を引くしかないだろう――！
「……桜？」
「あ――せん、ぱい？」
「ごめんな、桜。なんか騒がしくて。俺も正直、よく状況が掴めていないんだけど、いずれ事情を話すから今は我慢してくれ」
「が、我慢だなんて、そんな――」
「ほら、まずは食事だ。なんかあのアーチャーってやつが用意してくれたみたいだし、今日のところは有り難くご相伴にあずかろう」
「……はい」
――ああ、なんて。なんて安い女なのだろう、私は。
何一つ解決していないのに。何も説明されていないのに。誤魔化されたに等しいのに。ただ優しく、先輩に声を掛けられただけで、それで全てを許してしまう。
結局、私はそれ以上の追及も詮索もできず――ただ、この状況を伝

えなくてはならない己の立場を、心底憎らしく思うのだった。

「あら、美味しいわね、これ」
「くっ、負けた……!?」
「――ふっ」
「あ、ほんとに美味しい……」
（……フレンチトーストって、割と近年にレシピが広まったような――いえ、似たような料理は5世紀からあったみたいですし、気の所為ですよね）

ただ、まあ、当然。追及しないのであれば、謎は無限に積み重なるばかりではあったが。とりあえずやたら料理が上手いアーチャーさんと、そんな彼の料理を黙々と頬張るランサーちゃんの姿がとても印象的だった。

☆☆☆

「『他者封印・鮮血神殿（ブラッドフォート・アンドロメダ）』？」
「はい。ゴルゴン三姉妹が追放された島に作られたという、訪れたものを石にする結界です。また、内部の者を吸収して生命力を奪う能力もあるんだとか」
「……なんでそれを知っているかはともかく、学校内に結界の基点らしきものがあるのは既にいくつか確認したわ。これが世に聞くゴルゴーン、つまりはメドゥーサのものだと言うなら、中にいる生徒はイチコロね。もちろん、私たちも例外じゃない。どちらが本当の狙いかは知らないけど、やってくれるじゃない」
「なっ……！」
学校の屋上にて。ランサーを召喚し、遠坂と成り行きで同盟まで結んだ翌日……否、その日の正午。

「いつ狙われても不思議じゃない」とのことで『霊体化』という幽霊状態となってわざわざ学校まで付いてきたランサーだったが、学校についてまず発言（『念話』とかで脳内に直接伝えられた）したのが「この学校に結界が張られている」という物騒極まるもの。

加えて、詳しく話を聞いてみれば先ほどの内容。流石に杞憂だろうと昼休憩に遠坂を呼び出して、念のために確認をすればむしろ後押しをされて驚愕する。

この街が戦場と化しているのは理解していたつもりだったが、まだ認識が甘かった、甘過ぎた。魔術師にとって、一般人とは本当に餌でしかなく、本当の意味で、彼らに良識など存在しないのだ。

「対策は大きく分けてみっつです。

ひとつ、結界をどうにかする。無力化ないしは破壊して機能しない状態にする。おそらくは一番楽な選択肢ですが、対処療法でしかないのが欠点……でしょうか」

「コレと同じモノがいくつ張られているかも分からん。無論、壊せるなら早めに壊した方がいいのは確かだが、根本的な解決にはならんな」

その理由は分かる。確かに比較的妨害は少ないだろうが、人の命が懸かっているんだ。イタチごっこでいたずらに時間を消費するようでは話にもならない。それは分かる。わかるのだが……何故だろうか。ランサーはともかく、それをこのアーチャーに言われると非常に腹が立つのは。今朝の料理の件が自分で思っている以上に堪えているのかもしれない。

「ふたつ。下手人を打破する。連鎖してこの結界が消滅するのかは分かりませんが、そうすれば少なくとも起動することはなくなります。ただ…」

「難易度はひとつめと比べて桁違い。加えて慌ててこの結界を起動させられる可能性もある。マスターについても同様ね。サーヴァントを繋ぎ止めるマスターはその英霊の弱点と同じ。死に物狂いで守るでしょう」

「ええ、ですので、みっつめの案です」

ランサーはそこで一度言葉を区切り、もこもこした白い服と、頭の長いリボンを風に靡かせて告げる。
「みっつ。説得して止めさせる。如何にもマスターが好きそうな案でしょう？　まあ尤も、いくつか下準備が必要となりますし、一番困難な道であるのは否定しませんが、貴方はそういう苦境で諦めない。ですよね？」
「……ああ、そうだな」
同意を求められ、静かに、力強く頷く。そうだ、戦争だからと破壊だと打破だのと物騒なことばかり考えてはいたが、説得が出来るようならそれに越した事はない。そもそも、すぐ隣にいる遠坂だって話し合って同盟を結んだのだ。仮に交渉が決裂して対峙することとなっても、やってみる価値はある。
決意を新たにしていると、不意に遠坂が告げる。
「……わかったわ。どうせ貴方のことだから、反論なんて聞き入れないんでしょうし、説得が出来るならこれ以上はないのも確かね。だけど今日から早速、というわけにはいかないわ。まずは先に町外れにある冬木の教会に向かうわよ。この結界も、今日明日で起動するわけじゃなさそうだし、新たな参加者を監督者に伝えておかなきゃ」
「監督者？」
「そう。嫌な奴だけど、もしも私や衛宮くんが敗北してサーヴァントを失ったとして、魔術師だからとこの結界みたいに餌にされては堪らないでしょう？　そういった人を保護するために、この聖杯戦争には監督者と呼ばれる人間を一人置いてるのよ。他には、戦争により街に及んだ被害を誤魔化したりもしてるわ」
「へぇ……じゃあ、あの昏睡事件をガス会社の仕業にしてるのもそいつか？」
「そうね。今はまだ昏睡程度だから見逃されているみたいだけど、隠蔽しきれないとそいつが判断したら討伐依頼が降ることもある。そういったことも、あいつの仕事だから」
「さっきからあいつ、嫌な奴、とか言ってるけど、知り合いか？」
「当然でしょ、私の後見人だし。名前は言峰綺礼って言うんだけど、

はっきり言って、綺礼なんて名前に見合わない、腹の底から真っ黒な奴よ」

「――！」

心底うんざりした顔でそう締め括る遠坂に、何故かランサーは驚愕の眼差しを向けていた、ような気がした。

……

……

…

「はじめまして、わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

白い肌に白銀の髪。満月に足りない月光と、門燈の淡い明りでも、最上級の紅玉を思わせる瞳は明らかだった。年齢は小学校の高学年ぐらいか。

その身を飾るのは、いかにも高価そうな紫色のコートと帽子。それが余計に、少女を等身大のビスクドールのように見せていた。整いすぎるほど整った顔立ちは、一度目にしたら忘れないだろう。

当然、俺も覚えていた。一度すれ違った程度の関係だが、郊外の道の中心に我が物顔で居座り、優雅にコートの裾を持ち上げて貴婦人の礼をする彼女に見覚えがあった。

「あら、返事はなし？　日本人は礼に厚いって聞いてたけど、貴方は随分と無礼なのね」

しかし、そんなことは些細なことだ。たとえ彼女の位置に最上の美女が裸で居たとしても、そちらに視線を向けることはしないであろう。何故なら、何よりも本能的に目を惹くのは、彼女の後ろに立つ、異様な存在――！

「……やば。あいつ、桁違いだ」

そこに、鉛色をした死の具現が立っていた。巨人だった。荒々しく

削りだされた巨岩の彫像のような筋肉に鎧われた。絶対に人ではない。三メートル近くはありそうな巨躯だが、巨人症の人間ではありえない、黄金比の体格を持っている。
「まあいいわ――やっちゃえ、バーサーカー」
鉛色の巨人が、おどろに乱れた髪を振り立てて咆哮する。人知を超えた存在であるサーヴァント、そのあまりにも無骨な剣と呼ぶにも不適な石塊の斧の一撃は、ただでさえサーヴァントの脅威を見誤っていた自身に避けられるはずはなく。
「っ――」
ギィィン!! と、火花が夜の帳を一瞬とはいえ掻き消すほどの衝撃が空を舞う。
嵐のような一撃を受け止めたのは、ともすればイリヤスフィールと名乗った少女と同年代にも見える、こちら側にいる誰よりも幼い少女。そんな彼女が、倍近くある体格の怪物の攻撃を受け止める様は、悪い意味で現実味がまるで湧かない光景だった。
「っっっ、メガロスよりはマシ、ですが……長くは――マスター!」
「あ、ああ、何だ!?」
「宝具を使用します。この私では一回が限度ですが、その隙に逃げてください!」
「宝具?」
「説明は後です、早く――っあああ!!」
彼女が言い切るよりも先に、身体からごっそり魔力を奪われて目眩がする。が、先の発言を思い出してどうにか持ち直し、彼女も、と視線を向けると。
「――これは憎悪によって磨かれた、っ、ぐうっ…!?」
瞬間、彼女の身体から黒い炎が燃え盛る。怨念をそのままカタチにしたような輝かない炎は見るからに異様であり、加えてそれは、まるで彼女を燃料にしているかのごとく燃えている。
反射的に思わず手を伸ばすも、それは彼女の意を察した遠坂によって引き離され――
「擬似解放――『吼え立てよ、我が憤怒(ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン)』!!!」

その絶叫と共に、周囲の空間を染め上げんと漆黒の火柱が舞い踊る。俺はその光景を前に、何もせず逃げ帰る事しか出来なかった。

うたかたの夢：ＥＸ

救う、という行為は、本来傲慢なモノである――と、師匠は言った。
そんなことはない、と反論したかった。しかし彼は、続けざまにこうも述べた。その傲慢さを容認しなくては、人は人を引っ張り上げられない。何故なら、
『個々人を救済するのは簡単です。救うべき者、救いたい彼ら彼女らに対し、思いを砕けばそれでいい。ですが、それには、どうしても救う人間の欲望（エゴ）が付き纏うモノ。故に、全てを救う、などと宣う者がいるとすれば、それは誰よりも欲深い者に違いありません。例えるなら、そう――ゲーティア、ティアマト、殺生院キアラ、カーマと言った者たちのように』
彼が例として挙げた名前は、例えとしては最上であっても、されど比較するにはあまりにあんまりな、人類悪と呼ばれた者たち。
人類を愛するが故に人類を滅ぼし、その功績、本性によって人理を揺るがした大災害。欲望の化身としてその名を、そのクラスを当て嵌められた獣たち。
『彼ら彼女らの例を見れば分かるように「救い」とは身勝手な押し付けに過ぎず、度を越せばそれだけその者にとっても害になる。まあ、流石に貴女があそこまで突き抜けるなどとは微塵も思ってはいませんが、貴女が今後も誰かを救うつもりであるならば、それが決して押し付けにならないよう、そうでなくても、それは自分がそうしたいからそうしているのだ、ということを、心のどこかに留めておいてください』
言われて一つ、思い出す。忘れるはずもない私の原点。本来なら存在しないサーヴァントであるはずの私が、色んな人に支えられながら、助けられながら歩んだ軌跡。
――まだまだ未熟で、マルタさんに諭されていた自覚さえもなかった頃の、苦くて甘くて、けれど暖かい思い出。
それが、その想いがたとえ、トナカイ（あの人）さんの『傲慢』だったとして

も。私は常にこうありたいと、その想いを守りたいと、そのような人物になりたいと。心の底から、誓ったのだ。

☆☆☆

「……」

大仰な掛け声と共に振り下ろされる竹刀を、私は無感情に眺める。

全身に『強化』をかけてのその一撃は、確かに全力ではあるのだろう。でも、それには相手を打ち倒す意思、脅威というものがまるで感じられない。おそらくは彼も無意識のうちにしていること。だが、しかし、だからこそ。そんなことではお話にもならない。

「丸腰の相手だから。庇ってもらったから。幼い少女だから。敵ではないから。ただの手合わせだから――ダメですね、ダメダメです」

「ぐっ……ぅ!?」

あえて力の差を思い知らせるため、文字通り、指先一つで捻り潰す。具体的には、人差し指を刀身に合わせ、強引に竹刀を破壊して力任せに押し倒す。

私の筋力のランクはC。すなわち数多のサーヴァントにおける平均値だが、それはあくまでサーヴァントとしての括りで見た場合の話。たとえEランクでも人類の限界を軽々と超越し、Aランクともなれば素手で象をも叩き潰す。規格というただ一点、我々がグランドサーヴァントに太刀打ちできないように、サーヴァントとしての根本的な問題さえ、彼には解決もできないのだ。

「せめて殺す気で――とまでは言いませんが、最低限、外見だけで侮るのはやめてください。誰かに変装した逸話を持つ英霊は、少女どころか赤ん坊にまで化けられるようなのも存在します。手加減など烏滸がましい。それでも、と息巻くなら――」

「ぐっ――おぉお……っ、くっ……」

「……」

それでも。諦められないのか、単なる意地か見栄なのか。必死に起き上がろうとする彼を片手で制しながら、努めて平静に、突き放すように。

「――そうであるなら、私が止めます。貴方が潰れる様を見るのは、私の方が堪えそうですから」

なるべく理不尽に感じるよう、力に飽かせてじんわりとマスターを絞め落とし、反論ごと封じ込めて道場の片隅に放り捨てる。扱いが雑に思えるかもしれないが、あのバーサーカー……ヘラクレスさんに対峙してなお、「俺がどうにかしないと」などと宣う命知らずなら、多少の生傷なんて気にもしないはずだ。

（………………）

ボロ切れのように転がるマスターと、それを無感情に眺めている自分を客観視して、今の私が、おそらく自分が思っている以上にあちらの私に引き摺られている事実を改めて自覚し、しかしそれさえも大した問題ではないと感じている、まるで本来の私のような思考に内心で頭を抱える。

いや、そもそも私はこんな性格だっただろうか？　お節介を焼くにしても、些か過激に過ぎる気がする。とはいえ、元々からして私は存在し得ない人格だ。であればこそ、むしろ私がこうして『????????・??????』として現界している方がおかしいのであって――

（――止めましょう。不毛ですし、今はそんなことを考えてる場合でもありません。それに、戦力が足りないのは事実です。マスターを駆り出すのは論外としても、私一人では、到底……いぇ）

そこでようやく、マスターが転がっている方向とは逆側、険しい顔で事の成り行きを見守っていた遠坂さんに向き直り、視線がそちらへ向いたのを察したのか、彼女が神妙な顔で声をかけてきた。

「……いいの？　あいつは、アンタを心配して――」

「はい。あれを前にして『並び立つための力が欲しい』など、考え得る限り最悪の選択です」

足りないものは他所から。それが魔術師の基本。そうでなくても、私という武器の性能すら把握しようとせず、それを放り捨てて挑もう

などと愚の骨頂、です」
　それに、と続ける。そもそも、一人で全てを成そうなど、誰であってもできるはずがない。その結末を目の前にして、何を考えているのだ。いや、彼自身、単なる善意ないし責任感から来るものだとは分かってはいるのだが。でも。
「残念ながら、人の出来ることに限界はありません。私の知る限り、ごく一部、真の意味で『全てを救う』と宣った輩は、本当にそれだけの能力があって、それ故にそのことごとくが特大の『悪』として立ち塞がってきました。私は彼の意思を尊重こそしますが、従者として、主人が誤った道を選んだのなら止める義務がある。
　法螺吹きや大馬鹿者で済めばまだマシです。ですが、彼の目指す正義の味方の行き着く果ては、最終的な結論は、ごく僅かな例外を除いて『外道』だと相場が決まっています。……そうなる彼を見てしまうのは、あまりに偲びありませんから」
「……そう」
　私の言葉に、何かしら思うところがあったのか、遠坂さんは一瞬だけ視線を明後日の方向へと向ける。
　その先には何があるのか。世界の恒久的な平和を願う人物に心当たりがあるのか。それとも単にマスターを見ていられなかったのか。わからない。私には、何も。この選択が最善であるのかも。分かるのはただ、この選択が私の身勝手な傲慢であるということだけで。
（……お師匠様。私は――）
　思い返すのは、奇しくも彼と同じ名前を持つ、私が世界で二番目に尊敬する人物の姿。彼がその人のようにならないためにも、私はサーヴァントとして、彼を導いてみせる。
　きっとそれが、これほどまでに歪で曖昧な存在の私が、この地に呼ばれた理由なんだと思うから。
「それはそうと、どうして一人暮らしの高校生の家に道場なんかが……」
「あー……それは、あの後ちょっと調べてみたんだけど、あいつのお父さん、どうやら相当やばい魔術師だったみたいで、その関係ね。加え

て、どうも話を聞くに無理な魔術行使が祟って、その……頭とか、色々とガタが来てたみたいでね。まともな継承を行なっていないのもその関係でしょう。正直、あいつの魔術を初めて見たとき、アタシは絶句するしかなかったわ」
「魔術については、私はあまり詳しく有りませんが……それほどに？」
「テレビの映りが微妙に悪いからって、それを横からバンバンと叩くためだけに右手を移植するようなことをたかが『解析』のために毎回やっているんだもの。流石の私も、あれにはドン引きよ」
　なんと。あの後、私が命からがら逃げ帰った後すぐ、作戦会議の途中で遠坂さんが突然騒ぎ立てるから何かがあると思えば、確かにそれは恐ろしい。それが本当なら、いつ、不意に命を落としてもおかしくないほどに。でも。
「あれ？　　でもさっき、正直微妙でしたが『強化』っぽいものを」
「あんなのは即座に矯正よ、矯正。魔力不足はアンタがどっかから出したあのまなぷり？とかである程度解決したけど、その魔力をドブに捨てるような真似、させてたまるもんですか」
「……実のところ、アレはあまり大量にあるものではないので、助かります」
　常日頃から資材不足に悩まされていた弊カルデアでは、プレゼントを集めるだけでも一苦労だった。それが直接的に戦闘に役立つものとなると、尚更。とはいえ、出し惜しみは厳禁。使うべきときには惜しみなく使う。基本である。
「それで結局、キャスターの対処はどうするの？　　龍脈を一通り巡るって話だけど、まだ私は学生だから足はない。それに、士郎だって」
「それについてはご安心を。というか遠坂さんはまだサーヴァントを微妙に見誤っていますね。大陸横断するわけでもなし、足なんて極論、アーチャーさんに担いでもらえばそれで十分です。とはいえ、まだアサシンもキャスターの正体も判明していない今、それでは正直不安なので――」
　マスターの保護。敵の攻略。両方をやらねばならないのがサーヴァントの辛いところ。しかし、幸いにも私は非常に特殊かつ混沌と

した技能を持つ特別な存在。であればこそ、ここは私が一肌脱いで、協力者である遠坂さんに私の有用性を示すとしよう。
「ここは一つ。知人に肖って、優雅に華麗に大胆に。空の旅でも洒落込むとしましょうか」

☆☆☆

遠坂凛は困惑していた。
昨晩、殆ど成り行きで結ばれてしまった衛宮士郎との同盟。今となっては割と有用であることが逆に腹立たしいそれは、つい先ほど遭遇したバーサーカー及びアインツベルンのマスターの問題も含め、より強固なものになってしまったと言っていいだろう。
正直なところ、それ自体に異論はない。街を覆う脅威に対し私1人では手が回らないことは明白であるし、衛宮士郎とそのサーヴァントも人格的には好ましく思っている。聖杯戦争そのものを円滑に進めたい身としては、面倒なしがらみもない手札が増えるのはそれだけで便利ではある。
だが、現状、足を引っ張っているのはおそらくこちらだ。そのことが私のプライドを刺激する。貴重な宝石を消費してまで衛宮士郎に助力したのも、あのとき率先して殿を務めたこの可愛らしいサーヴァントに対する報酬の意図がなかったかと聞かれたら否定はしない。だからこそ私は、この少女の提案にも好意的に受領するつもりであった。
しかし――
「……何コレ」
「よくぞ聞いてくれました。これこそが私ことランサーの宝具……とは、少し違いますが、秘密道具が一つ。その名も、『ラムレイ三号』といいます」
「わざわざ庭にまで呼び出して何を出すのかと思えば……これは、

ソリかしら？　えーと、これをどうするって？」
「乗って飛びます。空に。こう、スィーっと」
「――できるわけないでしょうが!!」
たっぷりと溜めて反論する。言われたランサーは、あれから気絶したままの衛宮くんを軽々と担ぎながらも、無駄に得意満面な顔をしている。
本当になんなのだろう、これは。この際、どこからこんなものを取り出したのかはどうでもいいとして、こんな謎のメルヘンチックな乗り物でキャスターの根城を暴こうなどと正気か。
いや、そもそもこんなふざけた乗り物が浮遊するなどあり得るのか。空中浮遊は高位の魔術だ。それも、浮遊させる対象の質量があればあるだけ難易度は跳ね上がる。見たところソリ自体の大きさはそれほどでもないようだが、それでも人が乗り込むことを前提にすれば相当の重さになる。
当然ではあるが、それなりに優秀な魔術師であるこの私にも、これだけの質量を持ち運べる魔術を使用することはできない。なのに気安く飛ぶ、などと。この少女は魔術を馬鹿にしているのだろうか。いや、そうに違いない。
「失敬な。これは私が幾多の協力者を募って前任者より借り受けたものを解析、複製してスケールダウンさせた自慢の一品。オリジナルのような出鱈目な速度こそ出ませんが、耐久性や安定性はランクD相当の宝具並みというモンスターマシンですよ？」
「いや、ですよ？　って言われてもねぇ……そもそも前任者って誰のことよ」
マジマジとモンスターマシンとやらを見つめながらそう問えば、流石の彼女も直接的に真名にかかるであろう情報は言えないのか、上手いことはぐらかされる。
それから数分は疑いの目を向けていたのだが、あまりに彼女が自信満々なのと、それまでのこの少女の色々な意味での非常識っぷりから半信半疑にそのソリを『解析』し……メルヘンな外見に隠された、冗談のように綿密に編まれた無数の術式と、それ以上に精密に組み込ま

れた機械群の数々に驚愕する。
「冗談でしょ……？　　いえ、完成度もそうだけど、こんなもの、まともな魔術師に作れるはずが――」
「製作者に言わせると、これほどまでに便利なものを排他する精神こそが非生産的である、だそうです。すなわち、魔術師こそがまともとは言えないと。ですので、キャスターの根城を暴く足としては、これ以上のものはないと思いませんか？」
「純機械製のかぼちゃの馬車なんて、また随分と夢のない話ね。いつから私はＳＦの世界に迷い込んだのかしら？」
「過去の英雄を蘇らせて使役するのも大概のような……」
「黙らっしゃい。……とにかく、アンタが改めて出鱈目なサーヴァントだってのは再認識したわ。アーチャー！　　アンタもそれでいいわね？」
「……了解した」
　いよいよ以って頭痛が酷くなってきたので、やや強引に話を切り上げ、念のために予備の足に確認を取ってから、覚悟を決めて座席に乗り込む。妙に歯切れが悪いのは、こいつもこいつで何か思うところがあるのか。
　無駄に座り心地の良い感触が、己の思考を正気へと誘う。すなわち、自分は一体何をしているのか、と。思えば、この生意気なアーチャーを召喚してからというものの、私の精神というか平静さ、余裕だとかそういうアレがみるみる削られているような気がする。尊敬していた両親を失った戦争、相応の覚悟はしていたつもりだったのだが、まさかこういう方向性で頭を悩ます羽目になるとは。
「……そもそも聖杯戦争が常識外のモノを呼び出すわけでして、貴女の常識が通用するはずも……」
「……アーチャー」
「……何かね？」
　器用に衛宮くんを座席に座らせつつ、なおも不満げに呟く少女の姿に嫌な予感が拭えず、ある意味では順当な結果として、私の矛先が彼女と同じサーヴァントである自称：記憶喪失の大男へと向く。

端的に言えば、不安になってきたのだ。この嫌味ったらしい皮肉屋が、記憶喪失に託けて何かとんでもない地雷を抱えているのではないかと。

「アンタ、まだ記憶は戻らないの？」

「凛、彼女の前でその話題は……」

「うっさいわね。そもそもアンタが記憶喪失になんてならなきゃここでこんな話はしていないっての。……ああ、そうだランサー。アンタ、何故か他のサーヴァントに詳しいみたいだし、こいつについて何か知ってたりはしない？」

「え？？　あ、その、それは――」

（――んん？）

予想外の反応に、思わず彼女のことを注視する。

惚けるでもなく、不安げに視線を彷徨わせる様は、まさしく親に叱られた子どもに近しい。既に私は彼女のことを見た目通りの年齢だとは微塵も思ってはいないのだが、それでも容姿からでしか判断できないものはあり、また逆に、その容姿に相応しい情報を照らし合わせることはできる。

そして私は、自身の勘を疑わない。だからこそ時折とんでもないミスを誘発してしまうのだが、今回に限ってはそれが上手く噛み合ってしまったらしく、強引に迫る私に、彼女はおどおどと所在無さげにしながら、アーチャーの様子を伺いつつも告げる。

「かつて、誰かが言っていました。

自分には名前がない。そういう存在として選ばれた元となった人物はいるが、自分は名も無き『正義の味方』のうちの1人でしかなく、故に、私は名乗るべき名を持ち合わせない」

――すなわち、『無銘』と。

おっかなびっくり呟いた彼女を、アーチャーは無言で見つめていた。睨んでいた、わけではない。むしろその言葉に納得しているように、文脈からしてその『誰か』は明らかであるのに、それを否定するわけでもなく。罪を受け入れる咎人のように、無言でその場に佇んでいる。

（……つまりアーチャーのあの言葉、記憶が曖昧だってのは嘘じゃなかった、ってわけだ。そして、だからこそ彼女は……）
「……だから、貴女は衛宮くんを止めようと？」
「そういうことになるのでしょうか？　　正直、私にもよくわかりません」
「でしょうね。結局、なんだかんだ置き去りにはしていないわけだし。でも、自分の名前さえ忘れても止まれない『誰か』。そういう存在を知っているからこそ、あいつに二の舞を演じて欲しくはない、と。そして、その口ぶりだと貴女、何かしらの機会にアーチャーと会ったことがあるわけだ？」
「はい。ただ利得からサンタクロースを目指した愚かな私を、彼は先達のサンタが一人、『サンタム』さんとして、我が道を示してくれました。つまりは恩師の一人になります。ですので、積極的に戦いたくないのが本音です」
「……は？」
「あ……」
　なんだ今の世迷言は。サンタが何だって？　　彼女はこれまでの対応からして、馬鹿げた内容も誤魔化したりはせず律儀に発言する困ったちゃんではあるが、だからこそ冗談を吐くようには見えなかったのだが。
「う……」
「あ、ああ！　　おはようございます、マスター。早速ですが出発しますよ！　念のため、しっかり掴まっていてください！」
「きゃっ――」
「あ……？」
　思考を巡らせているうちに、ようやく、というべきか、もう、と表現するべきなのか、それまでぐったりとしていた衛宮くんの意識が復帰する。それに合わせて割と強引にソリを浮遊させる。あからさまにはぐらかされたが、それに関する追及も、本当に空を翔けた謎のソリの衝撃に打ち消される。彼の返事が空返事なのはまだ意識がはっきりしていないからか。まあ、それもそのうち醒めるだろう。

「……ヘリや飛行機なんかよりよっぽど静かで快適なのが逆に腹立つわね」
「凛……」
嘘だ。見栄を張った。私はヘリに乗ったことはない。飛行機だってケチってエコノミークラスに乗ったのが数回程度でしかない。しかし、それでもこの乗り物がそれよりも上等であろうことは想像に難くない。
そこでふと、喉元に引っかかっていた疑問が今更になって脳を巡る。
（……なんだっけ。よく聞き取れなかったけど……サンタクロース？
まあ、そう言われると、確かにこの乗り物はそれっぽくはあるけど……）
冷静になって考えればむしろ何故それを連想しなかったのか疑問なくらいあからさまな乗り物なのだが、まさかサーヴァントとサンタクロースを結び付けられるはずもなし、迂闊だったとは到底思えない。
夜風に揺れる長いリボン、赤と緑を組み合わせた彩色は、まさしくクリスマスのイメージカラーとして――
（いやいやいや。ないないない。まさかそんな、いくらなんでもそんなふざけたことがあってたまるもんですか）
頭に過ぎる疑問は結局、カタチにするのもあまりに馬鹿馬鹿し過ぎてただそう考えるだけに留まる。
結論から言うと、この時の私の選択は誤りではあった。何もかもが謎に包まれたサーヴァントである彼女の情報を入手する機会を逃したのだから。しかし、仮にこのタイミングでその質問をしたとして、それが何の役にも立たなかったであろうこともまた事実である。

☆☆☆

――キャスターよ。侵入者だ。人数は４名、奇怪な馬車で空を飛んでいる。迎撃は一応試みたが、此処より移動できん拙者にはどうにもならん。

アサシンからのその凶報が私の耳に入ったのは、私が柳洞寺に拵えた工房内にて、我が最愛のマスター……宗一郎様と共に、聖杯戦争の賞品……大聖杯について、私なりに思案を巡らせていた時のことだった。

「何ですって……？」

無意識に天を仰いでの一言。役立たずめ、という悪態は宗一郎様の手前、辛うじて堪える。

わざわざ聖杯戦争のルール違反を犯してまで召喚した護衛。それを逃走防止のためにと門に縛り付けたのが仇となったか。いや、まさか山門以外は強力な結界に覆われたこの場所に、それでも強引に空から攻め入るのを想定していなかった私のミスでもある。アサシンの言う『奇怪な馬車』がどういうものかは知らないが、それがアキレウスの持つような宝具で、対城宝具クラスの特攻が来る仮定するとこのままでは拙い……！

「何か、あったのか」

端的な言葉。口数こそ少ないものの、彼は本当に必要だと感じたことは遠慮なく尋ねる。しかし、今の私にそれに回答する余裕はない。何せ既に外敵と思われる物体は柳洞寺の直上にまで迫っている。

まさか暗示をかけたとはいえ一般人が多数を占めるこの寺に問答無用で対城クラスの一撃を放つとは流石の私も想像もしていないが、万全とはとても言い難い現状、どのようなカタチであれ、単純に結界を抜けられるだけで厳しい……！

（くっ……）

慌てて工房中の迎撃術式を可能な限り起動させる。たったそれだけのことで街中から掻き集めた魔力が目減りし、やはり我々は仮初めの主従関係でしかないことをひどく痛感させられる。

しかし、そのことを悔いることはしない。望んだのは私だ。我儘を

言っているのはあくまで私。ただ居心地が良いというだけで、私は彼を巻き込んだ。であればこそ私は、私の力で、
「――なるほど、敵か」
「っ……！　　そ、そんな、ことは――！」
「隠す必要はない。それで私は、何をすれば良い？」
「いえ、宗一郎様のお手を煩わせるなど――」
「キャスター」
（あ……）
　ただのかりそめの呼名。本名でもないその一言に込められた強い意思が、私からあらゆる反論を封じ込める。
　そして同時に、これを失いたくないと強く、強く決意する。そのためには、使えるものはなんでも――
「――たった今、柳洞寺に張っていた結界を破られました。感知した限り、おそらくは狙撃によるもの……アーチャーの仕業と思われます。しかし――」
「しかし、何だ」
「……報告では、敵は４名と。つまり、この戦争のルールから察するに」
「因果、というやつか。相手はそれを知ってか知らずか、いずれにしろ、そうされても仕方ない。そう思えるくらいには心当たりもある」
「……はい」
　あれだけ派手に街中から魔力をかき集めていたのだ。袋叩きにされる覚悟はあった。それが因果だと宗一郎様が言うのなら、なるほど私はその報いを受ける理由がある。
　しかし、彼は別だ。最悪、私はどうなっても、宗一郎様だけは――
（――いえ、そんな弱気ではいけないわ。私は、何としても、宗一郎様と共に）
　生前、終ぞ得られずにいた本物の感情。執着し過ぎている自覚はある。しかし、私にはもう止まらない、止められない。止まりたくない。
「……」
　神経質なまでに張り巡らせた警鐘が、今も私に侵入者の存在を伝え

続ける。敵集団の先頭に立つのは、身の丈以上の槍を持ったランサーと思わしき少女。どうやら相当高ランクの『対魔力』を保持しているらしく、作動する数々の罠を意にも介さず進んでいる。その整った容姿と愛らしい服装は、こんな状況でもなければ箱の中にでも閉じ込めて延々と愛でていたいくらいなのだが、あれだけ魔術の効果が薄いと拘束は難しいと判断せざるを得ない。

（頼みの綱の竜牙兵も、何故か手慣れた様子で撃退されている…彼女たちがここに着くのは、時間の問題ね）

「……宗一郎様」

「わかっている。そういうことが可能ならば、お前が知り得た情報があればなお有り難い」

「容易いことです。……ご武運を」

最後の激励には、ただ彼を心配する意図しか含まれていなかった。彼の武勇を期待したわけでも、言霊によるまじないをかけたわけでもない。でも。

「――了解した。期待に応えるとしよう」

その言葉に、一瞬だけ珍しく、本当に珍しく惚けたような表情を浮かべた後、滅多に見せない微かな笑顔を向けた彼に、私は彼への『強化』を更に念入りに、時間の許す限り重ね続けた。

……

……

……

「はぁっ!!」

大気に漂うマナを空間に収束・固定させ弾丸として構え、外敵に向けて撃ち放つ。

言葉で言うと単純で、これだけだと随分と安い表現ではあるが、こ

れが容易い行為であるはずもない。そも、魔力という形のない概念に指向性を持たせることから魔術師としての修行は始まり、非力な私ですら「殴った方が威力が高い」と言われる未熟な期間を通り過ぎるまでそれなりの時間を要した。

こうして『攻撃手段』として期待できる威力まで練り上げたのはいつ頃からだったか。あの男（イアソン）に騙されていた頃には既にこぶし大の投石程度の威力になっていた気はするが、それもあまり自信がない。とはいえ、それ故に基本中の基本であるこの技術は生涯にわたって精錬され、今では並みの英雄を一方的に打ちのめす弾幕すら張ることができる。

しかし。

「――ふっ！」

槍を大きく横薙ぎ。ただそれだけの動作で、数えきれないほど存在していた弾丸のことごとくが大気へ霧散する。基本的に『実体』が無いのが魔術の利点にして、この魔力弾の最大の弱点でもある。せめて投石であろうと物理的な障害が後に残されれば彼女も足を止めざるを得ないのだろうが、これだから英雄という存在はタチが悪い。

（話し合いは……いえ、唯一の勝機であった不意打ちを防がれた時点で、既に――）

横目でマスターである宗一郎様の様子を伺うも、全力の強化の甲斐もあってかアーチャーを相手に白兵戦で優位に立っているものの、助力の類は期待できず、させる気もない。

（でも……っ、）

――大魔術を容易に無力化できる英雄が跳梁跋扈するこの戦争において、キャスターというクラスは最弱と評される。

それは何故か。決まっている。魔術師の英霊……「おとぎばなしのまほうつかい」、その典型例として呼び出される正統派の魔術師――つまるところ、単なる魔術の詠唱者（キャスター）に過ぎない私が、魔術そのものを無力化されてしまえば、こと白兵戦において役立つことなど一つもない。それでは勝てるはずもない。

（……でも！）

如何にどれほどの対魔力があろうとも、限度というものは存在する。事実、目の間にいる彼女は私の攻撃に対し、必要最低限の防御行為を示した。つまり、それがたとえ微々たるダメージだったしても、全くの無力というわけじゃない。ならば、

（たとえ常人の万分の一のダメージしか通らないとしても、万人を殺す一撃があれば――）

「ハァァァァッッ!!」

「―むっ……!?」

工房に回していた魔力及び数々の足止め用の罠、その全てを彼女の足先へ集中させ、呪詛に変換して両足の動きを束縛する。

「……こっ、のぉ！」

「ッ――！」

即座に反応されて額に槍を投げられるも、魔力消費による蹌踉めきと攻撃そのものへの萎縮が奇跡的に噛み合い、辛うじて躱すことに成功する。凌いだ、とはとても言えないが、この際どれほど無様を晒そうとも最早どうでも良い。

「――っ、なら！」

高まる魔力に反応してか、彼女の手元に粒子が集うように『何か』が現れる。それは元々彼女の手にあったかの如くがっちりと握られて、動かない両足と併せ三角になるよう地面へ突き立て、投擲により崩れた体勢を修正する。

（宝具――！）

先に投擲された槍と外観はほぼ相違ないものの、一目で分かる明らかな相違点と、得物に籠められた段違いの魔力に怖気が走る。

（槍――じゃなくて、旗……!?）

持ち出した宝具に抵抗力を高める効果でもあるのか、流石に拘束から逃れることはできずとも、拘束をトリモチか何かのように引き摺りながらじわじわこちらへにじり寄ってくる彼女に冷や汗が隠せない。旗の先端に申し訳程度に備え付けられている穂先がこちらを貫くのが先か、こちらの魔術構築が完成するのが先か。残り１０ｍ。進行速度からこちらの方に分があるといえ、緊張で唇を噛みそうになる。し

かし――
（完成（クリア）――喰らいなさい。神代の魔女たるこのメディアが、生涯にわたって昇華させたこの一撃――）
「『神言魔術式・灰の花嫁（ヘカティック・グライアー）』!!」
「――!」
先の牽制とは比較にもならない、ランクにしてAの大魔術の重ねがけ、まともに喰らえば理論上はあのヘラクレスでさえ殺せる至高の魔術式――正真正銘、我が最強の一撃。無限の蓮撃魔弾。
迫る凶弾を、足を奪われた彼女に躱す術はない。これで――
「――『??????????????????』!」
空を裂き、空間を歪ませ、轟音と共に降り注ぐ魔弾が彼女へ到達するその直前――愛らしい唇が微かに動き、何かしらの神言を紡ぐ。
内容は聞き取れない。収束する魔弾の音が轟いているのもあるが、そもそも術式に集中してそれどころではないからだ。だが、その抵抗とも言えぬ些細な行動も、直後に炸裂した魔弾により余すことなく包み隠され――……!?
（な――）
魔術による魔弾は基本、実体として現世に存在を刻むことはない。つまり、仮にその全てが無力化された場合、必然、砂塵や煙となって視界に影響を及ぼすわけはなく――
「――あまり使いたくはありませんでしたが……」
（――無傷!?　そんな馬鹿な……!）
「使えるものは何でも使う。そうでなくては、人理など到底救えない――」
「……かっ、はっ――――!」
私の最強の一撃を、なんらかの方法で、それこそ砂塵を突き抜けるように無力化した彼女の、その細腕から出たとは思えない怪力によって腹を強打され、私の意識は闇に沈む。
最後に走馬灯のように過ぎるのは、宗一郎様が数分前に見せた微笑

み――ではなく、生前、終ぞ味わうことはなかった幸せな家庭……柳洞寺における、仮初であったはずの日常生活のことばかりだった。

啓示……

セイバーは苛立っていた。

今際の際の夢、というかなり特殊なカタチで、知り合いの魔術師に唆されて参加した聖杯戦争なる儀式。生前……というのも微妙に違うが、とにかく私もかつては国を救うために探したこともある万能の聖杯、それを求めた魔術師たちによる殺し合い。

正直なところ、自身がそのような儀式に参加していることに思うところはある。如何に祖国を救うためとはいえ、そのために他のマスター……要するに未来の人々を犠牲にするのはどうなのか、という葛藤なのだが、まあ、その点はぶっちゃけ、初めて私をこの戦争に呼び出したマーリンに勝るとも劣らない糞野郎のおかげでだいぶ軽減されたと言っていいだろう。無論、だからと言ってあの男に感謝どころかほんの僅かな好意すら抱けそうにはないのだが。

何だかんだと最終的にはあの糞野郎のせいでこの上なく無様な大敗を喫し、もしや次ならいけるのでは、とつい血迷って再び召喚されてしまったのが数日前。マスターとしてそこにいたのはあの屑とは比較にもならない高潔な女性。否、女傑と呼ぶに相応しい人格者で、加えて下手をすると私さえもワンチャンありそうな武人であるときた。

実は前回の戦争でも割といいセン行っていた私が、『あれ、これは本当に行けるのでは』と判断したのも致し方ないことだろう……その数日後、件の高潔なマスターが、卑怯卑劣な騙し討ちによって討ち取られ、しかも私を令呪ごと奪われてしまうという失態を犯さなければ、の話だが。

「……」

夜空に浮かぶ月を眺めながら思い耽る。いつの時代も、この風景は変わらない。これは私に限った話ではなく、あの豪快な征服王や、気障ったらしい黄金のアーチャーですら同様のことを月に見出していたように思う。どうやら我々人間は、いつの時代もどんな立場であったとしても、不意に故郷を想わずにはいられないらしい。

「……くそっ」
己が口から出たとは信じ難い悪態が、堪えきれなかった不満が漏れ出る。騎士である自分が斥候か暗殺者の真似事をしているのも、あの男よりも更に悪意を煮詰めたような人間に使役されていることも腹が立つが、何よりそいつの野望の片棒を担ぎ、無辜の民を傷つけたこの私が憎らしい。
あの赤毛の少年は、あの後上手く逃げることができただろうか。加害者が何を馬鹿げたことをと彼は激昂するだろうが、偶然か必然か、その時に得た小さな牙で、いつか私という巨悪を討ち果たし、それを無窮の慰めとしてくれることを――私は、強く願う。それがせめても罪滅ぼしにならんことを。それさえあまりに傲慢な願いであることを自嘲しながら。
挙句、もう一つ。
「――は。何を感慨に耽っていると思えば、またぞろ随分と物憂げな顔ではないか。それほどあの男が勘に触るか？」
後方から聞こえてくる傲慢な声。声質や顔のパーツなんかは極上なくせしてそれを全て性格だけで台無しにしているそいつが、私に気安げに声をかけてくる。
「……」
「ふっ――強情よな。まだ口を開かんか。我慢比べにもいい加減飽きてきたぞ？」
（何を戯言を――そんな台詞は、せめてその不快な薄ら笑いを消してから吐いて欲しいものだ）
心底からうんざりして内心で吐き捨てる。
そいつ、つまり彼は、前回の聖杯戦争からの生き残りであり、未だ私なんぞに付き纏うどことなくマーリンに似た雰囲気をしたロクデナシ。もとい、無駄に整った顔や黄金比の肉体を持つライダースーツのような悪趣味な服装をしている男――黄金のアーチャー。
所構わず求婚してくるような色狂いが身近にいるだけで怖気が走るというのに、こいつの場合、私のことを景品か何かだと思ってる節がある。そのような稚拙な技術で女性を口説けるなどとは烏滸がま

しい。生前は何らかの王だったようなので、おそらくこんな適当極まる口説き文句にもホイホイ引っかかる女性がいて、彼自身は女性に困ってはいなかったのだろうが、私をそんな一山いくらの女性と同じとして並べられるのは大変に気分が悪い。

（しかし――）

改めて、ハンドポケットのままダラダラと歩み寄ってくるこの不快な男に視線を向ける。

思えば、この男にも謎が多い。然も当然のように前回の戦争から生き残っているのもそうだが、マスターとの不仲を差し置いてもこの男の正体を掴めていたかどうか。

（……やはり）

自然体、どころか無防備そのものな姿であるはずの彼は、その上でどういうわけか隙が見当たらない。風王鉄槌で吹き飛ばそうにも単純に斬りかかろうともあるいは宝具をこの位置から放ったとしても、おそらく彼は無傷で立っていることだろう。こういう時ほど、自身の直感が恨めしく思うことはない。いっそ再会の時にそうしていれば、彼も私を「話も聞かない荒くれ者」と認識して、その興味を失ったやもしれないのに。

加えて、比喩ではなく湯水のように宝具を放出する特殊な戦闘スタイル。清貧な国を必死になって営んだ身としては羨ましくもある。とはいえ、私ならあれほどの財宝を己が物とするくらいならば、むしろ手持ちの剣であったとしても、それを手放すことで国が救われるというならば、喜んで我が身ごと国に捧げたであろう。

話が逸れた。つまるところ、ここで彼に斬りかかるのは得策ではなく、その気力も湧いてこない。湯水の如く降り積もる後悔が倦怠感を生み、ただでさえ抵抗のある命令の行使が煩わしい。

何を間違えたのか。決まっている。死人が蘇るなどあってはならない。そんな当たり前の摂理に反した私に、罰が下っただけなのだ。

（それと、あのバーサーカーのマスターは、もしや……）

加えて、個人的な事情もある。因果とは、得てして悪い方向に進むものとはいえ、推測通りならなかなかに笑えない現実が立ち塞がる羽

目になる。もはや私にできることは、ただこの悪夢が終わることを望むことだけだ。
願わくばそれが、ここにいる最低最悪な陣営を除いた、誰にとっても望ましい形になることを。

☆☆☆

「全く――マスターにも困ったものです。あれほど派手にやりあったので、否応にも格の差を思い知ったはずなのに、まだ頑としてそれを受け付けない。なまじ力があるからか、どうにかして自分が、という意識が抜け切らない。餅は餅屋、荒事は傭兵に――この戦争を理不尽に感じてるのなら、なおさら他に自分ができることはあるでしょうに」
「……」
静寂の立罩める深夜の屋上で、大きめの愚痴が虚空に消える。
本来であるなら親に抱きついて布団でぐっすり眠っていてもおかしくない彼女の外観は、その発言の真っ当さに反して奇抜極まるもの。
そも日本という国に相応しくない、否、年若い少女の外見に似つかわしくない強い白髪。髪飾りと表現するには主張の激しい頭部の装飾。白を基調とした露出の激しい服装に、過剰なまでに飾り付けられたどこかミスマッチのカラフルなリボン。極め付けはその細腕に収まり切らない身の丈以上もある槍。
絵本の中から飛び出して来ました。そう言われて納得してしまいそうな出で立ちの彼女は、しかしそのようなメルヘン要素をまとめて吹き飛ばす隙のない警戒によって、やや面積が広くて申し訳レベルの結界（警報装置）が張られている以外は何の変哲も無い一般家庭の屋上を異界へと塗り替えていた。
「そもそも、どうして遠坂さんまで普通に前に出ようとするのでしょ

うか。分かりません。人数の優位はこっちにあるわけでして、私とアーチャーさんに任せていつでも逃げられる位置にでも潜んでいるのが最善なのに、論理的ではありません」
「……」
緊張感のない声だ。――彼女が臨む儀式には、あまりに不釣り合いな。陽気で、呑気な明るい声。彼女が述べる割と殺伐とした発言を抜きにしても、この舞台には相応しくない役者。まるで彼女だけが別の世界の住人であるような、何か致命的な部分を掛け違えてしまったかのような。そんな異様な雰囲気が、彼女にはある。
いや、そもそも彼女はどういった存在なのか。自分も大概まともな存在だとは言えないが、それにしても彼女は群を抜いて出鱈目に過ぎる。どうしてか私を知っていることといい、とても真っ当な手段で生まれた英霊だとは思えないのだ。
「――君は」
「はい？」
「君は本気で、あの魔女を味方に引き入れるつもりなのか」
「……」
気づいたら、そのような言葉を口に出していた。否、これは当然の疑問であった。今の今まで追求しなかったのが、疑り深い自分がそうするつもりが起きなかったことが不思議であるほどに。
「理屈はわかる。ライダーに関しても、バーサーカーに関しても、我々には戦力が致命的に足りていない。だが、君が凛に言っていたように、あの小僧を駆り出すなどして頭数だけを揃えたところで無駄死にするだけ。あの小僧に限らずとも、凛や、いや、この時代でも最高峰の魔術師を以ってしても、バーサーカーに対抗する手札となるのかは正直わからない。故に、確実に戦力になるだろうキャスターを味方とする。理屈はわかるのだ、しかし――」
「しかし――信用できない、あるいは使えるとは限らない？　　でも、そんなこと、まずは話を聞いてみなくては分かりません。
それとも、『かもしれない』からとそうして何もかもが信じられなくなって、魂まで疑心暗鬼に縛られて、やがて感情を殺して目的も忘れ

て、ただ機械的に正義を執行する装置に成り果てるつもりですか？」
「そこまでは言っていないだろう。私は――」
「……でも、貴方は、彼女を率いることを恐れている。信頼関係を築くことを忌避している。遠坂さんとも私とも、極力利害関係のみで関係を繋ごうとしている」
――そうですよね、エミヤシロウさん。
「――」
泣きそうな顔で告げられたその言葉に、それまで目紛しく動いていたはずの思考が、完全に停止する。
久しく呼ばれなかったその名前に、今の今まで意識すらしていなかった自分に、そして何より、その程度で頭を殴られたような衝撃を受けた事実に、私は何も言えなくなる。
そうだ。思い出した――否。私は、仮初とはいえ、〝彼女〟との主従関係があまりに好ましくて、心地良くて、意識してそのことを考えないようにしていたのだ。自分の名前も、召喚に応じた理由も、その目的も、あまりに愚かしい生涯についても。
「だから、というわけではありません。正直なところ、私は貴方を知っているだけで、貴方とマスターの関連性についてはよくわかっていません。
ただ、私の知る貴方は、いえ、もう戻れなくなった別側面（オルタ）の貴方は、巨悪を討ち亡ぼすためだけに己が人生全てを犠牲にして、その魂が擦り切れてなお正義に執着していました。……私は、誰かに裏切られるとかそういう可能性の話より、事実としてそういった人間が存在したことこそが、他の何よりも恐ろしいのです」
「……」
貴方のような人間は沢山いる。真剣な顔で彼女は告げた。その行いが愚かだとも、また立派であるとも明言することはなく、ただの事実として、同じ思いを抱く人間は沢山いるのだと。
無銘。彼女がいつか凛に教えたその名について想いを馳せる。
おそらくだが、彼女が言う『私』と今ここにいる『私』は同じであっても微妙に異なる存在なのだろう。少なくともこの私は彼女につい

ての知識はない。彼女の出自がどれほど特殊なもので、どうして私を知っているのかはともかく、その記憶を共有していないのであればそれは別人と言う他はないのだ。
「私もこんな身体（サーヴァント）だ。選択を誤った、もしくは最善の選択をして、尚且つ英雄にまで至った『私』が居たとして、それは何ら不思議ではない。――だが、それは決して今の私ではなく、君が知る『私』はここにはいない」
「ええ。ですから、咎める気はありません。頼ってくれ、とも言いません。この身があまりに頼りなく、それ以上に不審である自覚はあります。ですが。
――アーチャーさん。貴方の望みが何であれ、私たちは死者（サーヴァント）です。死者が生者を導くなど、まして人類の救済など烏滸がましい――」
だから、と区切り、少女は天を仰いで語る。いつの間にやら、その手に握るは普段の得物ではなく、キャスターとの戦いでも使用した旗が握られている。
この何もかもが謎に包まれた少女の視線の先にあるものが何なのか、彼女の目指す道とはどこにあるのか。それとも単に我儘なだけか。いずれにせよ、彼女は私が予想もしない道を歩いている。唯一それだけは確信を持って言える。
「もしも、それでも貴方が諦めきれず、師匠のように、魔神王のように、キアラさんのように真なる救済を望むなら――」
視線を寄越さず、彼女が告げる。澄んだ瞳は、どうしても後ろ暗さが滲むこの私を糾弾しているようで、
「――その時は私が、我が契約者の未来を取り戻すため、貴方の道を阻みます。人理の英雄として、あらゆる障害を跳ね除けて」
それでもなお、最後の最後まで『善意』によって塗り固め構成されたその言葉に、私は何の言葉も返すことはできなかった。

☆☆☆

キャスターの協力を要請するにあたり、彼女からの要求は以下の二つ。
一つ、我々に極力干渉しないこと。特にマスターであった葛木先生に危害を加えた場合、故意過失を問わず即契約違反と見做す。
一つ、優勝の暁にはその権利の一部を預けること。具体的には自身の受肉を希望する。ただし、これはそちらの願いの余剰分で叶えられる範囲で構わない。
はっきり言えば、信用ならない、というのが本音だ。あの後裏付けや証拠も確認し、キャスターが冬木における昏睡事件の犯人であると判明した。つまり彼女は必要に迫られれば、あるいは単にその方が楽であるなら、他者を巻き込むことを是とする人間だということになる。
だがしかし、彼女はその所業とはまるで不釣り合いなささやかな懇願を通すため、魔術に詳しくない俺ですら過剰とわかる制約の数々を自身に課した。それさえ守られれば何もいらないと、それさえあれば何を犠牲にしようとも構わないと血を吐くように。
もしや彼女が起こした凶行は、彼女が抱いたそんな些細な幸せを維持するためだったのか。ただ命を奪う方が手間も効率もいいのにそれをしなかったのは、彼女にも罪悪感があってのことかもしれない。いずれにしろ、被害を考えると同情はできないが。
「意外かしら？」
「あ、ああ……いや、そうだな。その通りだ」
「そうね。でもまあ、彼女の目的を考えれば、それほど不思議な話でもないわ。それなりに位の高い魔術師は基本、それに相応しいプライドを持っていて、それ故に契約には誠実に対応する。特に今回は、お互いに命懸けなわけだしね。油断ができないのは確かだけど、少なくとも自身の日常を脅かしかねないヘラクレスという共通の敵が存在する限りは、彼女も下手な行動は起こさないでしょう」
遠坂は語る。魔術師という存在について、まだまだ無知な自分を諭すように。ただ、意外に思ったのは間違いない。未だに俺の中での魔術師の認識は、ランサーの告げた『ひとでなし』のレッテルで固着し

ている。だから驚いたのだ。それまでは単なる外道に思っていたキャスターの動機が、あまりに人情に満ち溢れていたのに。
「ひとでなしであることと、人間らしい情があること。矛盾しているようだけど、魔術の世界ではそれが互いに成立する。
何故なら、魔術師は文字通りの意味で『ヒト』ではない。だからこそ、広義的な人間と同じ存在であるとは言い難い。でも、それでも魔術師は人としての情を完全には捨てられない。いや、捨てることはできない、かしらね」
曰く、ランサーが定義している『本物の魔術師』とは、まさしくそういった存在であるとのこと。ただ、それでも彼ら彼女らにもそれぞれの価値観は必ず持っていて、後から聞いた話だが、ランサーも基本がそうであると評しただけで、それ故に可能性を信じてキャスターの説得に踏み切ったのだと。
（魔術師、か……）
つくづく、爺さんが俺に魔術を引き継がせようとしなかった理由を痛感する。ほんの少しの良識がある人の親なら、こんな業を背負わせたいとは思わない、思うはずがない。
俺の中では良識のある人間に見える遠坂でさえ、時折平然と『口封じ』なんて発想が出るくらいなのだ。きっと俺が今思っている以上に、彼女らと俺とでは価値観が異なるのだろう。
（……ランサーは正しい。俺は絶対に、魔術なんかに足を踏み入れてはいけない人間だ）
――でも、それでも。
平然とそんな思考を繰り広げる自分が嫌になる。何たる傲慢、なんて我儘な人間なのだ、俺は。あの少女の説得も、誘導も献身もその全てを理解してなお踏み躙ろうとしている。
『ひとでなし』とは、一体誰を指す言葉だったか。いや、よくよく考えれば、俺だって余人から見れば魔術師ではあるのだ。であれば、その呼び名は、まさしく魔術師を呼び表すにこれ以上はないだろう。
俺の考えを知ってか知らずか、遠坂はしばらく俺の方を眺めていたが、やがてひとつ大きめの息を吐くと、半ば諦めたように呟く。

「それよりも問題なのは、あのバーサーカー……ヘラクレスについてよ。真名についてはキャスターからの情報もあってか確定したけど、いや、ランサーの根拠も無い情報の時点で確信してはいたのだけど、あれが本当にギリシャ最強の英雄だとしたら、キャスターの勧誘にかかる問題なんて大したことないでしょ」
「……」
そう。実のところ、キャスターの処遇や俺のくだらない葛藤なんかより、可及的速やかに処理しなくてはならない問題がひとつ残っている。それが何だかんだ言ってあの遠坂やアーチャーさえもがキャスターを引き入れることに賛成した理由であり、それだけ困難極まる障害でもある。不可能なんじゃないか、と諦めから入るくらいには。
「というか、十一回の蘇生に加えてランクB以下の攻撃を無効化かつ一度食らった攻撃は効かないとかどんなチートよ……おかしいでしょ……」
「『宝具』ってやつか……ヘラクレスの逸話は、確か」
「サーヴァントは神秘で編まれた死者であればこそ、信仰がそのまま存在に結び付くため、その英雄が持つ『死因』が弱点となる。でも」
「ヒュドラの毒、だっけか。……持ってないよな？」
「当たり前でしょ。神代の怪物が持つ毒なんて、現存しているかも怪しいのに、取り寄せたりなんかすればいくらかかるか想像もしたくないわ」
無論、単純に値段だけの話ではないわけだが、まさか俺も本気で用意できるものだとは思っちゃいない。
しかし、そうでもしなければ、攻略法がまるで思いつかないのも事実。宝具、ランク、といった概念はつい先ほど聞き齧った程度だが、要するにラ○ダーキックを12回ぶちかます、それもただのラ○ダーキックではなく、炎、水、風、雷と。しかも全てを異なる攻撃方法でぶつけなければならないと来ればその理不尽さが多少は伝わるだろうか。
加えて、例として挙げはしたが、単純に別の属性を上乗せしただけでは『同じ一撃』として処理される可能性が非常に高いとのこと。ま

すます一人二人三人程度ではとても手が付けられないんだが、どうすればいいんだ？
「……とりあえず、あの時ランサーは『一回が限度』って言ってたわね。あの後何事も無く戻って来ているからには時間稼ぎには成功している。当人の証言と合わせて、まず一度」
「アーチャー、キャスターがそれぞれ同等の一撃を持っていると仮定しても三度。よしんば何かの間違いで俺や遠坂が何らかの方法で殺害に成功したところで五度。半分にも満たない」
「下手したら、バーサーカー対その他全員でも勝てないんじゃないかしら……少なくとも、バーサーカーを見た直後、積極的に搦め手（キャスター）を会得しに行ったランサーの判断は正しかったわね」
「いや、判断としては正しくても、行動としては割と無謀じゃないか……？　というか、よく考えたらランサーはあの後なんで普通に連戦してるんだ……？」
「……言われてみれば、確かにその通りね」
遠坂と二人、自然と顔を見合わせる。今の今まで意識していなかったのは、当の本人が無傷であまりに平然と帰還したからだろうか。あるいは全ての意識がバーサーカーに向かっていたからか。俺に至ってはそれどころじゃなかったとはいえ、そういう部分に気が回らない時点でもう色々と危ういのがわかる。
「見通しが甘かったのかしら……うん。よく考えなくても、私、アーチャーに何ができるのかすら知らないし、流石に猛省するわ……」
「……俺も、ランサーともっと話し合ってくる。このままじゃ、露払いすらままならない」
本来ならば、まずは何よりも優先して臨まなければならなかったこと。彼女のマスターである自分が、まず第一に把握しておかなければならないこと。
――彼女は一体、何者なのか？

……

……

……

「聞くのが遅いです」

「……面目無い」

「私がこんな形だからと、あまり甘く見ないでください。私は、自ら望んでこの戦争に参加しました。必要とあらば手を汚すことも、使い潰されることにも躊躇いはありません。無論、限度はありますが」

「……」

何一つとして言い返せない。正論であるという以前に、迂闊すぎる自分に恥じ入って萎縮してしまう。

そうだよな。普通に考えて、彼女の存在は怪しいなんてものじゃない。なまじ下手に魔術なんて知っていたせいで「お前は誰だ」なんて常識的な思考を失していた。「ランサー」があからさまな偽名であることは明白だったのに、彼女の事情を優先して追及を遠慮してしまっていた。

だが、思えば最初から、彼女はいつだって俺のことを優先していた。聖杯戦争についても、キャスターのことも、元はと言えば俺がそのことに気を病んでいたからだ。それは弱点にもなり得る真名はむやみに吹聴したいものではないんだろうが、きちんと筋道を立てて話せば彼女は応えてくれる、その程度の信頼はあったはずなのに。

「――最初にはっきり断っておきますと、私の真名を聞いても役に立たないどころか、逆に聞かなければ良かったと思うはずです。そうでなくても、ほぼ確実に疑問符が先に浮かぶことでしょう。それでも？」

「ああ」

仕方ありませんね、と続け、居住まいを正す少女に緊張が走る。頭から爪先まで謎に包まれたランサーを名乗る少女。その正体をよう

やく知ることができるのだ。動機が早まるのも、無理はないだろう。
「私の真名は『ジャンヌダルクオルタサンタリリィ』と言います」
「……ん？」
「ジャンヌ、ダルク、オルタ、サンタ、リリィです。３度は言いません」
「いや違う。聞き取れなかったわけじゃない。ただ……何だって？」
「――はぁ……」
　特に溜める事もなく、自身の真名を言い放った少女――ジャンヌダルクオルタサンタリリィは、先の言葉通りに俺の反応を予想していたのか、小さく溜息を吐き、無武装で正座していた状態から立ち上がり、いつもの槍ではなく、いつかのキャスター戦でも見たその槍に非常に酷似する旗を取り出す。
（旗――ジャンヌダルク、に……何だ？）
　再度言うが、別に単語を聞き取れなかったわけじゃない。ただ、それを咀嚼するにはあまりに俺の――その、常識とか、そういうアレが理解を阻むだけであって。
「その――何だって？　オルタ……サンタリリィ？」
「……。……『ジャンヌ・ダルク』の別側面（オルタナティブ）が、サンタを目指して小型化（リリィ）したのが私です。２度は言いません」
　おかしいな。俺は真面目な話をしに来たつもりだったんだが。よもやついうっかり遠坂の悲願らしい第二魔法を会得してしまったのか。どうやら俺は、自分で思っていた以上に、魔法とやらへの適正があったらしい――って、なんでさ。
（サンタを目指す――のは。まあ、ともかく。リリィ化って何だ……？　コ○ンよろしく子どもになるって認識でいいのか？）
　だから異様に戦闘力が高かったり、妙に背伸びした印象があったのだろうか。というか、英霊ってのはそんなにポンポンと側面を入れ替えたり小型化できたりするのだろうか。多分、彼女が特殊なだけだとは思うのだが、そもそも別側面を小型化して更に行動原理を塗り替えたら最早それは別人と言っていいのでは。
「――別人ですよ。紛れもなく。私はジャンヌ・ダルクでも、そのオルタナティブとも違う、サンタに憧れたリリィですから」

「――」
ボソリと呟かれたその言葉に、その静かな迫力に、冷や水をかけられたような衝撃を受ける。
そういえば最初、彼女は自分の真名には疑問を抱くはずだ、という旨を俺に宣言していた。だからきっと、彼女は俺以上にその混沌とした名前に思うところがあるのだろう。あまり彼女の真名についての話題は控えた方がいいのかもしれない。……単純に、俺が混乱しそうだから、というのもある。
「加えて、言っておきますが、私も大概ですが、私と同等以上に混沌としたサーヴァントは割といます。それは私のように存在そのものが歪んでいたり、逸話や信仰から霊基に歪みが生じていたり、単に当人の宝具などによる偽造であったりと様々ではありますが、安直に『エクスカリバーを使うからアーサー王だ』なんて判断をすれば、私のように、どこかで足を掬われる羽目になりますよ」
「……じゃあ、実はあのヘラクレスもそうだったりするのか？
明らかに人間にはあり得ない体格をしていたが」
「いえ、あれは素です。詳細は伏せますが、私はヘラクレスさん本人どころかその改造品にも会ったことがあるのでまず間違いないです。神の血を引いているから、というのも当然あるのでしょうが、実のところ体格だけなら純人間であるダレイオス３世さんのが多分上です。むしろ１００ｍ単位で身長が変動するようなサーヴァントもいます」
「……あえて今は追及しないが、その上で――ええと」
「リリィ、あるいはサンタリリィとお呼びください。おそらくは一番適切な呼び名です」
「じゃあリリィ。君は、あのヘラクレスに本気で勝とうとしているのか？」
「……え？」
きょとんとして目をしぱしぱさせる彼女を、不覚にも愛らしいなどと思ってしまう。だが、今はそれよりも優先すべきことがあるのだ。特に彼女の性能（スペック）を把握しようと問いかけたのなら、尚更。
「えっと、何か話が微妙にずれてるような……何かありました？」

「ああ、実は……」
自分でもその自覚はあったので、つい先ほどに行われた遠坂とのやり取りを赤裸々に語る。無論、彼女と腹を割って話そうとした経緯や、キャスターに抱く疑念も含めてだ。
すると彼女は、しばらく考え込んでいたが、やがて内容が纏まったのか、妙に理路整然とした口調で諭すように語る。
「なるほど。主張は納得しました。実に論理的です……が、まだまだマスターには『戦争』の意味を理解していませんね」
「戦争？」
「あのですね。まずは大前提として、あれほどの英雄をバーサーカーとして従えているからには、士郎さんの比じゃないくらい、マスターである彼女にも相応の負担があるはずです。その上で、こちらには遠距離攻撃を得意とするアーチャーさんと、索敵においても一流であるキャスターさんがいる。となると必然、取れる戦術なんて一つしかないですよね？」
「……まさか」
俺の呟きに対して、どこか彼女に受ける印象とはちぐはぐな、妙に似合わない意地の悪い笑みを浮かべた彼女は、手に持ったままの旗を大きく縦に一回転させる。
すると、どういう手品か。旗の模様や色合いが変化して、全体的に黒く染まったそれを彼女は再び構え直す。
その行為に何の意味があるのか。きっと俺には理解できない。いや、俺じゃなくても、おそらくは彼女以外には理解できないであろう確信がある。何故なら彼女は、それほどまでに混沌とした存在で、それ故に相手がどんな強敵であっても、自らの存在を示すため、負けじと立ち向かうことができるのだ。
「卑怯上等――何せ私は、仮にもあのジャンヌ・ダルクなのですから」
その日、冬木郊外にある広大な森中の一部にて、終日爆発音や衝撃が鳴り響いていたらしいが、ただでさえ街から離れた場所であったの

と、その地に張り巡らされていた認識阻害が正常に作用し、そのことに気付いた一般人は、誰一人として存在しなかった。

自己変革・A

「悩み――ですか。それはありますよ。ええ、ありまくりですとも。ふとした拍子に命を拾って、それから実に６０年――実質一年にも満たない期間しか活動していない貴女にはイメージがしにくいかもしれませんが、その月日は決して短い期間ではなく、優柔不断だった私の選ぶべき道が決定するくらいには長大な時間だったと言えるでしょう」

穏やかな口調で告げる彼に、言葉ほどの苦悩は感じられない。語る内容は、間違いなく彼にとっての一大事であるはずなのに、彼はそれをまるで人ごとのように語る。

「ですが――それでも我が心のうちに秘めた悩み事は、いつまでも晴れることはありませんでした。何かを決めるのは、何かを切り捨てるということ。そうなると必然、切り捨てたことに対して後悔や恐怖が付き纏い、それは己を苛む毒になる」

例の如く、会話に至ったその経緯はよく覚えていない。加えて今回の場合は、二人きりであったかどうかも怪しい。正しく成長した私が側にいて、彼女に対する嫌味としていったのかもしれないし、単なる気まぐれだったのかもしれない。

でも、何かしら心を病む出来事があった。それだけは覚えている。じくじくと積み重なる痛みは、いつまでも降り積もる雪のようで。それを彼は見兼ねたのだろうか。そうであるなら、とても嬉しい。

「私はもう迷いません。悩むことはあれど、私は既にこの道を選んだ故に。でも、それでも無念は降り積もるばかりで。私にできることはないのか。私がすべきことはないだろうかと悩んで悩んで悩み抜いて――それで目をつけたのか、貴女も良くご存知のアレというわけで

す。まあ尤も、これだけ悩んで決めた道も、貴女の姉の妨害によって割とあっさり失敗したんですが」
最後の最後で割と笑えない冗談を飄々と言う彼に対し、私は無言で考え続けた。
正直、彼の悩みは特殊過ぎて理解し難い。加えて、最終的な結論があまりに人間離れしていて共感もしづらい。
否、本来ならば私は、彼の言葉に一定の理解を示すべきなのだろう。何せ私と彼は根本を同じとするもの。意見の対立や相違こそあれど、目指す道、その結論は似通って然りなのだ。なのに私がそう感じるということは、やはり私は誰かの妄想でしかなく、出来損ないの人間なのだろうか。
そんな考えが表情に出ていたのか、彼は私の頭に手を乗せて、苦笑しながら優しく告げる。
「まあ、アレです。私なんかで良ければいくらでも相談に乗りますよ。私に限らずとも、貴女の姉や友人たち、数多の同僚も話くらいは聞いてくれるはずです。
悩むのです、若人よ。それはきっと、巡り巡って貴女の糧となる。……なんて、私が言えたことじゃありませんけどね」

☆☆☆

間桐桜は絶望していた。
つい昨日、思い人の家に突如として君臨したサーヴァントという名の非常識。英雄なんて大層な肩書きに似合わない色々とアレなガキんちょと食卓を囲んでから約半日。当然の流れとして学校を終えてからその旨をお爺様に報告するしかなかった私は、それから更に半日を隔てた今、明らかに監視用であろうお爺様謹製の刻印虫をよりにもよって女性器に潜ませ、こうして先輩の家の前に立っている。
いや、理屈はわかるのだ。理屈は。まさかこんな見るからに不気味

……ぶっちゃけ男性器にしか見えない虫を堂々と持ち運ぶわけにはいかないし、服などに安易に仕込んで気づかれては元も子もない。その点、女性器の中であれば気づかれたところでそう簡単に検めることなどできないだろうし、元から仕込まれている虫たちによって幾らでも隠蔽ができる。わかっている。わかってはいるのだ。

（でも、これをどうしろと？　まさか堂々と取り出すわけにもいきませんし……ひりだせとでも？　座布団に正座して、食卓を囲みながらこんなものを何事もない顔で排泄とかどんな羞恥プレイ？）

いけない。どうやら思った以上に動揺、ないし混乱しているらしい。これはあくまで監視用。加えて虫なのだから勝手に動くだろうし、別に敢えて衆人環視の中取り出す必要があるわけでもなし、トイレか何かで取り出して目立たないところに放り捨てればそれで済む話。というか普通に発想が下品である。私は貞操とかそういうアレはお爺様の手で無残に打ち捨てられてしまったが、ヒトとしての良識まで捨てたつもりはない。ただ、それを体現できない自分が嫌いなだけだ。

「……」

無言で呼び鈴を鳴らすと、さほどもしないうちにぱたぱたとした足音が聞こえる。

先輩とも藤村先生ともまして遠坂先輩とも異なる軽い音。やはりというか当然というか、どうやら昨日のことは夢ではなかったらしい。開け放たれた扉の先にいるのは、昨日ランサーを名乗った問題の少女。1日経っても服装が変わっていないどころか、白い服を着て朝からフレンチトーストを食べていた割にほんの少しの汚れがあるようにも見えない。

加えて、お爺様からの情報が正しければ、彼女は昨夜に冬木教会へ向かう一本道にてバーサーカーらしきサーヴァントと派手に戦闘を行ったらしい。まさか先輩がこんな妙に露出度が高いヒラヒラモコモコの奇抜な服と同一の服を保有しているはずもなし、元より疑いようもなかったが、やはり彼女の服はその身体と同様、マナによって編まれていると見て間違いはなさそうである。

（――って、確証を深めてどうするの、私……！）
間違いであるのが一番なのに、こんなに目敏くて真面目か私。もっと節穴になれ私。むしろ監視用の虫すら誤って紛失するくらい愚かであれ私。姉さんのうっかり癖よ、今だけ私に宿るのだ。血筋的には不思議でもない。遠坂の呪いならばあのお爺様でも納得してくれるはず。
「あのー、間桐さん？」
「あ――ああ、ごめんなさい、ランサー……ちゃん。つい、ぼんやりとしてしまって……」
「???　まあ、無理だけはしないでください。昨日も調子が芳しくなかったようですし、ただでさえ朝も早いですので、貧血で倒れた――では士郎さんも心配します」
「朝、早い……そういえば、随分と早起きなんですね、ランサーちゃん」
「え？　あー、そうですね。ちょっと昨日は立て込――早めに、寝ましたので」
「……」
あくまで推測の域を出ないが、反応からして実は一睡もしてないなこいつ。
サーヴァントは基本的に睡眠を必要としない。無論、元が人間であるために精神的な苦痛がどうのと言ったアレコレはともかく、理論上は魔力さえどうにか確保できていれば一年単位で稼働し続けることも可能なのだ。常人でも慣れれば1日2日の徹夜は成せるため、睡魔もないなら一晩という時間は、立て込んだ――つまり、戦闘で昂ぶった熱を覚まさせるには丁度いい塩梅だったのだろうか？
「ああ、立ち話ばかりではあれですし、士郎さんも待ってますので……あれ？」
「……？」
「あれ――ん、んゃ、っんん。ぅんん……？」
私が改めてこの少女の不審さを感じていると、不意に彼女が会話の途中で視線を外し、しばらく硬直してから咳払いを一つ。目を擦り、

目を見開き、そう、まるで、あの時。兄さんが見せた表情。信じられないものを見たとばかりに――

反射的に彼女の視線の方向、つまり背後に振り替えると、そこにいたのは見知った顔の人。

人懐っこい笑みを浮かべる、虎のような横縞のシャツに、緑色のパーカーといういつもの格好をした茶髪の女性。そして私に笑顔を思い出させてくれた恩人。

藤村大河。自称、冬木の美人教師。自惚れるな、と言いたいが、とはいえ本人に言うと調子に乗るからみんな面と向かって言わないだけで、美人であることに誰も意を唱えることはない。

そして私が知っていることから、当然、この時代に生きている魔術とはなんの関わりもない人間のはずである。ならば必然、彼女とはなんの関係もないはずなのだが、

(でも、この反応は、明らかに……)

単純に、彼女の知り合いと容姿が似ていた、というだけかもしれない。何にせよ決めつけるにはまだ早い。良くも悪くも、彼女と藤村先生の関係は「これから」だ。これほどの反応を示す相手、十中八九誤魔化されるにせよ、その対応から何かを掴めるかもしれない。

硬直した彼女に、何を言えばいいのか分からない私。必然、二つの木偶に対して困惑した様子で話しかけるのは、意外と気配りもできる冬木の虎……もとい、美人教師である。

「えっと、その……いつまでも玄関先にいるわけにもいかないし、とりあえず座って話さない？　私の家じゃないけど」

……

……

……

「では改めて自己紹介を。私はランサー。本名ではなく、いわゆるコードネームです。本名は故あって教えられませんが、堅苦しい印象を受けるようでしたらリリィとでもお呼びください。
　バルトアンデルスという学術棟に縁がありまして、冬木にはその関係で尋ねました。その際、士郎さんのご尊父であるキリツグさんを尋ね、そこで彼の訃報を知りまして。士郎さんのご厚意から日本に滞在する間は部屋を間借りさせていただいています」
「へ～。しっかりして……というより随分と日本語が上手ねぇ。ご両親に日本人でもいたの？」
「血統とは無縁ですが、知人に日本人が多数います。遠坂さんともその関係です」
「学術棟――バルトアンデルス。知らない名前だけど、切嗣さんの関係者なら然もありなん、って感じ？　色々と聞きたいことはあるけど、その歳で留学、それも名前すら言えないって相当な事情がありそうだし……あ、でも一つだけ聞かせてくれる？」
「はい。何でしょう？」
「何でランサー？　いや、響きが同じだけで槍兵って意味じゃないのかもしれないけど、それにしたって」
「意味は合ってます。また、今この街には私の他に、台所にいるアーチャーさんや葛木教諭の伴侶であるキャスターさん。それ以外にもセイバー、ライダー、アサシン、バーサーカーを名乗る人物が滞在しているはずです。私含めみんな格好付けてそう名乗るような変人ですので、それらしい人物を見かけ次第逃げてください」
「えぇ……？」
（……）
　移動先、などと気取った言い方をするまでもなく、1分も経たずにそのまま先輩の家の居間にまで辿り着いた私達は、やはり当然のようにこの家に居座っていた遠坂先輩及びアーチャーさんも含めて、何故か最年少であろうランサーちゃんを中心に、彼女たちがここにいる言い訳……弁明、もとい、その理由についてを聞いていた。

意外、と言ってはなんだが、やや引き攣った顔で語られるその内容は突っ込みどころ満載なもののそれ故に下手に追及し辛く、加えて切嗣さん云々を除けばおそらく嘘は言ってない。とはいえそれならそれでまた別の疑問が浮かぶわけなのだが、此度においては藤村先生さえ誤魔化せばそれでいいため、意図的に情報を散見させることで誤魔化そうという腹だろう。見掛けによらず小賢しいクソガキである。

それよりサラッと驚愕の情報がいくつも出たんですが？　葛木先生の伴侶がキャスターってどういうこと？　葛木先生がマスターだったのはとにかく、どんなに長く見積もっても出会ってから一月経っていないですよね？　あの堅物を絵に描いたような人をそんな短期間で堕としたとか地味に凄いですねキャスターさん。あと私のライダーをそんな怪しい組織の一員みたいに言うのやめろ。名誉毀損で訴えるぞ。

（――落ち着け私。反応するな、無心でいるんだ……）

この家には遠坂先輩がいる。つまり今の会話には、マスターである私を燻り出す目論見もあるかもしれない。既に私に令呪は残されていないけど、何だかんだで甘い兄さんのこと、私を人質にされたら動揺してしまうかもしれない。あと単純に私が拷問に耐える自信が無い。間桐家に出されて一週間も経たず感情を鈍らせた私を見縊るなよ？

そんなことを考えていると、遠坂先輩が唐突にランサーちゃんに話しかける。

「横からだけど、いいかしら？」

「遠坂さん？」

「今聞くことじゃないのかもしれないけど……バルトアンデルスって、あの？」

「その、ですね」

「そう……」

「???」

（……？）

なんだろう。今の質問は。よく分からないが、聞き流してはいけな

い気がする。
　バルトアンデルス。確かその名称は、どこかの神話の……それこそライダーも関わりのあるギリシャ神話の怪物の名前だっただろうか。確かに学術棟ないし変人のサークルとしては物々しい名前であるが、いわゆる厨二病の集いと見ればそれほど引っかかる名前でもない。
　しかし、他でもない彼女が……この場における唯一と言っていい正統派の魔術師である姉さんが反応を示した。何かあるはずだ。とはいえ、どこまでも無力な私にできることなどなく、強いて言うならお爺様の意見を仰ぐことだけ。ますます自分に嫌気が刺すが、努めて表情に出すまいと堪える。
「そう名乗っているのは確かなのだが、変人扱いは勘弁してくれないかね」
「あ、アーチャーさん。ありがとうございます」
「感謝よりも謝罪が欲しいな。昨夜も遅くまで遊びに付き合わされて辟易してるんだ。君と違い、私はもう若くないのでね。体力よりも気疲れの方が先に出る」
「アンタも言うほど歳食ってないでしょうに……」
　それから数分ほど談笑をしていると、昨日に引き続き我が物顔で台所を支配していた大男――アーチャーさんがいくつかの食器を伴って現れ、皮肉げな口調とは裏腹に穏やかな顔をして食卓を彩って行く。
　昨日も思ったが、やけに熟れているというか、些か堂に入り過ぎているような気がする。藤村先生も同様のことを思ったのか、彼に対してその旨を質問をすると、彼は一瞬だけ呆気に取られたような顔をして、妙に硬い口調で答えた。
「なんのことはない。昔、執事の真似事をしていた時期があるというだけだ」
「執事！　は～、これまた私には縁の遠い話ねぇ。憧れないって言ったら嘘になるけど、私には士郎がいるからいいかな～」
「……」
　茶化してそう告げる藤村先生に、アーチャーさんは形容し難い表情

を浮かべている。さらっと先輩を所有物扱いしている図々しい女に呆れているのだろうか。それともヤの付く職業のお嬢のくせして庶民ぶってる彼女を見透かしているのか。基本眉間にシワが寄ってるのでいまいち表情が掴みにくいのだが、少なくとも言葉通りに受け取ってはいないだろう。

「結果として便利使いしてしまったことは謝罪します。今晩からは私が参加しますので……」

「ふむ。……構わないのかね？」

「モーマンタイです。こう見えて『かくれんぼ』は大の得意なので。むしろ得意にならないと勝負にもならなかったと言いますか、まあとにかくお任せください」

僅かに時間を隔て、その一つ前の話題に対して告げるは、どこまでも含みの無い口調で、無邪気に提案する槍兵の少女。藤村先生の手前、最低限の隠蔽こそしているものの、その内容は聞く人が聞けばすぐに思い至るようなもの。

――即ち、次なる布石。あるいはターゲットの確認。会話から察するにライダーのことではなさそうだが、それはあくまで今晩の予定というだけで、夜通しはしゃぎ倒すような輩に油断はならない。特に今は、兄さんの指示によりライダーの宝具が学校に設置されている。まさか優秀な魔術師である姉さんが気づかない筈もなし、もはやライダーと彼女たちが戦うのも秒読み段階にあると言えるだろう。

（それを知って、私はどうして――）

此度の件、私は兄さんにそのことを伝えていない。

その義務が無かった、というのはただの言い訳だ。下手をすると命に関わる事柄だというのに、我がことながら意図が透けて見えるようだ。

（お爺様は……伝えてはいませんよね、きっと）

あの魂まで腐り落ちたお爺様に良心なんて言葉が残されているはずもなく、また彼自身、兄さんのことを道化のように見下している節があるため、たとえ兄さんが破滅への道を辿ろうと、あのひとは一顧だにしないのだろう。そして、

（……そして。それは、おそらくは、私も――）
黙認は厳密には罪に問われずとも、私には兄さんに対して家族としての作為義務がある。そもそも、ここにサーヴァントがいること、先輩と姉さんが同盟を結んでいることを暴いたのはこの私。会話をする機会なんていくらでもあった。それをお爺様が伝えていないからでは筋が通らない。
つまり、結局のところ、私は期待をしてしまっているのだ。自分が楽になりたいがために、その礎として兄を捧げようとしている。加えて、あわよくばお爺様を、とまではいかないあたり最早救いようもない。
私は弱い。どうしようもなく脆弱で愚かしい。こんなにも近くにいるのに、今だってやりようによってはこの輪に混ざれるやもしれないのに、その道を選ぶことより、その可能性が潰えるかもしれないことの方が恐ろしい。

「あら、おいしいわね、桜ちゃん」
「そ、そうですね……はい。本当に、美味しいです」

助けてほしい。言うべきはたった一言。一秒にすら満たないであろう不満、嘆き。
――その嘆きさえ、声を上げねば決して届かないのだとわかっているのに。

☆☆☆

「（精神的に）死ぬかと思いました……」
「いや、流石に大袈裟じゃないか……？」
開口一番、引き攣ったままの笑顔で告げるは我がサーヴァントたる

ランサーことジャンヌダルクオルタサンタリリィ。
場所は学校の屋上。既に本日の講義や時間潰しにと顔を出した弓道部の時間も終了してしばらく経ち、熱心な運動部員が校庭でランニングをしているのが散見される程度。遠坂との約束である最終下校時刻までまだ一時間ほど残されており、時間潰しで選んだのがこの場所だ。
そして事ここに至りようやく姿を現したのがランサー。曰く、「マスターの日常を必要以上に侵略する趣味はない」とのこと。配慮は立派だがそれなら霊体化して付いてこないで欲しかった。いや、それについては俺も理解し納得してはいるし、仕方ないと割り切っているからいい。
しかし、このセリフはどういうことだろうか。朝の出来事を言っているのは間違いないだろうが、ぶっつけ本番だった割には上手いこと切り抜けていたように思う。最悪、遠坂なりキャスターなりに協力してもらって強引に有耶無耶にする選択肢もあったので、藤ねぇの頭を変に弄るような真似をせずに済んで内心大喜びだったのだが。
「動揺して言わなくてもいいことまで言ってしまいました。その分、追及こそ避けられましたが、せっかく用意していたカバーストーリーが無駄に……」
「……」
そんなものまで用意していたのか。相変わらず律儀というか、存在の破天荒さに反して妙に生真面目な少女である。
だがまあ、そういうことなら気落ちする理由もわからなくはない。俺だって藤ねぇのためにせっかく用意した夕飯が急用などでおじゃんになったらガックリするだろう。というか数回程度だが似たようなことはあった。だからその気持ちはわかる。
しかし、何故彼女は藤ねぇに対してあれほど動揺していたのか。笑顔こそ崩してはいなかったが、表情が軒並み引き攣っていたのは見て取れた。当然だが、藤ねぇこと藤村大河は実家こそやや特殊なものの正真正銘の一般人である。少なくとも何の縁も関わりもないであろう彼女に動揺する要素などないはずなのだが。

その旨を指摘すると、彼女は疲れ切った表情で、
「私が尋常のサーヴァントではないことはもうご存知でしょう……？
そんなサーヴァントが誕生するようなところが、その交友関係が、まさか常識の範囲内にあるとお思いで……？」
「そういえば遠坂も何か気にしてたな……確か、バルトアンデルスだったっけ。あれは適当な名前を出しただけじゃないのか？」
「そういうことにしておいてください……とにかく、まあこの世界には割と頻繁に世界レベルの危機が起きていましてね。何というか言ってしまえば実験室のキメラと同レベルにアレな経緯で生まれた私は、ひょんなことで世界を救って座に登録されたわけです。
そんな場所で生まれたわけですから、当然そこには私の他にもアレなサーヴァントがたくさんいまして。私の世界では魔術世界で人理と呼ばれるものが不安定であったことも影響してか、擬似サーヴァントなどと呼ばれる、それこそキメラと同義の人たちが何人もいました」
曰く。
かつて彼女が所属していた組織は、人理と呼ばれる人類史の正しき流れを見守るために成立した。しかし、とある者の手によって突如壊された人理――すなわち歪められた歴史を修正するために、レイシフトといういわゆる時間跳躍によって特異点と呼称される歪みに立ち向かってきたらしい。
「神代が終わり、西暦を経て、人類は地上で最も栄えた種となりました。我々はこの星の行く末を定め、星に碑文を刻むもの。
人理とは、そんな人類をより長く、より確かに、より強く繁栄させるための理。人類の航海図――」
先程までの焦燥は何処へやら。熱に浮かされたように、つらつらと読み聞かせるように彼女は語り出す。
それは未来を取り戻す物語。人理を以て人理を滅ぼし、ただ一つの希望を信じて暴走していた獣を討ち倒す人類史の旅路。
国も時代もまるで異なる無数の英雄達と共に、どこまでも誠実に、されど必死になって世界を救った一人の少年の物語。

「――そんな経緯で、私は……あれ？　マスター？」
「――――」
それは正しく、俺の憧れた――
・……
……
……
「――い、――みや」
「……」
「おい、衛宮！」
「――っ!?」
至近で叫ばれた呼び声に意識が覚醒する。見れば自分は屋上のフェンスに体重をかけた状態で校庭を眺め、そのまま酩酊してしまったらしい。下を向くと、既に校庭に人影はなく、陽も暮れて辺りが赤く染まる頃。よもや見回りの先生に呼び掛けられたのか、と思い冷や汗と共に慌てて振り返ると、意外な人物がそこには佇んでいた。
「し、慎二……？　どうして……？」
「はぁ？　その台詞は僕がするべきものじゃない？　全くお前は相変わらず鈍いな。気紛れだよ、気紛れ。そろそろ最終下校時刻にもなろうって時にこんなところで黄昏てる馬鹿がいたもんだからわざわざ声を掛けてやったんだよ。むしろ感謝して然るべきさ」
そこにいたのは、朝も家まで訪ねてきた桜の兄である間桐家の長男、間桐慎二。目下警戒対象としてランサーが提示し、俺にとっての数少ない友人でもある彼は、特徴的な髪質の黒髪を靡かせながら、校庭から彼のいるドアへと振り向いた俺と対面する。

「あ、ああ……悪い」
「そんな簡単に謝るなよばーか。たまには開き直るくらいのことしてもいいんじゃないの？　僕がしたのは単なるお節介さ。お前には当然、それを拒絶する権利だってある。いつも言ってるだろ。ほいほい何でも言うこと聞いてりゃ馬鹿をみるって」
「うっ……」
いつものように、憎まれ口ながらも、よくよく聞けば俺を思って発言している彼に言い返すこともできず口を噤む。遠坂は頻繁に彼のことを性格が悪いと評していたが、俺からすれば彼は単に捻くれているだけで、本当は心優しい性格なんだと思っている。
現に、今だってこうして、彼は俺を気遣って、わざわざ部活を休んでまで――
（……待て。何故、慎二がこんなところに？）
一歩、後退る。
彼のサボりグセは、部長である美綴も知っての通り。既に部活を退いた俺にさえ苦言を呈するのだ。そもそも彼は俺の数少ない友人だ。彼が部活に出てもいなくても、俺がその存在に気づかないはずはない。
女生徒との待ち合わせ？　こんな時間に？　有り得ない、とは言い切れないが、それならそれで別のやり方があるだろう。少なくとも、もう日没にもなろうとするこの時間まで学校に残り、その上で俺に話し掛けてくる必要はない。女生徒を優先する彼のことなら尚更。
では、何故？　彼は何故、今こんなところにいる？　それでは、それではまるで、
「――まあ、何だ？　早く帰った方がいいんじゃないか？　最近は物騒みたいだからね――」
まるで、ここに、この場所に、この学校そのものに、誰もいない学校に、大事な用があるようではないか――

「……」
（ランサーは……いる。姿を隠しているだけだ。見えないけど、確かに感じる）
普段通り、嫌味な笑みを浮かべる彼に怖気を感じて、警戒を露わにする。
なるべく隠したつもりだったが、露骨だったのか、彼はそれを目ざとく察して、笑みを更に深くして続けた。
「……。その反応……。なぁ、衛宮。お前やっぱり何かやってんだろ」
「……っ！」
「知ってるぜ。お前が最近、突然遠坂と懇ろになったって話を。まあお前の性格じゃあ懇ろ云々はあいつの自爆だろうけど、逆にお前の性格からして急にあいつに付き従うようになったのはそれ相応の理由がある。そう考えるのが自然さ。もちろん、メインは今も人気のない場所で時間を潰してる遠坂の監視のほう。お前を見つけたのだって、実は単なる偶然なんだぜ？」
「……」
「だけど、まあ、これは僕にとってそこそこ優先度の高い仕事だった。だって、だってだぜ？　そうだ、衛宮。馬鹿みたいにお人好しで、その上すっとろくて見ちゃいられない。僕の知るソレとは一片たりとも重ならないお前が、まさかまさか――」
――まさかお前が、魔術師だったなんてな、衛宮。
「っ――！」
その言葉に、その確信に、彼の口から出てはいけないその単語に、大袈裟なくらい身構える。その一言に、それまでの彼が得体の知れないものに思えて、話し合い云々よりも足が先に出そうになる。
だが、先に述べたように、慎二はこの屋上の唯一の出口を塞ぐように立ち尽くしている。一瞬、いっそ飛び降りるか、などと考えてしまったあたり、俺も相当混乱しているんだろう。

しかし、慎二は逆にそんな俺の様子を見て拍子抜けしたのか、先程までの圧力はどこへやら、気の抜けた声で意外そうに。
「まあ待て衛宮。僕は何もお前を害そうとしているわけじゃない。いや、お前の出方次第ではその可能性があったのは認めるけど、僕だってお前を相手にして無闇に殺そうだのと言うつもりはないさ」
「じゃあ、どうして……」
「当然、意味もなく明かしたわけじゃない。なぁ、衛宮。僕と組まないか？」
「は――？」
良い提案だ、とばかりに提示された選択肢に言葉を失う。提案そのものは非常に魅力的なものであるが、今は前提条件が常とは異なる。組むにしても、遠坂の合意がいる。しかし彼はそんな考えを見透かしたように、
「どうせお前、たまたまサーヴァントを召喚できたからって遠坂に良いように使われてるんだろ？　ならいいじゃないか。僕と組んであいつをコテンパンにしてやろうぜ？」
「遠坂とは、そんなんじゃ――」
「あーあーわかってるさお前の性格は嫌ってほどにね。仁義やら義理人情やらとか言い出すんだろ？　だけどサ。お前の前ではいくら良い子ちゃんぶっていても、あいつの本性は根っからの魔術師だ。裏で何をやってるか知れたもんじゃないんだぜ？」
「……」
遮るような弁舌に、思うところがあって黙り込む。琴線に触れたのはやはり「魔術師」という単語のこと。
魔術師とは、ひとでなしである――誰もがそう告げ、今や俺の中でも常識となりつつある基本中の基本。人を弄る術を持つ彼らは、その方法を知る彼らには、真の意味で無実を証明することはできない。
無論、遠坂だって神秘の秘匿を名目に、軽い記憶操作なら可能な旨を聞いている。そういう点では、彼の懸念も尤もだろう。しかし。
「駄目だ。それでも、少なくとも今はまだ、慎二とは組むわけにいかない」

「……そ。……まー、だろうとは思っていたさ。あいつの何処が気に入ったのかは知らないけど、それでも即答できるあたり、お前らしいな、本当に」
残念だよ、と続け、一瞬だけ柔らかな表情を見せた彼は、しかし即座にその顔を嗜虐に塗りつぶし、熱に浮かされたように告げる。
「つまり、お前は今から僕の敵ってわけだ。……じゃあな、衛宮。お前はどこまでも馬鹿だったけど、嫌いじゃなかったぜ」
いつの間にか、彼の隣には扇情的な服装をした長身の女性が立っていた。服装を抜きにしてもどこか妖艶な雰囲気の女性で、バイザーで覆い隠した両目は単に盲目だと思わせない圧力を感じる。
手に持つ長い鎖に繋がれた短刀。多少奇抜なデザインなれど、その用途は明白で――
「やれ、ライダー」
「御意――」
凶刃が迫る。手に持った短剣もそのままに飛び掛かる女性を、サーヴァントの攻撃を、当然、ただの人間でしかないこの俺が躱せるはずもなく。
「――っ、」
からんからん、という金属音。ぶしゃり、と何かが溢れ出た音が耳に届く。それと同時、反射的に瞑った瞼へ付着する生暖かい感触。恐る恐る開いた目に映るのは、言葉を濁す必要もなく、目眩がするほど多量の血飛沫。
肩口から荒々しく切り落とされたライダーと呼ばれた女性の腕を中心として広がるそれは、俺や慎二から一時的に思考を奪うには十分で。
「は――？」
「――ふっ！」
続けざまに二閃。もはや刀身の軌跡すら認識できない剣尖が迸り、ライダーの左肩と首元に深い傷を刻む。
つい先ほどにも聞いた、短剣が地面に落ちたことによる金属音が鳴り響く。一目で尋常ではないとわかる所業。それを成したのはやは

り、女性と同じサーヴァントである、槍兵の肩書きを持つ少女――。
しかし、霊体化を解いて姿を現したのであろう彼女は、普段の武装である槍ではなく、何故か両手に二振りの日本刀を携えている。俺が思わず声を掛けると、彼女は武器の調子を確かめるように拳をにぎにぎしながら微妙な表情で呟いた。
「ら、ランサー……!?」
「――しくじりました。仕留めるつもりだったのに……。……でも。……いえ、言っても仕方ありませんね――っと、せいやっ！」
言い切る前に、今度は慎二に向けて彼女は武器を投擲する。器用に下投げで放たれた弾道は彼女の身長を考慮せずとも異様に低く、おそらくその狙いは足。攻撃対象そのものは実に合理的な選択なれど、急所ではなく足を狙った理由は間違っても命を奪うわけにはいかない、という彼女の意思だろうか。
「くっ――」
いつのまに武器を拾い上げたのか、ギィン、と不快な擦過音を立て、ライダーが放たれた凶刃を弾く。俺には一度しか音を認識できなかったが、地に転がる刀は二振り。先の攻防でランサーがもぎ取った腕付きの短刀と併せて凶器は三。十秒にも満たぬ交錯のうちに、既に屋上は地獄の様相と化していた。
「あ……？」
場違いにも思える慎二の間の抜けた声。秒単位でこれだけ目紛しく状況が動いたのだ。変化について来れないのも無理はない。
だが、ランサーはそんな様子の彼にも容赦する性格ではない。むしろ彼の現状を見て好機だと判断したのか、次いで普段使用している槍を取り出し、殆ど手投げで投擲する。
「っ――」
見た目に反してそれなりの威力を有していたのか、ライダーは投擲に反応したものの、今度は僅かに軌道を逸らすだけに留まる。
扉近くの壁に深々と亀裂を刻む槍は、起こり得た最悪の未来を暗示していて――ここに来てようやく意識を取り戻したのか、慎二は青い顔で叫ぶ。

「ぼっ――――ライダー！　何してるんだこの役立たず！　あんな見るからに巫山戯たサーヴァント、お前の敵じゃないだろう!?」
「っ……」
話している間にも、ランサーの追撃は止まらない。今度は宙空に無数のチャクラムのような物体を生み出した彼女は、なおも慎二に向かって執拗に攻撃を続ける。
多分、それが一番効率が良い、もしくは弱点なのは明白であるからやっているのだとは思うのだが、些か執拗に攻撃をするので慎二に何か含むところでもあるのかと疑ってしまう。なお、後で確認したら特段彼自身に思うところはないとのこと。余計にタチが悪いと感じたのは気のせいじゃないだろう。
四方から襲い掛かる四輪の光の輪が、それぞれ慎二の四肢を刈らんと襲い掛かる。それをライダーは短剣とそれに付随している鎖で器用に半数を弾き返すも、数が数のために身を呈して慎二を庇い、更なる傷を負う。
しかし、元よりランサーの狙いは慎二ではなくライダー。庇うことで隙が生まれるなら彼女にとっては万々歳であり、更にタチの悪いことにこの少女、ステータス面での敏捷値がなんとあの恐るべきヘラクレスよりも一段階高いのである――――！
「――――三つ首の黒龍よ。世界を喰らい尽くせ」
一歩、大きく足を踏み込む。それだけで床が罅割れ、深く陥没する。余すことなく速度に変換された衝撃は、そのまま少女を弾丸へと進化させる。
いつか見た黒い焔を纏い、旗を構えて突進する。旗の使い方を小一時間説教したいほど清々しいくらい間違った使用方法ではあるが、かのジャンヌ・ダルクの象徴として語られる旗は、ある意味では正しい使用法としてライダーの中心に突き立てられ、その真言と共に爆発する。
「『焼却天理・塵殺竜（フェルカーモルト・フォイアドラッヘ）』!!」
肉を引き裂く嫌な音と、轟々と燃え盛る焔。それすら掻き消すほどの痛々しい女性の悲鳴。あまりに凄惨な光景に身動き一つ出来ずに

いると、ランサーは満足気に「制圧完了ですね」と呟き、
「さて……」
「ひっ」
　ぐりん、と彼女は慎二へと向き直る。苛烈な戦闘に反比例するような無邪気な笑顔が得体の知れないものに感じる。慎二も似たような感想を抱いたのか、小さく悲鳴を漏らしたのち、縋るように、
「お、脅かすつもりで、殺すつもりじゃ――」
「そうでしょうね。そうでなくては、不意とはいえいきなり片腕は奪えません。あとそもそもライダーさんの運用方法に難があります。私が言えたことじゃないですけど、宝具を展開していて魔力も十分でない彼女に三騎士相手は無謀かと」
　弁明をピシャリと切り捨てた彼女は、私を侮るのは理解できますが、と非常に反応しづらい言葉を並べながら、なおも怯える慎二へゆっくりと歩を進める。
「ぼ、僕を殺すつもりか……！」
「害意を示したのはそちらでは……？　それに、ライダーさんもこの程度では死にません。ですが、そうですね」
「ひぃっ」
　徐々に接近する幼い少女を前にして、慎二は恥も外聞もなく逃亡しようと目論む。が、足を縺れさせたのか尻餅をつき、彼は少女を見上げる体制のまま後退り、壁にぶつかったのと同時、ランサーにまた新しく取り出した旗を突き付けられて、
「令呪を引き渡してもらいます。令呪とはサーヴァントを起爆させる爆弾。それを持つには、貴方の引き金はあまりに軽すぎる。拒否するようならこの場で首を貰います。そういった趣味はありませんが、外道一人とこの学園の生徒全員の命……比べる必要ありませんね」
「なっ……!?」
「いいんですよ？　抵抗しても。流石に殺すは言い過ぎましたし心情的にも反するのでやりませんが、それこそ遠坂さんに頼めば呪いの一つや二つくらいはかけられるでしょう。ガンド……そう、ガンドです。アレは本来なら呪いをかけるものらしいので、害意を抱く度に激

痛が走る、これくらいなら容易いはずです」
「ふ、ふざけ……っ！　ひっ」
反論しようとした慎二に反応して、旗の穂先に炎が灯る。この世全ての闇を凝縮したような黒い焔。今もなお彼のサーヴァントであるライダーを縛めるそれを間近で見て、彼も動揺せずにはいられない。
「無理ですよね。嫌ですよね？　それを貴方は、私のマスターに強いようとしていました。殺す気はなかった――ええ、ええ。わかりました。私は貴方が嫌いです。それで手打ちとします。ですので、後は貴方の悪意が何を生むのか……それを以て、貴方の処遇を決めたいと思います」
それだけの理由ありきとは言え、容赦なく慎二を扱き下ろした彼女は、そこでようやく俺へと向き直り、
「――では、マスター。そういうことで」
『(成り行きですが、話し合いの機会には丁度良いかと)』
「……は？」
さらりと付け足された念話による後半の台詞と、そもそも俺に任せるという考え自体が想定していなくて、俺は間抜けな声で返す。
そもそも彼女は慎二のことを嫌っているんじゃなかったのか、とか、遠坂に任せる云々はどうなったんだ、とか、俺が令呪の保持まで許すと言ったらどうするつもりなんだ、などと様々な考えが過ぎるものの、当然、敵の処遇、それも友人の生殺与奪の権利など、俺にはあまりに重すぎて――。
結局、俺は言葉を発することも、身動きを取ることさえも、何も、どうすることもできず、異常に気づいた遠坂が駆けつけてくるまでの間、ただ呆然と立ち尽くしていた。

我が神はここにありて：C

気が狂いそうだった。この世界に対してただ一つ、カルデアとは違うこと。ただ一つだけ欠けたそれがないのが、こんなにも辛いことだなんて。

こんな私が信用されるわけがない。そんな当たり前の話。何もかもが異常で、真名を聞けば見離される、そうでなくても耳を疑うような自分が、どうして信頼してくれなどと言えるのか。

故に私は、結果で示すしかないのだ。どれほど立派なことをしても、肩書きだけで馬鹿にされるのなら、実績を重ねて黙らせるしかない。

私は知っている。世界の誰よりも格好いい人が、この世の何よりも立派な彼が、ただ一般人であるというだけで馬鹿にされ、侮られる現実を知っている。

黒い焔が思考を染める。本来の私の、復讐者としての怨念。霊基が歪められたことで、私のものと化してしまった彼女の闇。

ああ、トナカイさん。トナカイさん。愛しい私の、ただ一人のマスター。私は、どうすればいいのでしょう――。

『――とはいえ、悩むにしても、まずは先立って必要なのは力です。この世全て、万物を公平に見定める、無慈悲なまでにあらゆるものを救済する力。

だから、貴女が私を師と仰ぐなら、私は喜んで、我が力の一端を授けましょう。……願わくばその力が、正しく全てを救うことを信じて』

☆☆☆

遠坂凛は戸惑っていた。

目下、悩みのタネとなるのは当然、我が同盟相手であるランサー主従について。同盟を組むに至った経緯から始まり、バーサーカー戦、

キャスター戦と無駄にアグレッシブに行動して次々と事態を解決しては新たに問題を引き連れてやってくる彼らをおいて他にはいない。
私自身、段々と対応に慣れてしまったのが嫌になる。とはいえ、彼らがいるだけで勝手に事態が加速度的に進むのもまた事実。良くも悪くも魔術師思考な私は、彼ら、特にランサーが好むような急激な変化を苦手とする。特にキャスターの件に関しては、彼女がいなくてはあれほど迅速な解決は不可能だったと言えるだろう。
嫌な予感はしていたのだ。彼らと離れて行動する、言葉にすればごく当たり前の行為が、まず間違いなく頭を悩ませる事態と化して襲いかかってくることを。
それがこの男、間桐家長男にして後継者と思わしき少年、間桐慎二。その身柄。よりにもよって優先度の高い事案たるライダーのマスターとして引っ捕らえられた彼は、辺り一面血だらけでしかも串刺しにされて炙られている女性がいる地獄のような光景を一顧だにしない件のランサーに、反転させた旗の先端部に襟首を軽々と持ち上げられた状態で項垂れていた。
「あ、遠坂さん。いいところに。早速ですが、人払いをお願いしてもいいですか？」
「まずは説明を……って、この惨状を人払いも無しにやってたの!?
いや、そうでもなきゃ私も気付かないだろうけど、ああもう！」
慌てて手持ちの宝石の一つを地面に投げつける。粉々に砕かれた宝石の破片が空を舞い、それに含まれる魔力が周囲の空間を惑わせる。
咄嗟の行動だったので必要量より一回り大きい宝石を消費してしまったのに、大赤字だ、と考えるよりも先に安堵が出るあたり、私も相当彼女に毒されている。ともあれ、何よりまず現状の把握を優先しなくては。
「で、これはどういうこと？」
「彼はライダーのマスターです。彼はマスターに対し、友誼を以て同盟を結ぼうと迫りました。マスターはそれを拒否し、それに不満を抱いた彼はライダーを差し向けました。そこで……」

「迎撃してこの有様って？　あのね……いえ、今更言っても仕方ないわね。それに、神秘の秘匿云々に関しては、仕掛けた側に責任があるわけだし」
慎二の方を睨みながら言う。当然ながら、項垂れた彼に反応らしい反応は見られない。
しかし、ライダーと来たか。この騒動に関しての問題はともかく、それが正しいのなら嬉しい誤算だ。何せライダーと言えばこの学校に邪悪な結界を張っていた張本人。それを仕留めたというのなら、バーサーカー戦に向けて全力を注ぐことができる。裏付けだって、同じギリシャ出身であるキャスターに依頼すれば容易いだろう。否、それよりもマスターである彼に話を聞いた方が早いか。
（しっかし、よりにもよって彼がマスターだったなんてね。どんな裏技を使ったんだか）
私の記憶が正しければ、彼にマスター足り得る素質は無かったはずなのだが。まあ、老獪な間桐のこと。令呪というシステムそのものを作り上げた彼らなら、裏技の一つや二つ隠し持っていてもおかしくはない。
「……ランサー。彼を、どうするつもり？」
「殺さない、で意見は一致しています。それ以上については……ああ、その前に」
「うぉっ!?」
言うや否や、ランサーは慎二を上空に放り捨て、現界していた旗を霧散させる。と思えばすぐに別の旗を構え直して軽く一回転。穂先を地面に突き立てて対面の先端で改めて慎二を拾い直す。
（……）
相変わらず、妙に技量が高いというか、さらっと超人的な曲芸を熟す少女だ。サーヴァントだから、で納得してしまえば楽なのだろうが、彼女の場合、容姿からしてそれで済まない訳がある。
バルトアンデルス――魔術協会における三大部門の一角にして、存在さえ定かではない最古の魔術棟。原初の魔術工房。そこの出身だと宣う彼女は、どれほど出鱈目な人物であるのか。少なくとも、彷徨

海を引き合いに出した時点でまともな存在であるはずがない。
　現に、偶然か必然か、彼女は昨日の今日でまたしてもサーヴァントを打破してみせた。朝の話だと、今日の夜にでもバーサーカーと交戦するつもりらしいし、もはや翌日にも「ヘラクレスの首をもぎ取ってきましたよ」とかほざかれても彼女ならばと納得しかねない。
　それはそうと、今の行為に何の意味があったのだろうか。パッと見た範囲では、ただ単純に武器を入れ替えただけにも思えるが、無論それだけであるはずがない。
　そんな考えが視線にも現れていたのか、ランサーは何でもないことのように。
「ああ、結界が保てなくなったようですので、ライダーさんを解放しました。……実のところ、随分と粘るもので、このまま消滅したらどうしようと内心思っていました」
「アレ、そういう目的だったのね……」
　だけど安心した。いくらサーヴァントとはいえ人を炙る行為、これを「趣味です」なんて言われたら何をしてでも同盟を破棄しなければならないところだった。
「というより、何かおかしいですね。なんといいますか、色々と試したんですが、どうも彼とライダーさんとの繋がりが感じられません」
「……何ですって？」
「いえ、私には魔術の心得がないので、あくまで勘ですが……何でしょう。上手く言えませんが、魔力不足以上にライダーさんの抵抗が薄かったのがどうも気になってしまって」
　曰く、彼が本当にマスターであるなら、よほど不仲でない限りはあれほど手緩い攻撃は仕掛けないとのこと。私はその場面を直接見ていないので詳細については不明だが、こうして無傷で彼女が立っているあたり、彼女なりの考えがあるのだろう。それに。
「根拠についてはわからないけど……慎二がマスターじゃない、っていうのはそれなりに納得できる話ね」
　心当たりもなくはない。先の思考にも被る願望に近い強引なこじつけだが、慎二がマスターであるというよりは説得力がある。

その返答がお気に召したのか、途端にランサーは元気になって、
「とはいえ、『間桐』が参加者であると判明した以上、もはや遠慮する必要はありません。正直なところ、マスターの友人である彼らを放置するのは心苦しかったので、ひとまず桜さんごと匿いましょう！」
「は？」
「れっつ、いざ鎌倉！　です！」
何を言ってんだコイツ。脊髄反射で喋るな。何故日本人特有のごった煮表現を使いこなしている。聖杯からの知識供給は万全だってか畜生。
私が何かを言う前に、ランサーは屋上の様相もそのままに、つい先日にも使用したソリをどこからともなく取り出して設置、担いだ慎二と気絶したままのライダー、そして先ほどから何故か呆然と立ち尽くしていた衛宮くんを乗せ、そのまま出発……って、
「ちょっ、待っ――アーチャー！　何ぼさっとしてるの！」
「あれに追従しろなどと、無茶を言う……！」
愚痴りながらも、何だかんだ意図を的確に察したアーチャーが私を抱き上げ、そのままサーヴァント特有の跳躍力を以ってしてソリの上に飛び乗る。
これが普通のソリならば、いや空を飛んでる時点で普通のソリではないのは確定なのだが、とにかくこのソリの耐久性については彼女のお墨付きだ。多少乱暴に扱っても彼女の思考と違って壊れることはないだろう。
「くっ……！」
昨夜とは違い、隠密性よりも速度を重視しているのか、耐えられないほどではないもののかなりの風圧が顔にかかる。が、これしきで怯んでもいられない。声を張り上げる。
「ちょっと、ランサー！　あの惨状はどうする気!?」
「件の監督役にお任せします！　おそらくですが、その方が色々と都合が良いはずです！」
「はぁ!?」
「だって、言峰綺礼さんなんですよね!?」

いや、そんな当然みたいに同意を求められても困る。割と普通に意味がわからない。なんだその理由は。確かに気に入らない奴ではあるけど、だからと言ってこの私が神秘の秘匿を怠る理由にはならないだろう。

その旨を伝えると、彼女は豹変したように意地の悪い笑みを浮かべて吐き捨てる。

「ハッ、その理屈、ちゃんちゃらおかしいですね！　ちゃんと知ってるんですよ!?　聖杯戦争の騒動のどさくさに、遺体を偽造して人体をくすねる魔術師がいたことを！」

「っ……」

「この街に如何程の魔術師が潜んでいるかは知りませんが、彼ら以上に神秘を晒そうとする輩はいません！　何より！　この国ではこう言うではありませんか！　そう――親の顔が見てみたいと！」

天を指差し、彼女が吠える。人外の肺活量から放たれる声量が、有無を言わさぬ堂々とした口調が、何より児童特有の妙なエネルギーに満ちた根拠のない勢いが主張を強引に押し通す。

「……」

（そういえば、こいつ見た目はガキだったわね……）

もう、何も言うまい。既に腹は括っている。彼女がそれで納得すると言うのなら好きにしてやろうじゃないか。実際、聖杯戦争のどさくさに紛れて人攫いを行った魔術師が居たのは知っている。確かにそれも悩み事ではあった。それもついでに解決してくれるなら万々歳だ――って。

「……っん、なわけ、あるかぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

「へぶっ」

懐から一握りで取り出せるだけ取り出した宝石を、全て魔力に変換してランサーの頭をひったたく。どうせロクに効いちゃいないんだろうが、こちらを向かせる程度は出来たらしい。恨みがましい視線で彼女がこちらを睨む。

「な、何をするんですか！　必要とあらば友人を害せるような人を育てた親がまともであるはずがありません！　そうであるなら、な

おさらこの事態は迅速に対応するべきです！」
「それはいいわ。言いたいことはわかるし、納得もできる。だけど――」
　言葉を溜めて、彼女にも届くようはっきりと言い放つ。ずっと言いたかったこと。遠慮して言えなかったこと。されど今後においては必ず必要になる問い掛けを。
「……ねぇ、そんなに私は信用できない？」
「ッ――」
「いえ、違うわね。――貴女から見て、私達はどれほど……」
「やめて、ください……！」
「私が頼りにならないのは、なっていないのは自覚している。セカンドオーナーとしての責務を果たしていないのもわかってる。でも、私は」
「――五月蠅い！」
　荒々しく放たれたその言葉に呆気に取られる。丁寧な物言いを心掛けている彼女の口から発せられたとは思えない暴言。感情そのままの発露。私の発言が、意図せずして彼女の根幹に触れた証。
「あ……」
　互いに続く言葉を何も紡げずして黙り込んでいると、失言に気づいたランサーがハッとしたように目を瞬かせる。
　無意識だろうか、未だ呆然としてる己のマスターに視線を彷徨わせる様は、まさしく叱られた子どもだ。見た目通りの、あるいはもっと幼い少女のような姿。
（……）
　これは果たして、どういうことだろう。蒙昧さを粧っての誤魔化しか、それとも。……肩書きや経歴、戦果、聡明さにばかり目が行っていて、目を曇らせていたのは、私の方だったのか。
　彼女は見るからに普通ではなかった。それは今まで接した範囲でも、そしておそらく今後においても印象が変わることはないだろう。何故ならば、サーヴァントとは魔術師にとってそれだけ貴重な存在だ。仮に彼女が一般人であったなら、あるいは、もしや、私は。

（……本当に、彼女はどういうサーヴァントなのかしら）
純粋かと思えば狡猾で、成熟しているように感じてその実は異なる。実のところ、今も所持している『旗』や、キャスターとの戦いで見せた宝具から、彼女の真名に見当はついていたのだが、今朝の言い訳でそれも怪しくなってしまった。真実を知るのは、きっと彼女のマスターである彼一人。
（……そして、その彼は魔術や戦術に関しては素人で、お世辞にも頼りになるとは言い難い。だからこそ、彼女はここまで頑ななんでしょうね）
足を引っ張っている自覚ある自分には、彼女が望む言葉をかけることはできない。そもそもからして、指摘しても彼女は絶対にそれを認めないだろう。
私自身、彼女が求めるものは明白でも、それを信じられない気持ちはある。無論、間違っている可能性だってある。迂闊なことはできない。
「……はぁ」
「う……」
溜息を一つして、怯える彼女をじっくりと見据える。目が合うと、瞳だけで僅かに視線を逸らされる。が、それでも見つめ続けるとやがておずおずと視線を向き直す。
しっかりと視線が噛み合ったのを確認して、
「ほら、しっかりなさい」
「わ――ちょ、何を……」
彼女がいつも額に装着している謎の装飾を取り上げて、頭を乱暴にがしがしと撫で回す。
突然の行動に困惑しつつもランサーは抵抗するが、その抵抗は弱々しく、うーうー唸りながらもされるがままとなる。
（……ってかコレ、地味に重いわね。こんなん付けてあんだけアグレッシブに動き回ってたのかコイツは……）
途中、どうでもいい理由で手が鈍るも、何も言わずにそれでもひたすらに撫で続ければ、段々とランサーの抵抗が無くなっていき、更に

しばらくすると、彼女は小さく語り出す。
「先の態度については謝罪します。ですが……すみません。少し、少しだけ、時間をください」
「ん。わかった。待っててあげる。……ごめん。この流れで聞くのも何だけどコレ、何？　額当ての一種？　それともカチューシャ的な何か？」
「え？　いえ、普通にサークレットですが……」
「サークレット？　……変な形ね」
「そうでしょうか？　金属製なのはともかく、『風と谷のナウシカ』でもクシャナ殿下が似たような装飾を付けていましたが」
「アニメ作品と比較されても……ん？」
おかしい。何で彼女は日本のアニメ作品なんかを知ってるのだ。流石の私でも知っているような世界的に有名なタイトルとはいえ、それを英霊である彼女が知っているのはおかしいだろう。
私が疑問に感じていると、ランサーはその疑問を更に加速させるように告げる。
「これもいずれ話しますが、私がその作品を視聴したのはこうして召喚されるより前の話です」
「……は？」
「魔術は、いえ、人間は常識に囚われない――貴女も、これから魔術というものに関わり続けるつもりなら、肝に銘じておいてください」
「……」
（……）

――残念ながら、人の出来ることに限界はありません。

最後に告げられたその言葉に、いつだったか、他ならぬ彼女が衛宮くんを見つめて放った台詞を思い出す。
何を評して『残念』なのか。彼女が立ち向かったという『特大の悪』とは何なのか。あの時は確か、アーチャーが召喚時に言っていた願いを思い返していて流してしまったそれが、今更になって引っ掛かる私

だった。

☆☆☆

「……どうするつもりだよ。僕や、桜を匿おう、だなんて」
ついに我慢ができなくなったのか、それまで黙り込んでいた慎二が口を開く。
とはいえ、その問いは当然の疑問ではあるが、それを聞くには些か遅すぎるきらいがある。何せこの問いを投げた時点で交渉は完了した。慎二の命を保証する代わりに身柄を確保する。桜についても監視役という名目の人質として扱うことを間桐家当主である間桐臓硯に認めさせた直後の話だ。
立場や扱いに不満があるならば、交渉の時にでも口を出すべきだ。
故に、この問いの真意は確認。『嫌い』と明言し、敵だった自分を匿おうと宣う彼女を、単純に不思議に思っただけなのだろう。
ランサーもその疑問は当然だと受け止め、律儀に慎二へと回答を行う。
「あー、その……実のところ、理由らしい理由はないといいますか、ですが、もしもがあった際にこれを見逃してはマスターや私が後悔するので保険をかけたと申しますか、ええと」
「……保険？」
「はい。……言ってしまえば私は、この街にいる魔術師のモラルに期待をしていません。えっと、慎二さん、でいいでしょうか。貴方もライダーさんを嗾ける直前、マスターに対して仰ってましたよね。遠坂さんは根っからの魔術師だから何をしてるかわかったものじゃない、と。これはまさしくその通りだと思います」
だからといいますか、と一度言葉を区切り、遠坂、慎二、俺。そして先ほどまで訪ねていた間桐家の方を見比べてから続ける。
「私は死を厭います。ですが魔術師はどうも共通して命を軽く見る傾

向がある。それは望んでこの戦争に参加した遠坂さんや、マスター……は方向性が少し違うので省きますが、とにかく。あの御老体……間桐のおじいさんも、孫をこの戦争に参加させた時点で信用に置けません。無論永遠に、とは行きませんし、私の自己満足でしかないのですが、せめて私がいる間くらいは、と」

「……ふーん」

慎二にも思うところがあったのか、ある種の傲慢であるランサーの選択に彼は否定することも、それ以上を追及することもなく、彼にしては意外なほど素直に引き下がる。

それまでは単なる友人としてしか接していなかった彼の、それまでとはまるで異なる側面に、自身の目を疑うような、フィルター越しに世界を見つめているような錯覚に陥る。が、どれほど世界を否定したところで、現実は俺の前に重く深く立ち塞がるのだ。

（俺は、どうするのが正解だったのか――）

そんな光景を見ながらも、俺は今更すぎる自問を繰り返す。結局、令呪を奪うこともなく、ランサーが言っていたように遠坂に頼んでガンドとやらで彼を縛ることもなく、監視というお題目で実質的にお咎めなしで解放した彼の扱いについてを。

彼女が聖杯に願いとして掲げ、きっと他の何よりも厭うであろう『死』。それは万人に共通するだろう価値観であり、魔術師であっても変わらない、否、神秘を尊ぶ魔術師であればこそ、人よりも重要視するだろう概念。

（でも、だからこそ）

生贄、という思想は、万国共有で強大な力を生むとされる。魔術師にとっても、死は重要なもの。でも、だからこそ、燃料として効率が良いと彼らはそれを軽んじる。故にこそ、彼女は自身の傲慢を押し通すのだ。

「しかし、変ですね」

「……アンタの行動以上に変なものなんてあったかしら？　こう言ったらなんだけど、アンタみたいなのが出張ってた割に交渉はスムーズにいったと思うけど」

「それです遠坂さん。スムーズに物事が運ばれたのが変なんです。如何にサーヴァントと言えどこの見た目、普通だったら侮られて当然なのにそれもありませんでしたし」
「交渉相手が普通じゃなかったからだろ。爺さんはああ見えて５００年以上生きていて、それまでに冬木で起きた４度の聖杯戦争を全て見てきたらしい。単純計算で２８騎のサーヴァント……その中には、お前のような目を疑うサーヴァントがいてもおかしくはないさ」
「いいえ、逆ですね。聖杯戦争やサーヴァントに詳しければ詳しいほど、私という存在は彼らにとって鬼門となります。単にあの人がポーカーフェイスなだけ、という可能性もあるんですが、それにしても」
（考え過ぎ――でも、ないのか。何せジャンヌダルクオルタサンタリリィだもんな……）
改めて言葉にしても頭が痛くなる名前だ。しかも彼女がその名前を口にしてからというものの、マスターである自分には目を凝らせばクラスやステータス、スキルの他にはっきりとその名前が見て取れてその度に眼を疑ってしまう。
こう言っては失礼かも知れないが、慎二の祖父は魔術師だと前提にして見ればこう、『如何にも』という厳格な雰囲気があった。下手に造詣が深いからこそ、その存在を疑わずにはいられない――彼女がそう考える理由は、彼女の真名を知る俺にはよく分かる。
自分でも似たようなことは考えたのだろう。自身の言葉を否定された慎二は、しばらく考え込んだあと、ふと気付いたように、
「だったら、さく――」
「――ちょっと待って。何か……」
当然、意図して、ではないんだろうが、いつのまにか小さな宝石を手にしていた遠坂が、まるで慎二の言葉を遮るように声を上げる。
どうしたんだろうか。今俺たちがいるのは間桐家からの帰り道。日は既にどっぷりと沈み、こうして魔術の話を堂々とできるほど人気も無いこの道路に、何が――人気の無い？
（いや、そうだ。おかしい――今は夜中とはいえ、ここは普通の住宅街だ。それなのに、これまで誰一人として――）

「――やっと気付いた。全く、こんなにかかるなら、罠の一つや二つ仕掛けた方がよかったかもね」
「アンタは――」
コツ、コツと、ブーツがコンクリートを叩く音が響く。
その音は軽く、間隔も狭い。それこそ隣を歩くランサーのように、体重や歩幅が俺たちと異なることがわかる。そして、その間隔はランサーとほぼ等しい。この場面で、この状況下において、俺たちに話しかける子どもとは、やはり――
「久しぶり、ってほどじゃないけど――また会ったわね。……そこのランサー」
「アンタ、バーサーカーの……」
「そうよ。悪いけど、今回は悠長に挨拶するつもりもないわ。どっかの誰かさんが城の仕掛けを片っ端から破戒してくれたから、こちらとしてもあまり余裕がないの」
「バーサーカーなんて呼ぶから……」
「黙りなさい。私のバーサーカーは最強のサーヴァント。卑怯な手さえ使われなきゃ、勝てる英霊なんて何処にもいないんだから」
誰もいない住宅街の道路を我が物顔で闊歩し、闇に紛れて現れるのは、つい先日に知り合ったバーサーカーのマスター。確かその名を、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。遠坂や間桐と同じ冬木における御三家にして、現状、単騎でこの聖杯戦争の優勝候補として挙げられている人物。
あのランサーをして、正面から打倒することは不可能だと言わしめたバーサーカーは、なるほど確かにこうして真正面から挑めば、たとえ相手がどんな英霊だろうと最強の名を欲しいままにするだろう。
更に一歩、足を踏み入れたイリヤスフィールの庇うように、眼前に鉛色の巨人が現界する。
ギリシャ神話に登場する半神半人にして、ギリシャ最大最強と名高い英雄。昆虫の王者、世界最大のカブトムシに彼の名前が付けられていることからも、その知名度は計り知れないと言っていい。
「――宣言するわ。今日は誰一人、逃がさない」

それは正しく死刑宣言。圧倒的な力を持つが故の確定事項。驕りではなく、一切の誇張なくそれが成せる力を保持しているからこその台詞。

「皆殺しにしなさい。バーサーカー！」

「――――!!!」

鉛の巨人が吼える。斧と言うにはあまりに無骨な塊が空を裂き、その圧だけで生命の危機を抱く。

全身が震える。無理だ。こんなもの、人間がどうにかできる相手じゃない。ただひたすらに隔絶した暴力が、最低限の指向性を持つだけの狂戦士が、これがこんなにも恐ろしい。

「――――!!」

バーサーカーが大きく、大きく斧剣を振りかぶる。野球のワインドアップにどこか酷似したゆったりとした動作にどうしてか目が離せない。全身を飽和する警鐘に、どういうことか身体が反応しない。

否、仮に全力で逃げたとして、バーサーカーが俺を捕捉する僅かな時間、ほんの少しだけ生が延びるだけだ。それこそが、ただの人間でしかない俺の限界。であればこそ、その未来に真っ向から立ち塞がるは、彼と同じ、英霊でしかあり得ない。

「――『我が神はここにありて（リュミノジテ・エテルネッル）』！」

ごっそりと魔力が抜け出る感覚と、空間そのものがひしゃげたような奇妙な音。そして何よりも視界に映る常識にはあり得ない光景。即ち、旗を掲げたランサーが、そこから放たれる柔らかな光によって凶刃を押し退ける姿。

救国の英雄として語られたジャンヌ・ダルクが、常に先陣を切って走りながら掲げ、付き従う兵士達を鼓舞した旗。それは天使の祝福によって、あらゆる悪意から味方を守護する聖なる結界となる。

「――――」

「ぐっ……！」

しかし、それでも狂戦士であるヘラクレスは止まらない。狂化して

いるが故に猪突猛進を地で行く彼は、一度で駄目なら二度。三度、四度、五六七と愚直に攻撃を繰り返し、９頭の頭を持つヒュドラを落としたという本人の卓越した武技とも相俟って、重なる連撃は、徐々にランサーを結界ごと押していく。

「あ――……」

――ピシッ、

微かに聞こえる破滅の音。攻撃一辺倒で攻め続けるバーサーカーと、防戦一方で凌ぐしかないランサーを分かつ決定的な悲鳴。

矛盾の辻褄に使われる最強の矛と最強の盾。それが互いに実在した場合の結論。どちらがより最強かという話。

「ッ――……」

時間にして一分も経たないうちに、そこかしこに亀裂が生じ始めた旗を、ランサーは眉間に皺を寄せてしばらく見つめ、やがて諦めたように目を閉じる。

しかし、すぐに覚悟を決めたように目を見開き、血を吐くような声で叫んだ。

「っ、……――反転。『吼え立てよ、我が憤怒（ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン）』!!」

「な――!?」

その言葉を起爆元（トリガー）に、それまで俺たちを守護していた結界が燃え上がり、ヘラクレスを巻き込んで爆発する。

発生した衝撃の威力たるや凄まじく、まるでそれまでに受けた攻撃を吸収・増幅し、そのまま反射させたような、苛烈極まるもの。

前方全てを薙ぎ払い、辺り一面を黒い焔で染め上げる少女は、聖女という肩書からは程遠い姿。

彼女ほど悲惨な目に遭ったのなら復讐を考えていないはずがない――という、本人とは無関係な民衆の想いを基に存在を確立した彼女は、故に、ジャンヌ・ダルクのオルタナティヴ（別側面）を名乗り、その身を焦がした焔を怨念として撒き散らし、世界の全てを嘲笑う。

「や、やったのか……？」

バーサーカー諸共にあらゆるものを吹き飛ばしたからだろうか、怯えた様子で慎二が声を出す。しかし、それは――

「いえ、まだです。この程度では――」

「――!!」

「??????????」

「??????……覚悟はしていましたが、もはや一度も殺せませんか。本当、厄介極まりますね……っ、くぅ、はぁ」

既に握ることも辛いのか、ガシャン、と地面に投げ出されるボロボロの旗を尻目に、絶望の化身が吠え猛る。

あれほどの焔を意にも返さないその姿は、正しく神話における怪物の再来だった。

対英雄：E

「――!!」

「……、……っ」

ふらつく足元から体勢を崩し、頭を揺さぶられて目を覚ます。否、やや飛んでいた意識が浮上する。

疲労、だろうか。それとも単純に魔力の不足か。いずれにしろ、この状況下で意識が飛ぶようなら相当に拙い。元より万全とは言い難い体調ではあったのだが、やはり連日の戦闘で集中力が鈍っているのだろうか。

（右、左、正面、背後、右斜め、弾いて後逸、槍に持ち替えて懐に、次は――）

わからない。正直に言うと、それを考える余裕もない。サーヴァントとしてのステータスで圧倒的に劣る自分は、ただひたすらに積み上げた経験から勝利への道を模索し、綱渡りのように戦力差を上手く誤魔化して、どうにか相手の実力に迫るしか勝つ術を持たないのだから。

（……あと、どれくらい。いつまで、これは続くの……？）

一手凌ぐごとに存在が削られる錯覚を抱く。まるで通らない攻撃が焦燥を煽る。それでも背後にいる善き人達を守るため、かたちだけでもあの人に倣うために、ふらつく足を気合いで支えて武器を取る。

――既に、手先まで鈍ってしまったのか、武器を握った感触がない。腕全体を這うように襲っていた痛みはもはや何も感じられない。魔力が足りない。速さが足りない。火力が足りない。気力体力精神力と言った最低限のものさえ足りていない。

（足りない。足りない。足りない。……このままだと、確実に押し負ける）

今の私にあるのは、技量だけだ。中身はドロドロのまま、外見だけを取り繕った私自身とまるで同じ。側から見れば、私の戦いはさぞ優美に見えるだろう。内情を知らねば、勇者の如く感じるヒトも、きっと何処かにいるのかもしれない。

ただし、それは所詮ハリボテだ。如何に実力があっても、その中身を伴わなければ意味がない。強いから勝つのは当たり前だ。実力差を凌駕する意思がなくては、とても英雄だとは言えない。

私の望み。聖杯へと捧げる願い。とはいえ、私のそれは聖杯を必要とはしない。それは私の内より出でるもの、否、誰しもが持ち得る真なる強さ。全ての『私』が憧れた、本当の意味での人間らしさ。

あの人は、生まれた時から怪物であったこの私を、英雄であると言ってくれた。ならば、その言葉を嘘にしないことが、今の私の望み。

（腕が痛い。お腹が苦しい。全身が思うように動かない。頭が働かない。頼みの綱である技量も、所詮はスキルで底上げしたものだから、徐々に理想との齟齬が生じてる――でも、でも。だけどそれでも）

それでも。視界は明瞭。身体も動く。声も出せる。思考だって回せる。やる気だって残されている。まだ闘える、まだ頑張れる――だったら、諦められるわけがない。

（もっと、もっと。どこまでも強く、どこまでも理不尽に）

私には、それができる。虚構を現実に。あらゆるものを妄想で塗り固め、世界を都合よく解釈する力がある。

私は普通の英霊ではない。人間ですら、あるはずはない。私の本質は泡沫の夢。頭から爪先、自らの願いさえも嘘で塗り固めたような幻想の存在。虚勢は現実に、事実上、どこまでも無敵になれる。

そのために必要なのは、どんな困難であれ目を逸らさないこと。戦いを怖がることは恥ではない。誰かを守りたいという確固たる信念を持つ。そんな、誰にでもできることを懸命にこなせば、どんな強敵にだって立ち向かえる。

イメージするのは、常に最強の自分。なんのことはない。かつての思い出を思い起こせばそれで済む。

「――主よ。どうか私に、我が同胞を守る力を」

（……そうすれば、いつかきっと）

きっといつか、人理の最果てで。私ではない私が、私の大好きなあの人に再会して、その道の助けになることができるから。

☆☆☆

正直なところ、この展開を予想していなかったと言えば嘘になる。だってそうだろう。補給を断つのは戦争の常とはいえ、やられた側がみすみすと何のアクションも起こさないというのは夢物語だ。そのままでいれば危険であるなら、それに反応するのは当然のこと。考えるまでもない。

まして、彼女は誰もが認める最強の存在を手元に抱えている。凛のようにこの地で生まれた人間であるならともかく、多少の思い入れがあるかないかの別荘、戦時中における寝床を放棄するくらい、彼女にとっては当たり前の対応であり、無謀でもなんでもない。

強いて言うなら、ただでさえ魔力消費の激しいバーサーカーを常在戦場の心得で従えることと、城に備えてあっただろう補給手段が絶たれることが無視できないリスクとして重くのしかかるが、それでも彼女の魔力量を以てすれば少なく見積もっても一週間は最大のパフォーマンスを維持することができ、一日もあれば顔も素性も知れた素人を含む多人数の怪しい集団の捜索など、それこそ一般人であっても容易い。

であればこそ、痺れを切らした彼女が強襲するのは必然。即日対応したのにも驚きこそすれ、予想外には至らない。

故に、ただ一つ、予想外があるとすれば――

「……神は天に有り」

幾度と無く振り下ろされた凶刃が迫る。音速を優に超えているだろう一撃。これが刀のような抵抗の低い武器であるならともかく、ともすればバーサーカーのマスターである少女よりも巨大な石斧によって引き起こされたものだとすると、それがどれほどとんでもないものなのかはわかるだろう。

バーサーカーというクラスは、狂化によって理性と引き換えにステータスを底上げする。本来ならば弱小の英霊を凡百まで引き上げるためのそれは、ヘラクレスのように超一流の英霊と組み合わされば、ステータスに飽かせた膂力だけでありとあらゆるものを粉砕する。

だから躱す――ごく単純な帰結。しかし、言うは易し、行うは難し。それが尋常の技であるはずがない。無理を押し通せるその技量もそうだが、たとえそれだけの能力があったとして、ほんの一瞬。瞬きほどの時間でも臆して目を逸らせば全身がミンチになる状況下において、平然とそれを成し遂げる存在とは、果たして人間と呼べるのか。

「されど関せず、世はなべて事も無し」

否、彼女は元より人間ではなく、その存在を人類史に刻まれた英霊――万夫不当、一騎当千の英雄が一人。幼い少女の皮を被っていても、その実単純なステータスだけで凡百（わ）の英雄（たし）を凌駕する。

何もかもが謎に包まれた英霊。それは最強最高最上の英雄たるヘラクレスが相手であっても揺らぐことはなく、その存在と共に文字通り、誰にも捉えることは叶わない。

「人は限りなく卑小で有り続け、生きるべき場所に至る道を知らず」

バーサーカーに痺れを切らすという概念は無く、既に１０００を超えたであろう攻撃は、既に瓦礫と化した道路に再度傷跡を刻む。

――つまるところ、少なくとも現段階において、バーサーカーの攻撃は彼女に通用しない。それはまさしく、異常な光景だろう。外見だけは年端も行かぬ少女が、身長にして３ｍはある巨漢を翻弄しているのだから。

「故に、我が君は英雄に非ず」

少女が槍を地面に水平に構える。まるで生まれた瞬間から握られていたような、凛とした、堂に入る馴染んだ姿勢。

武に通ずるものなら心動かされて不思議じゃない〝会〟も、バーサーカーは一顧だにしない。そして、そのような心無い一撃は彼女に通用しない。

「されどその道は険しく果てしない、人類史を巡る航海図――でも、あ

の人は、それを悲観したことはなかった。だからこそ、私はあの人が信じた英雄として再び、その道を支えたい」

幾度と無く振り下ろされる斧剣を躱しながら、念入りに、神経質なまでに構え直す。会と表現したのは何も私がアーチャーだからと言うだけではなく、その槍が弓のように発射寸前であるかのように見えたからだ。

「だから、私は押し通る。何をしてでも。誰が相手でも。私が英雄であると証明し、またいずれ、人理の果てに彼と出逢うまで――」

「――!!」

バーサーカーが吠え猛る。呼応する大気が震え上がり、それだけで根元的な恐怖心を煽る。無論、私はその程度の圧で番えた弓を震わせたりはしない。が、それも私が歪ながらも英雄であるからこその話。凛や小僧のみならず、バーサーカーを従える主人までもが萎縮する光景。怯えても、逃げ出しても誰も咎めることはない。

しかし。

「あ――あ、、ぁぁあああぁぁぁぉぉあああ!!」

絶叫。愛らしい少女の口から発された音とは到底思えない、バーサーカーにも負けて劣らぬ悲鳴のような掛け声が、狂戦士の雄叫びを真正面から受け止める。

愚直に振り下ろされた斧に狙いを定め、頂点部が腕と重なった辺りで発射する。ともすればヘラクレスよりも力任せな正面突破。外見に不相応な技量と折り重なったその一撃は、正しく怪物を屠る勇者の輝きを放った。

「――『偽・英雄作成』!!」

是なるは闘いの根源。原初の信仰と呼ぶに相応しい不条理。十二の試練を纏うヘラクレスに神秘無き攻撃は通らない――そんな常識を、殺せるだけの威力があれば効かない理由がないという異常によって捩じ伏せる。

「え――?」

凄まじい轟音と共に、鍔迫り合うことさえなく、弾かれたように大きく後方に仰け反り、そのまま倒れて天を仰ぐヘラクレスを、そのマスターは呆然と見つめる。

見れば、槍とかち合ったはず斧は背後にある建物の壁に深々と突き刺さり、ヘラクレス当人に至っては肩口からその先が全て消滅しているように見える。

とても現実のものとは思えない光景だが、そもそも、古きモノがより純度の高い神秘となるなら、蘇生魔術という高度な技術が、石器時代から存在を知られる槍の一撃を凌駕するはずがないのだ。下手に銃などの現代兵器に頼るより、素手で殴りかかった方がダメージを出せる。個々人がある種の法則に従う怪異によく見られる現象である。

（無論、そのような屁理屈を成立させるには、彼女が素でヘラクレスを殺せると、それを事実せしめる一撃を放てることを前提とするが――）

「っ、っく、ぅぅぅ……いたぃ……」

信じ難いが、現実としてその理は成立し、少女は怪物を打ち倒した。それが一時凌ぎに過ぎないと明白でも、成した当人が蹲って無様にのたうち涙ぐんでいても問題はない。

勝てば正義だ。それだけはどの時代でも揺らぎない。特にバーサーカーが馳せたギリシャでは、尚更それが顕著だったであろう。

「ば、バーサーカー……！」

「――させん」

護衛を放棄し、蹲るランサーの横を全力で駆け抜け、動きを見せたバーサーカーのマスターである少女の首元に投影した剣を添える。

分かりやすい人質。だが、卑怯とは言うまい。物量で勝てぬのならば奇襲内応は戦争の常。強いて言うなら無断であることが道理には合っていないが、敵味方問わず死を避ける方向に動けばランサーも否は言わんだろう。

「この剣は真名を『破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）』と言い、宝具を除くありとあらゆる魔術を初期化する能力を持つ。それは、マスターとサーヴァントの契約であっても例外ではない」

「――！」
『令呪を使用し、バーサーカーを拘束する』――それ以外と取れる行動を見せた段階で契約を破却する。ああ、判断の基準は私の独断だ。一切の誤解なく行うことをお勧めする。……あれも腹の内には色々と抱えてるようだが、ここで潰されては困る」
「……」
敢えて期限は設けなかったが、流石にバーサーカーが起き上がるまでは待たないと判断したのか、何かしら逆転の策を有していたのか――それとも、単純に自身の身の安全を優先したのか。
少女が頷いてそれを実行するまで、時間にして一分にも満たなかった。

☆☆☆

「……おい、遠坂。サーヴァントってのは、あんなのがデフォなのか？」
「んなわけないでしょ……多分」
恐る恐る、と言った具合に慎二が話しかけてくる。正直なところ、間桐くんにこうして気安く話しかけられること自体が微妙に不快であったが、そう思う理由は非常によくわかる。
この私をしてそこまでするか、と言わんばかりの死闘――というか明らかに後先考えてないのが丸わかりの根比べ。言ってしまえばなんのことはない、アインツベルンの見栄が勝つか、ランサーの意地が勝つかのぶつかり合い。
どちらも互いに引くわけには行かず、色々と泥沼な削り合いの末がこの結末。まさか実質的にこちらが勝利（？）することになろうとははっきり言って露ほども思ってはいなかったが、慌てて用意していた

逃亡用の策や、最悪、ランサーを見殺しにする選択肢も現実的なセンではあったため、心情的にもそうせずに済んで良しとするべきだろう。

「……しかし。なんだかんだ、全部片付いちゃったわね」

ついていけない。もっと言えば、付き合っていられない――これが正直な感想だったりする。良くも悪くもサーヴァントはスケールが我々とは異なりすぎて、目の前で起きたことに対しても私は今ひとつ実感が薄い。どこか彼女たちの戦いを俯瞰して眺めていたのも、今の状況を客観的に評価できるのも、その現実逃避の賜物だろう。

身も蓋も無い言い方をしてしまえば、結局私はどこまでも記念参加で、真剣とは程遠い心意気だったのだろう。だから彼女があそこまで必死な理由も、アーチャーが未だ何を隠しているのかも、衛宮くんが葛藤する理由も、それこそ今こうして慎二がこの場にいる経緯すら他人事のように感じている。

誰も彼もが、それなりの覚悟を持ってこの戦争に臨んでる。足りないのは私だけだ。認めるのは癪だが、私はきっと、単純に「お人好し」なだけで、衛宮くんほど突き抜けることはない。まあ、良し悪しで判断するのなら、こうして留まった方がそりゃあまあ「良い」んだろうけど。

（……）

瓦礫の山と化した地面に蹲るランサーを見やる。俯せに倒れているので角度的に確認はできないが、両腕は見るも無残な有様となっていることだろう。

「……」

――少し、少しだけ、時間を――

「……放って置けない、か。贅肉ね」

腹をくくる。どうせ何だかんだ離れられないのはわかってる。私の性格は、私自身が一番よく分かっている。こうして賢く振舞っていても、最終的には感情に流されるだろうことも全て。

幸いにも、既に残された敵はセイバーとアサシンの二人。どうせサーヴァントが全滅するまで聖杯を手にすることは叶わないのだ。であれば、願いの擦り合わせについては、敵がいなくなってからでも遅くない。

（セイバーはあの時の女剣士。そしてアサシンについては未だ不明、と……）

「ま、兎にも角にも、とりあえずこの子が回復してからよね。……衛宮くんも魔力消費で酷い有様だし、どれくらいかかるかはわからないけど……」

他でもない当事者の彼女が次々と問題を持ってくるおかげで、やることはまだまだ山積みだ。一つ問題が解決したからと言ってその数に限りはない。

ただまあ、負担が減ったことは間違いなく、だからこそ突き放すこともできず、個人的にはそのあたりが非常に困り者ではあるのだが。

「ま、こうなりゃ徹底的に首を突っ込むとしますか」

……どうにも他人事であるかのような意識は抜けない私だが、それでも普通に考えて、聖杯戦争という舞台を用意したこちらにも責任はあるわけだし。

☆☆☆

間桐桜は苦悩していた。

そもそも今日の夕方、既に部活を退いて久しい先輩が弓道部に顔を出してから、どうにも不安のような感情を拭えなかった私だが、それは先輩が部活の後にも学校に残ると明言したことで確信へと変化し、また同時に、彼が日常よりも魔術を優先したその事実が、私の心を深く蝕んでいる。

現在、時刻にして午後９時。既に藤村先生もなんらかの用事があったんだと判断し自宅へと帰還して更にしばらく。最終下校時間も２

時間近く突破し、普通に考えるならば、もう生徒は学校にはいられない時間帯。付け加えるなら、今は監視の名目でしれっと居座ってるこの家から学校までは商店街を経由しても３０分を超えることはなく、長々と買い物をしていてもこの時間まで食い込むことはないだろう。
（つまり、先輩は……）
魔術のトラブルに巻き込まれている。否、行動からして、自分から首を突っ込んでいる、が正しいだろうか。それも学校に残っていると なると、まず間違いなくライダーが張っている結界がその理由。
そして、ライダーのマスターであるこの私は、少しその気になってしまえば、ライダーの視界を通して彼の現状を把握できる。
――兄さんの逆鱗に触れ、地面に冷たくなって転がっているかもしれない、先輩の姿を。
（……っ、）
怖い。怖い。怖い。目を瞑るのが怖い。物を考えるのが怖い。何かの拍子にそれを目の当たりにして、それが現実になってしまうのが恐ろしい。
ライダーは怪物だ。それはマスターであるこの私が一番よく分かっている。睨まれただけで石と化すゴルゴーンの魔物――まともに考えたら、そんなものに立ち向かうなんて、倒すなんて不可能だ。
７時ごろ、魔力を急激に吸われるような感覚があった。その理由を、私は未だに探ることができずにいる。
簡単だ。目を瞑って、ちょっとだけ意識を傾ければいい。むしろ今は引き離し拒絶しているこのつながりを、そのまま素直に受け入れればそれで済む。
テレビの電源を入れるより少ない労力で、その映像よりも遥かに鮮明な情報を得られる。それが私には、何よりも恐ろしい。
止められたはずだ。抗えたはずだ。時間はあった。きっかけもあった。ライダーのマスターである私なら、如何様にも、どうとでもなったはずだ。選んだのは私だ。黙認したのは私だ。……見過ごしたのは、この私の責任だ。
（嫌だ。いやだ、いやだいやだ。見たくない。知りたくない。

でも、でも！）
不安が募る。心配が溢れる。そんな資格はないのに。どれほど図々しいのだ、私は。
ふと、今更ながらに、藤村先生を見送りに居間を離れたあと、部屋を出る際に消しておいた照明を点け忘れていたことに気づく。
あれほど闇を恐れていたのに、自分が闇の底でもがいていたことにも気付かない。どうやら本当に重傷らしい。取り繕うことさえできていない。
（……）
闇に生じて心を鈍化させ、ほぼ身動きを取ることもなく追加で３０分。時間にすると藤村先生が部活明けにこの家に居座っていた時間とほぼ同等、しかし体感時間は永遠にも等しく、おまけに時間感覚と言った概念さえも諸共に思考から排斥するよう努めていたので、それが私には、どれほど長く感じたことか。
そして、私がどれだけ自らの世界でふさぎ込んでいても、時間を止めるには至らない。時間とは究極の目安。お爺様でさえ逆らう事はできない、万物を流転させる絶対の法則。故にそれは、私如きを容易く置き去りにする。
――キィ、
「……！」
その音が聞こえたのは、果たして何十時間が経過したころだっただろうか。
遠慮して扉を開けたような、試しにドアノブに手を掛けたら鍵がかかっていなくてつい開けてしまったかのような、そんな家主にはあり得ない躊躇いがちな開扉が、逸った心を萎縮させる。
（誰……？）
とはいえ、疑問に思えど確かめる気力は湧かない。我ながら自棄っぱに近い感情だと自覚しているが、少なくとも一分一秒で矯正するのは不可能だ。
そして、玄関から居間まで辿り着くのには一分もあればお釣りが来る。特に、扉を開け放った人物は私にとって予想通りでもあり予想外

の人物でもあったため、その行動に迷いはなく、点けられた照明と共に視界に飛び込んできた光景に、私は色々な意味で驚愕することになる。
「っと、点いたわね。早く布団を……って、桜!?　　なんでここに、ってかなんでそんな隅で蹲ってるのよ!?」
「おいおい遠坂。さっき立ち寄った僕ん家に桜はいなかったし、話の流れからしてこいつがスパイみたいなもんだって簡単に想像付くだろ？　　まあ、衛宮もいないのにここに居たのは大分私情混じりなんだろうけどサ、そのせいでなーんも成果が得られず、爺さんが怖くて帰るに帰れなかったってオチだろ、どうせ」
　矢継ぎ早に繰り出される会話。それ以前に聞き覚えのあり過ぎる声に混乱する。先輩と同盟を組んでいた姉さんはともかく、何故兄さんがここに。先輩はどこに、どうして彼らがこのタイミングでこの場所を訪ねるのだ。
　そして兄さんの推測は当たらずとも遠からず。お爺様云々を除けば大筋は間違っていない。だからこそ彼がここにいる理由が掴めないわけなのだが、先輩はどうしたのか。仮に最悪の事態だった場合には、なおさら彼がここに来る理由がないわけで。
「ど、どうして兄さんが……」
「……あー、何だ。僕がやらかしたんだよ。だからお前は、わざわざ言葉を選ぶ必要はない。それよりもアレだ。ヒマならそんなトコで蹲ってないで布団でも出してくれよ。僕も何度かこの家に来たことはあるけど、物の場所とかはお前の方が詳しいだろ」
「え……？」
　いつも通りの憎まれ口ながらも、どこか歯切れが悪くそう発言する彼と、彼が背負っている血塗れのライダーの存在に今更ながら気づく。
（えっ……どう、いう、こと？）
　よくよく見れば、入ってきたのはそもそも兄さんと遠坂先輩だけではなく、遠坂先輩のサーヴァントであるアーチャーさんに、紫色の服を着た見覚えのない白髪の少女。そして遠坂先輩主従がそれぞれ担

いでいる先輩とランサーちゃんの姿。
「っ――せ、」
先輩、と声が出そうになったのを辛うじて堪え、見たところライダーとは違い外傷もなく寝息を立てている先輩の姿に、私の邪推が杞憂だった事実にこれ以上なく安堵する。
（だけど、これってどういう――まさか、でも、そんな）
思考が巡る。が、その結論は出るはずもない。とはいえ先にも告げた通り、私の意思とは無関係に時間は平等に針を刻む。――此処にその針を進めるのは、ある意味では状況下においては当然の人物で、また同時に、状態としては色々と不適格な人物の口より放たれた。
「……、……。……ま、」
「――ランサー……！　アンタ、まだ意識が……？」
「ま、……まりょく、を……いま、宝具を、使って、……あ。――ぐふっ、」
「え？　って、ちょ」
（死んだ……!?）
一瞬だけ意識を取り戻し、今にも死にそうな掠れた声で何かしらを呟いた彼女は、配慮する余裕さえもなかったのか、私の前でも構わずにぼろ切れが付いた旗のような何かを手元に現界させ、そのまま多量の血を吐いて気絶する。
内出血で異常に肥大化した腕と、握ることも能わず転がり落ちる旗が、おそらくは現状の異様さを何よりも証明するのだった。

カリスマ・・・――

衛宮士郎は呻いていた。

場所は自室の用意してもらった布団の中。先程から襲い掛かるは気怠さを究極的に突き詰めるとこのようになるのだろうか、と思わせるほどの倦怠感。魔術というモノに関わっている関係上、苦痛や吐き気のような拒絶反応には慣れ親しんでいる、が、それすらも些事と思わせんばかりの脱力感、無力感が刻々と自身を苛んでいる。

（……だが）

こんなものは序の口だ。人を助けるとは、誰かを救うとはこういうことだ――ランサーはそう言っていた。救う、という行為はこの上なく傲慢で自分勝手な行為であり、それが報われることなどあり得ないと。常に自分をすり減らし、得るものが徒労であるなら良し。罵倒であってもそれでも良し。そして、救われたことにすら気付かれないことなどザラにある、と。

『それでも、と宣う人は多くいます。人に感謝して欲しいわけではないと。それこそ善意が傲慢であることを自覚し、自己満足で行なっている人も知っています。その意思は確かに素晴らしいのでしょう。――ただ、その人たちは一人の例外もなくどこか「おかしい」と断言できるのです』

人に悲しみなど不要と断じた者がいた。人は楽をすべきと微笑う者がいた。人は愛されるべきだと誘う者がいた。――――一つ一つは立派な理想だ。善意、と評していいのかもしれない。しかし。

『誰かを助けるなんて、普通の人間にはできません。そもそも人間は、自分一人ですらロクに守ることはできません。それなのに誰かに手を伸ばすということは、それはすなわち自分の守りを捨てることと同義です。ですが、貴方はそれでも協力すると言った。だからこそ私は、貴方の協力を厭うことはしません』

首を突っ込むとはすなわち、首を晒すということ。その代償が自分の命。それさえも蔑ろに、それを押して救うと豪語するならば、せめてその責任を担って貰う。

この苦しみは、その一端だ。それでも自分は、間違いなく運が良い方だ。今回は奇跡的に勝ちを拾えただけで、この戦争にこれ以上踏み込むつもりなら、本当に命を失うかもしれない。だから、だから。

（……だから、諦めてもいいなんて、どっちがお人好しだよ、ホントに）

明言はされなかった。だが、未だ短い付き合いとはいえ、彼女とは一連托生の仲だ。言いたいこと、言えないこと、言うべきこと。悩んでいることくらい分からないはずがない。

（……）

瞼を閉じると、身に覚えのない光景がその裏に浮かぶ。

契約して以降、妙に鮮明な夢を見る。舞台こそ何故か燃えている冬木から宇宙空間のような場所まで見る光景は様々なれど、その大筋は変わらない。

国も時代もバラバラな英雄たちが、あるいは英雄と呼ぶにも躊躇われる装いの者たちが、いっそ呆れ返るほど統一感のない集団が、たった一人の人間を前にして見栄を張る。自分は英雄だ。だから任せろ、と。

彼らを尊敬すべき英雄だと信じ、しかし実際はその場にいる誰よりも英雄として在らんと立ち上がる少年。誰よりも弱く、それ故に誰よりも人間らしい少年。

最初は目障りな餓鬼でしかなかった彼は、あくまで協力者に過ぎなかった彼は、親切な人でしかなかったはずの彼は、彼が示すその在り方は、我々の気を惹くに余り在った。

英雄になりたい。そう願うようになったのは、いつからのことだっただろう。

人々に担ぎ上げられた偶像ではなく、国を荒らした魔女でもなく、まして漫才のような経緯で誕生したナマモノでもなく、彼の信じる英雄として在りたいと願うようになったのは。

私が、ただ強いだけのよくわからない存在でなく、彼の信じる英雄として、彼に胸を張って生きたいと想うようになったのは、果たしていつ頃からだっただろう。

私はいつも、助けられてばかりだった。だから今度は、私が彼を助けたい。
私ならば、彼のことを覚えている。私だけが、彼の歩んだ旅路を知っている。彼と共に歩んだ旅路を、確かな歴史としてこの身に刻んでいる。故に、私はここにいる。
ああ、優しい貴方、お人好しの馬鹿、大好きなトナカイさん。
貴方の旅は、無駄ではなかった。その轍は、星の歴史に刻まれた。どれほど不完全な英霊だとしても、誰かに寄り掛からねば生きていられぬ未熟者だとしても、私は確かにここに在る。
『――我が真名はジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリィ。人類史の果て、人理崩壊の一端として生まれしモノ。そして同時に、彼の歩んだ旅路が、我々カルデアの刻んだ轍が、どれだけ困難で、それ以上にどれほど出鱈目なものだったか、その存在で示す者です』
（……）
目を開ける。深く沈んでいた意識が浮上し、引き摺り込まれるような夢心地が、そのまま疲労による微睡みへと置換される。
私は、彼の歩んだ旅路を覚えている。幾度となく、彼女は噛み締めるようにその言葉を繰り返す。思えば俺は、この時点で少しは疑問に思うべきだったのかもしれない。
確かに、彼女の言葉に嘘はないのだろう。彼女が善性の者であるのも否定はしない。だが同時に、彼女には同じように繰り返し告げていた言葉がある。善意とは傲慢、すなわち悪行。度を過ぎれば、単なる押し付けに過ぎないのだ、と。
「――さぁ、行きましょう。マスター。貴方に出来ることはまだたくさんあります。それまでは、立ち止まっている暇はありませんよ」
しかし、それ故に。彼女はそれをひた隠しにはしない。
聖女のような微笑みと、菩薩のごとく柔らかな声で、彼女は残酷に俺を導く。選択肢の一つ一つが、善意によって徹底的に踏み躙られていく。
彼女が望む着地点。つまりは俺の妥協点を見出すために。そして俺は、なまじそれが俺のためであると理解できるからこそ、俺が掲げ

る「正義」故に、その言葉に抗うことができずにいる。
俺が諦めるその時まで、彼女は俺を支え続ける。何故なら彼女は、本質的には俺の憧れる正義の味方の同類で、俺よりも遥かに、そんな存在になってしまった者の苦悩を知るが故に。
また、夢を見る。独り善がりな自分とは違う、誰かと共に歩まんとする少年の夢を。

☆☆☆

「えー、では。これより、第一回カル……もとい、冬木対策会議を始めたいと思います……ぐふっ」
衛宮くんを布団に寝かし付けてから数分。この家を訪ねてから時間にして一時間ほど経った現在。流石はサーヴァントと言うべきか、一度は気絶したはずなのに割とすぐさま意識を取り戻したランサーは、バーサーカーとの戦いでも使用していたぼろぼろの旗を杖代わりに居間の机の側に立ち、それぞれ四隅に座っている私達に話しかける。
ただ、先の様子を見ていたからだろう。桜がせめて座ったらどうか、とランサーに提案する。武器（？）を構えたままでは気も休まらないし、こちらとしても気がひける、と。まだロクに事情も把握していないだろうに気の利くいい子である。しかし、ランサーはその提案に対し、
「ああ、なるほど。逆ですよ逆です。この旗、御察しの通り私のそれなりに有名な宝具なんですが、味方を守護する盾、ということで若干の回復能力が備わっているんですよ。とはいえ、この有様ではもはや気休め程度の効果しかありませんが。でも、ここまで徹底して破壊されるとむしろリソースとして使い潰すのを躊躇わずに済みます」
それ以外の回復方法もないわけではないんですが、あれは基本他者に分け与えるものなので、と、淀みなくすらすらと、本当に顔色だけは平常に近い状態にまで取り戻した風に告げる。

……まあ、一種の痩せ我慢だろう。短い付き合いだが、この子の性格は読めている。誰にでも分け隔てなく接しているように見えて、その実割と偏屈で負けず嫌いかつ意地っ張りなガキんちょ。この期に及んで強がっているのも、内心では私や他のマスターを警戒しているからだろう。

（正直、もう少しくらいは気を抜いてもいいと思うけど）

とはいえ、今の彼女にそれを求めるのは酷だ。いずれそのツケを払う時が来るまで、彼女自身が最低限体裁を保っている間くらいは好きにさせておこう。

アーチャーを従える私の役目は、前衛である彼女を後からフォローすること。であれば私は、いつか彼女が私と敵対するその時まで、それを忠実に担うだけだ。

「それなりに有名な旗の宝具、ね。宝具名もフランス語（Franz・sisch）だったみたいだし、何となく貴女の真名も分かった気がするけど、それはいいわ」

僅かに生まれた沈黙を、透き通るような声が覆い尽くす。その声の持ち主は、此度におけるランサーの戦利品……つまりは私の新たなる悩みのタネにして、その筆頭であるバーサーカーのマスター。

「それで、どういうつもりで私を招いたの？　令呪で縛ったとはいえ、バーサーカーは未だに健在。貴女の槍が私を貫くのが早いにしても、令呪の縛りは令呪で容易く打ち消せる。

貴女も、まさかあんな勝ち方を二度三度もできるなんて思ってはいないでしょう？　だったら今のうち、貴女自身なり遠坂の当主なりマキリの末裔なりそこのアーチャーなりに私を処理してもらった方がいいのではなくて？」

つい先ほどまで恐るべき強敵であった彼女は、まるで挑発するかのように告げる。

ともすれば私以上に典型的な魔術師である彼女は、今の状況に本気で戸惑っているようにも見える。無論、演技である可能性は否定できないが、基本的に魔術師は非合理を嫌う。であればランサーの選択が、魔術師である彼女にとって理解できないものであるのはそれほど不思議な話ではない。

しかし、ランサーはそのような露骨な態度にも怯むことはなく、というよりも、そもそも普通にそれどころではないのだろう。よく聞くと割と息を乱しつつ、苦しそうに反論する。
「……逆にお聞きしますが、それはそれほどおかしな話でしょうか」
「は？」
「確かに、貴女をどうにかしてしまえば、貴女という不穏分子も、貴女の従えるその力もまとめてどうにかできるのかもしれません。でも、それが嫌だと思うことが、可能であれば制圧したいと努力することがそんなに不思議でしょうか。あるいは単純に殺す方が後々色々と面倒くさいと考えるのが悪だと断じますか」
「……」
「そんなはずはありません。何故なら」
貴女が私を殺したいように、私は私で動機というものがある。ランサーはそう述べる。幸いにも、結果だけを見れば今回は互いに不幸も起こらなかった。だから自分は貴女を恨む理由はないし、そのつもりもない。
しかし、だからこそ逆に貴女が私にどのような感情を抱いても構わない。何故ならそれは、正当な権利だからだ、と。
はっきり言わせてもらえば、ランサーの発言も単に正しいだけで持論としては滅茶苦茶であり、そもそも互いに意見が対立しているのだから平行線となるのが目に見えている。
であればこそ、彼女を説得するつもりがあるのなら、わざわざ煽るような真似をせず、どうにか妥協点を見出すことが重要なのだが……ランサーにそれを求めるのは、きっと酷なことだろう。
だから私は、口を挟む。うっかりそうしてしまったことは認めよう。言い訳はしない。ただ私は見ていられなかっただけだ。
「はいはい、そこまで。アンタも気に障ったのはわかるけど、話し合いするつもりならもう少し堪えなさい。まだ本題にも入ってないのにそのまま話を終わらせる気？」
「――む。そう……ですね。すみません、少し平静を欠いてました。

あと別に怒ってはいません。ムッと来ただけです」
「それを気に障るって言うのよ。アインツベルンも、あんまり挑発しない」
「……まるで保護者ね、トオサカ」
うっさい。そんなのは私が一番わかってる。でも、本来は彼女を諌める役目の衛宮くんは役に立たないし、アタシがやるしかないでしょうが。
慎二から微妙な視線を向けられたので睨み返すと、何故か隣にいた桜が顔を伏せる。……そっちにも生温かい視線を向けられていたのだろうか。なんてくだらないやり取りをしていると、気を引き締める目的なのだろう。ランサーが旗を消して座布団に正座し居直り――そのままプルプルと子鹿のように震えて蹲り、そこで動かなくなる。
……。
「……無理、しなくてもいいから。あの宝具使って、立ったまま話しなさい」
「――す、すみません。少しの間なら大丈夫かと思って甘く見ていました。で。では失礼して……あとどのくらい保つかな、これ……」
「あのさ、コントをやるのはいいけど、もう夜も遅いんだし早くしてくれない？」
慎二からの空気の読めない発言。が、はっきり言ってみんな似たようなことは思っていたので、この場においては非常に有難い。特に桜なんて経緯が経緯だからか、所在無さげに怯えて縮こまっている。どうせあの惨状の隠蔽のために明日は休校となるだろうしそうでなくてもサボる気満々だが、話が早いに越したことはないのだ。
ランサーもその辺りは自覚しているのだろう。それでもダメージは深刻なのか、ゆっくりと覚束ない足取りで立ち上がってボロボロの旗を取り出すと、それを抱きしめるようにしてふらつく足元を支えながら、ランサーはようやく本題に入る。
「時は２０１５年。我々は地球上において、とある異常を観測しまし

た」
「は？」
「人理継続保障機関フィニス・カルデア――星に魂があると定義し、その魂を複写することでカルデアスと呼ばれる擬似天球を創り出し、１００年後の未来を設定、その様子を特殊なレンズで観測し、表層から文明の光を見守る。それにより人類の歴史を確定させ、その未来を保障するという組織です。質問は後で伺いますので、今はそういう物があるんだと認識してください」
「人理継続……？」
　何を言ってるんだろう、この子は。この子が突拍子も無いことを言い出すのはもはや日常だが、今回のこれは常軌を逸している。
　人理継続保障機関フィニス・カルデア。ランサーはそう告げた。内容からして、明らかに魔術師による組織だろう。以前から彼女は、自分があのバルトアンデルスと関わりのあることを仄めかしていた。であれば確かに、彼女がそんな魔術的組織に所属していてもおかしくない。でも、
「……２０１５年？」
　切り出したのは、意外にも桜からだった。桜もどうやらスパイのようなものとしてこの家に居座っていたからには、私以上に彼女に対して疑問を抱いていたのだろう。衛宮くんが気絶したままなのもあってか、この後に及んでしらばっくれるつもりもないらしい。
「はい。私の記憶との差異がかなり見受けられるので、単純な未来世界ではないみたいですが、この時代から見ると１０年は先の話になりますね」
「……星の写し身を用意して、表層に浮き出る文明の光から人類の繁栄を保障する。画期的ではあるけれど、実現にはクリアするべき課題も多いし、発想からして尋常じゃないわね。手のひらサイズでは維持は容易でも観測や調整が困難でしょうし、それなりの大きさの虚像を半永久的に維持、となるとかなり大規模な組織じゃないと」
「なんでも維持には国を賄えるような電力が必須で、国家予算にも匹敵する資金が必要だったとか。その辺りの世知辛い話には興味あり

ませんでしたが、時計塔や国連まで巻き込んで運営していたので、資金繰りに相当苦労していたのは事実みたいですね」
「大それた組織なのに世知辛いわね……」
泣けてくる。どれほどご立派なお題目を抱えてようと、結局のところ金が無くてはままならないのだ。実のところ、この聖杯戦争一つにしたって、裏では眩暈がするほどの金額が動いている。こんな小さな街で行われる比較的小規模な儀式でもそうなのだ。時計塔や国連を巻き込んだ組織運営など、考えたくもない。
「おいおい遠坂、重要なのはそこじゃないだろ。その、フィニス・カルデアだっけか？　そこの目的とか思想とかに興味はないけど、お前は２０１５年だの、１０年は先だのと言った。英霊は時間軸に捉われない――つまり」
「２０１６年の存続が確定した時点で、私は英霊として座に登録されました。ですので私は２０１６年に誕生した英雄という扱いになります」
「……色々と聞きたいことはあるけど、存続が確定しただけで英霊に……？　いえ、人類の存続を保障する機関が観測した異常――まさか」
何かに気づいた様子を見せたアインツベルンに対し、ランサーはつらつらと語り出す。ある日、カルデアスから文明の光を観測できなくなったこと。それは２０１６年を以って途絶えていること。逆説的に、人類は２０１６年に絶滅することが証明されてしまったことを。
「そんな……人類が、２０１６年で滅びる……？」
桜が目を見開く。こんな話を聞かされたのなら当然だろう。当たり前だが、桜ほどではなくても私だって驚いている。先程まで茶化していた慎二や、アインツベルンさえもが驚愕しているように見える。でも、
「存続が確定したために英霊となった……つまり、その異常には何かしらの原因があって、貴女はそれを排除したから英雄として認められた、という認識でいいの？」
「……鋭いですね。ええ、一つずつ話します。異常を観測したカル

デアは、すぐにその原因を探究しました。言わずもがな、突如として文明の光が途絶えるなんて普通はあり得ません。擬似天球カルデアスは地球のライブラリとしても機能する。未来こそ不確定なために表層しか観測できませんが、星の写し身であるために、既に確定した過去ならば洗い出せる――」

（……）

疑問点は山積みで、アインツベルンの言うように、私も私で色々と聞きたいことはあるが、ランサーが真剣に話していることは伝わってくる。

確かに語る内容は突飛で信じがたいものだ。星の写し身を創り出して観測するなんて聞いたこともないし、よしんばそんなものがあるとしてどうやって１００年先の未来を設定・観測するのかも理解が及ばない。全部が全部説得のための作り話、でっち上げだと言ってくれた方が気が楽で、そうであればと期待している自分もいる。しかし。

「未来に原因がないのなら、過去にこそ原因がある。そう考えて、その結果、カルデアは新たな異変を観測しました。それまでの歴史に無かったはずの観測できない領域――本来の歴史にはあり得ない、人類史の歪み」

（……）

横目でランサーを見遣る。その表情は真剣そのもので――傷が未だに痛むのだろう、常になく険しい顔で、睨むようにこの場の面子を眺めている。

少しだけ待って欲しい。ランサーの告げた、あの時の台詞が脳を過ぎる。話すべき中身が今の会議の内容であるならば、その言葉に偽りがなかったことを安堵すればいいのか、意図せず彼女をそうまで追い込んでしまった事実を嘆けばいいのかわからない。

結局、何を言うでもなく沈黙する私を他所に、ランサーはまだまだこれからだと言わんばかりに、やや語気を強めて続ける。

「観測した座標は西暦２００４年の1月３０日。日本の地方都市、冬木」

「え――」

「カルデアはそこに人類絶滅の原因があると見立て、その場所を特異点と呼称。レイシフトという擬似的な時間跳躍技術を用いて、その原因を取り除こうと考えました」
「……」
　総員、息を飲む。現実味のない話が、急に聞き覚えのある舞台へ放り出されて、一気に現実味を帯びたからだろう。そうでなくても、たとえ話半分でも、ランサーはこの冬木に人類絶滅の原因があると断じている。ただでさえ後ろめたい儀式を街中で繰り広げてる身だ。心穏やかでいられるはずがない。
　そうこうしていると、努めて平静を装うランサーが次のように結論付ける。
「つまり、何が言いたいかと言うと。そんな私にとって、聖杯戦争という儀式はあまりに度し難いものであるということ。日本の一地方都市が特異点足り得る理由なんて、聖杯以外にはあり得ない。私にはそれが、極めて個人的な理由で気に入らないのです」
「……そこは使命とか義務とか格好付けて言っちゃってもいいんじゃない？」
「いや、その反応もどうなんだ遠坂……」
　割と気を使って発言したつもりが、何故か慎二から突っ込まれる。普通に不愉快だから話しかけてこないで欲しい。とはいえ、目的そのものはこれまでの行動に沿う明瞭なもので、そんな事情があるのならランサーが焦る気持ちもわからなくはない。でも、やっぱり内容が理外過ぎて理解はできないが。
「正直、眉唾な話だけど」
　アインツベルンが切り出す。おそらく前置きは保険だろう。少なくとも彼女は、この場にいるどの魔術師よりもランサーの話を理解している。故に、思考停止寸前な私とは違い、きちんと話を受け止めて会話する。
「とりあえず、貴女の動機については理解したわ。納得するかは別として、ね。なら、貴女はどうするつもりなの？」
「無論、この時代が特異点となる可能性があるのなら、私はカルデアの

一員として、何としてもそれを阻止します。……というより、私の知る限り聖杯絡みの案件はほぼイコールで特異点になるので、願いを叶えるなら別の手段を探って欲しいところです」
「ふぅん……ん？」
　ちょっとその組織に興味が湧いてきたわね、と小声で呟き、ふと何かに気づいたように僅かに視線を逸らすアインツベルン。視線の先にあるのは、今もランサーが杖代わりにしているぼろぼろな旗。すなわち、ランサーの宝具。
「あれ？……貴女に聞くのもあれだけど、その宝具って多分アレよね。あの火刑に処されたフランスの」
「……、……。……まぁ、そうですね」
　言葉を濁してるようで全く配慮していない質問に、かなり躊躇してランサーは回答する。事ここにおいてもはや誤魔化しようがないと悟ったのだろう。私としても既に「やはり」という確信より「でしょうね」という納得の方が強い。それでも認めるかどうか迷ったのは、疑念のままで通した場合とで天秤にかけたからか。結局は、この場での信用度の底上げのために晒すことにしたようだけど。
「じゃあ、貴女はアレかしら。実は彼女は本当に魔女で、人知れず墓場から蘇っては祖国に怨念を撒き散らしていました～、とかそういう俗説の？」
「確かにそういうありもしないような逸話を無理矢理解釈したようなこじつけオンパレードのサーヴァントも知ってはいますが、私はそういった無辜の怪物や幻霊とも違うもっと馬鹿馬鹿しい存在なので、真面目に考察すると馬鹿を見ますよ」
「馬鹿馬鹿しい存在……？」
　と、思えば、何やら不穏な気配。自分を指して馬鹿馬鹿しいとは何事だろうか。無数の名前のない正義の味方の具現であるらしいアーチャーもある意味馬鹿馬鹿しいと言えなくもないが、彼女のそれはそういう理由でもないように思える。
　そもそも、彼女の場合は既にその真名に見当がついている。だからこそあの旗を自身の宝具であると認めたわけで、それでも馬鹿馬鹿し

いとはどういうことか。
「というより、その辺の手段については貴女がたにも心当たりがあるのでは？　そこなイリヤさん然り、あるいは士郎さんのように、聖遺物を身体に埋め込んで存在を補強する～、というのは、それほど珍しくもない手法だと思うのですが」
「……え？」
「はい？」
「何ですって？」
　私が密かに困惑していると、更に畳み掛けるような追撃。内容自体は会話と繋がっていて話題として適切でも、あまりにあっさりと驚愕の情報を吐かれて混乱する。そんな私達にランサーは「……んん？」と不思議そうな声を出し、その上で何故か私を糾弾するように告げる。
「……ちょっと遠坂さん。他はともかく、形式上は弟子に取った上に魔術の矯正もしたはずなのに何で知らないんですか」
　そんなもん知るか、と突っ込みたかったが、辛うじて堪えて話を促す。アインツベルンはともかく、衛宮くんについては今後いくらでも調べる機会がある。であれば今はそれよりも、ランサーの正体への情報のが重要だろう。
「まあ、言ってしまえば私はジャンヌ・ダルクのデッドコピー……といったところでしょうか。厳密にはもっと馬鹿馬鹿しい経緯で生まれたわけですが、要はホムンクルスなんかと同じように、今から少し外れた未来において偶発的に誕生するナニカ、とでも思っていただければ幸いです」
「……殆ど意味がわからないんだけど」
「いや勘弁してください。正直、私本人をして私が誕生した経緯とか語りたくないのですけど」
　そこまで言われると逆に気になるのだが。というかそこは適当にジャンヌダルク　の一側面です、だのと詐称すればよかったのでは。相変わらず妙なところで生真面目なガキんちょである。
　互いに何とも言えない気持ちで沈黙していると、ふと、意外な人物

がランサーに語りかける。
「あのさ、いいか？」
「慎二さん？　　はい、どうぞ」
「はっきり言って、僕はお前の来歴だの真名だの、聖杯戦争に対するスタンスなんてのはどうでもいいと思ってる。だけど結局、お前は何がしたいんだよ。お前の行動を聞いてると、僕にはお前は戦争を早く終わらせようとするでもなく、ただ引き延ばそうとしてるだけに見えるんだけど？」
「それは……そう、かも、しれませんね」
　ある意味では彼らしく、空気も読まず結論を求める慎二からの追及に、一度言葉を濁したランサーは、やがて絞り出すように、
「……私はただ、誰にも……」
（……ああ）
　今更ながら、今回の話の根幹が見えてきた気がする。
　結論を言ってしまえば、ランサーはただ誰にも死んでほしくないだけなのだ。だからこの儀式が危険なモノだと、人理を脅かすものだと自分の正体に絡めて開け広げに語り、彼らを戦いから遠ざけようとしている。
　これが単なる殺し合いなら、あるいは試合の類であるならそれは有効だったのかもしれない。しかし、魔術師に〝情に訴えかける〟などという手段は通用しない。彼らはどうしようもなく「ひとでなし」であり、目的のためならこの世界すら巻き添えにするような屑だからだ。
「……魔術師の基本は等価交換」
「え？」
「魔術師に何かを諦めさせたいのなら、それに代わる対価を支払う必要がある。当然、これは戦争なのだから、首元に槍を突き付けて『命』と引き換えにするのもぜんぜんあり。むしろ現状、それが妥当ではある。でも、貴女がそれでも穏便に、あくまで示談というカタチに拘るのなら」
　その流儀に従えと、お前が一方的に不利益を被れと。それだけの対

価を払えと言い放つ。貴女がそうする道理はないと、ともすれば人理を脅かす我々に対し、貴女がそこまでする価値はないのだと、己に言い聞かせるように。

「――スジってもんを見せなさいな。私たち魔術師に、この最低なひとでなしどもにね」

霊基変換・B

「……良かったのかね」

「……」

アーチャーからのその言葉に、私は何も返すことはない。

あれから会議は自然と流れる形となり、もういい加減夜も遅いので、今は互いに監視の意味合いも込めて全員がこの広い家に泊まっている。

ランサーはあの後結局、結論を出すことが出来ずに口数が段々と減っていき、遂には黙り込んでしまった。私達、つまりは我々魔術師としても、自分が後ろ暗いことをやっている自覚があって、しかもそれは人類そのものを脅かす最悪の結果に繋がり、彼女たちカルデアという組織はその尻拭いをしていた、なんて聞かされたら思うところくらいはある。気を遣う、というのも烏滸がましいが、とりあえずその場の雰囲気を察する程度の能力は備わっていたと見るべきだろう。

『……ごめんなさい』

去り際にそう呟いた桜の真意はよくわからなかった。はっきりと口に出した桜に限らずとも、あの場にいた面子は全員が何かを言いたげに解散していった。私だって、許されるのならもっと違う言葉をかけてあげたかった。

でも、そんなことできるわけがないだろう。どう取り繕ったって、聖杯戦争という悪趣味な儀式の主催者はこの地のセカンドオーナーである私で、衛宮くんやランサーはそれに巻き込まれた被害者だ。あの子が悩むのは、苦しんでいるのは私が原因だ。どの口でそんなことが言えるのか。

それでもランサーの発言を妄言だと切り捨てて帰宅することもなく、全員が全員この家に残ったのは、意外にもあのアインツベルンも含め、ある程度ヒトの心が遺されていたから、なのだろう。

それでも私は彼ら彼女らに対し、あるいは私に対しての評価を覆す

つもりは毛頭ないが、少なくともあの面子に関しては、あの子の誠意は全くの無意味というわけではなかったらしい。それだけは、素直に嬉しく思う。
「アンタはどうなのよ、アーチャー」
「む？」
「正義の味方、なんでしょう？　　なら、あの子の言葉に、何か思うところはないの？」
「……」
　しばらくの沈黙を隔て、ようやく切り出した話題は反論に近い話題逸らし。単に自分のことを棚上げして矛先を変更した、とも言えるが、意外にもこれがアーチャーには効果覿面だったようで、彼は渋い顔をして黙り込む。そして、なんとも途切れ途切れに、
「嘘、は言っていないのだろうな……。鵜呑みにするわけにはいかない、と理解してはいるのだが……それでもどういうわけか、私は彼女の言葉に抗い難い誘惑を覚えている。
　否、誘惑よりかは、忌避感に近いかもしれん。彼女の言うように、何かがおかしい――根拠なくそう感じるほどの異常が、この戦争にはあるのだろう」
「異常……」
「私の大元は抑止の守護者（カウンターガーディアン）だ。此度の戦争においては英雄としての側面を以って現界してはいるものの、本来の役目は世界そのものへの掃除屋に等しい。
　彼女が私を知る、というのも、彼女の言葉が決して妄言の類ではなく、真に世界を脅かす事態に対応していたから、なのだろう」
「……さらっととんでもない発言をしやがったわね。今回は見逃すけど、今後何かを思い出したのならその都度洗いざらい吐きなさい」
　善処しよう、などと嘯く彼を殴りたくなる衝動に駆られるが、無意味だと悟って布団に乱暴へ腰を下ろす。
　やはりというか、当然と言えば当然だが、こいつもこいつでこの期に及んでもまるで信用できる気がしない。油断ならない、否、隠すつもりがあるのかと突っ込みたいほどこいつは何かを抱えている。

ぶっちゃけ私は、既にこいつの記憶喪失云々は完全に嘘だと判断している。
まったく、どいつもこいつも曲者ばかりだ。しかし、魔術師による儀式なんてそんなものだと自嘲する。目立った悪事を行なっていない私だって、世間一般には普通に悪人の部類に入る。人のことを言えるほど大層な存在じゃない。
でも、それならそれで構わないはずだ。だって私は魔術師、人間以上で人間以下のひとでなし。ならば、なのに私は下手に善人ぶってる分、よりタチが悪いと言えるだろう。……。
「……めんどい、寝るわ。アーチャー、適当に見張りお願い」
「了解した」
何もかもが億劫になった私は、魔術について考えるのも嫌になり、鍛錬も放棄して布団に倒れこむ。気付けばもう深夜の一時。寝るには良い時間。ただ、普段よりもだいぶ早く寝ることになるが、それでもきっと明日の寝覚めは悪いんだろうな、と根拠もなく確信する私だった。

……

……

……

「……何コレ」
翌朝。
眠気からか、ひたすらに重い頭を揺らしながらどうにか居間までたどり着いた私は、予想通りというべきか、やはり昨日の立ち位置から

ほぼ動かずにゴソゴソと懐を漁っていたランサーに、私は思わずそんな声をかける。
　なお、内容としてはランサー本人に対してではなく、彼女が先程から机に並べている小物について。明らかに懐に収まり切らない量の小物が、さっきからランサーの無駄にヒラヒラした服の中を行き来している。なんだろうか、何かの儀式かと不躾な眼差しで訝しんでいると、流石に私に気づいたらしいランサーが歯切れ悪く話しかけてきた。
「ああ、とりあえず、証拠となり得るものを片っ端から並べていまして……」
「いや、私は別にアンタが未来の英霊だってのを疑うつもりはなかったけど」
　そうなんですか？　と何故か不思議そうにするランサーをあしらいながら、机の上に並べられた小物、というよりおもちゃの内一つを手に取る。くの字に折れ曲がった形をした謎の機械は、パカっと開くとその両面にテレビのような画面が表示されている。これは一体なんなのだろう。持ち運び可能なテレビとかだろうか。何故二画面もあるのかは謎だが。
「あ、それはニンテ○ドー３ＤＳという携帯ゲーム機でして、今年に発売したはずのＤＳの後継機で」
「あ～～、ごめん。ホントに申し訳ないんだけど、いやこれがきっとテレビを小型化したスゴイものなんだろうなぁ、ってのはなんとなくわかるんだけど、アタシこういうハイテクなものに疎くて……」
「では、これとか……」
「こちら葛飾区……あー、これは名前だけなら知ってるような、そうじゃないような。って、１９６巻？」
「ギネス世界記録にも登録された日本のマンガです。残念ながら私の居た時代では人理焼却に巻き込まれて未完となりましたが、この世界でも連載されていたようですので」
「漫画かぁ……これも私、あんまり興味がなかったのよね。この本、奥付を見るに確かに２０１５年に発行ってなってるけど」

まあ、ゲーム機は見るからに時代を先取りしているし、マンガについてもそう簡単に偽造できる代物ではないだろう。いや私は先に言ったようにそもそも彼女の言葉を疑っていたわけでもなかったのだが、というかゲーム機はともかくこの漫画は２００近い巻数があって未完とはどういうことだ。今から１０年以上も連載され続けるのかこの漫画は。しかも完結しないのか。いや不可抗力なんだろうけど。

「これはＣＤかしら。レコードまではいかないけど、妙に大きいわね」

「え？　ＤＶＤプレイヤーは既にこの時代にありますよね？　プレイステーション２の発売からもう数年は……」

「んん？　あー、そういえばそんなビデオテープがあるとか聞いたようなそうでないような。そのプレ……何とかは知らないけど」

「ビデッ……不覚、ちょっと魔術師の現代機器嫌いを舐めていました。というかこの家も未だブラウン管ビデオテープですし、液晶テレビは……２０１０年頃まで普及しなかったんですっけ、そういえば……か、カルチャーショック……!?」

「……？」

何故かショックを受けているランサーを他所にとりあえず漫画を戻し、ざっと机に並べられた嗜好品を眺める。ゲーム機や漫画と言った娯楽品を皮切りに、アンティークショップにでも飾られてそうな人形や物々しいサバイバルナイフ、硬貨紙幣、お菓子類、怪しげな薬、如何にもな子ども向けのステッキと、とりあえずで並べられた割には乱雑としているというか、この子の私物であるようには到底思えないものばかりだ。

「あ。この紙幣、もう新札なのね。半年くらい前に発行されたんだったかしら……って、当たり前か。こっちの硬貨も平成１９年だの２４年だの、これを使ったらめでたく犯罪者の仲間入りね。こっちのお菓子は賞味期限が２０１７年、製造は２０１４年と。よくもまあこんなに色々集めたもんだわ」

「遠坂さんには話しますが、カルデアにおいて英霊召喚システムは人理焼却のドサクサに濫用されていまして、私自身、主戦力の一人では

あっても必須だったわけじゃないんです。というのもカルデアでは人理焼却の黒幕が行った破壊工作の所為でマスターが一人しか存在せず、そもそも組織を運営する人手すら足りない始末。故にこそ、我々カルデアのサーヴァントは他の何よりもマスターのメンタルケアを最優先事項として、特に季節ごとの行事については慰安の意味を込めて人一倍こなしていました」

「……人理焼却？」

「あ」

彼女が常時仮装のような服装をしている理由とかに繋がりそうな割と興味深い話題だったが、それ以上に聞き覚えのないその単語に意識を持って行かれる。

そういえば、彼女は冬木の聖杯戦争が特異点だのとは言っていたが、人類史が途絶えた原因についてはただ「解決した」としか言っておらず、その具体的な原因が何なのかについては語られなかった気がする。つーか思い返せば結構強引にその辺をぼかしていた気がする。

焼却。穏やかでない単語だ。そもそも人理などという概念に対し、「焼いて捨てる」という妙に具体的な表現が入り混じると違和感が酷い。それでもなお、敢えてそのように表現するならば、人理という概念がその黒幕とやらによって文字通り焼き棄てられた、と見るべきだろう。

「あー、えー、その。……黒幕の目的は人類史を燃料にして世界を創世からやり直すことでして。焼却、というのは文字通りに、ちょっと私には理解が及ばなかったのですが、特異点の作成によって前後の繋がりを排斥、強度を脆弱化させた歴史そのものを凝視？して火を放ち、そうして星の熱量を絞り上げたとか何とか言ってましたね……」

「んー、ん……？　あー……ごめん、アタシにも理解できないかも」

「実はこのあたり、後にホームズさんが得意げに解説してくれたのですが」

人理とはすなわち世界の可能性である。第二魔法の概念にあるよ

うに、宇宙は無限に異なる展開を見せる並行世界を許容している。ただ、際限なく並行世界を発生させ続けると宇宙の寿命が尽きてしまうため、一定のタイミングで『外れた世界』を剪定し、そのエネルギー消費を抑えるとされている。
「これを霊子記録固定帯（クオンタム・タイムロック）……人理定礎と呼び、黒幕はその時代に特異点を築きました。人類史におけるターニングポイント――すなわち歴史が固定化される場面において楔を打ち込み、意図として『剪定される世界』を擁立し、人類史そのものを不安定にしようとしたわけです」
「くおんたむ……？　人理定礎なら触り程度は知ってるけど……」
「科学的表現なだけで、意味は同じですので気にしないでください」
「つまり」と一度区切り、昨日のアレは何だったのかと問いたいほど饒舌に続ける。というか彼女、隠したい事が多過ぎるだけで昨日もやたら口数が多かったし、実は相当の話好きなのかもしれない。
　てか、この話もけっこう重要というか、まあ私達には無関係であるのはわかるのだが、それでもこうして世間話の如く語られるような話題じゃないだろうに。
（あと、魔術師でもないのに妙にそっち方面の知識が豊富ね。彷徨海出身なら当然なんでしょうけど）
　とはいえ、昨日の話でもそのことついては語らなかったし、彷徨海について隠すつもりは無くてもあまり吹聴したいことでもないのだろう。それとホームズって誰だ。まさかあのシャーロック・ホームズのことだろうか？　　んなわけはないとは思うが、相変わらず話すたびに謎が増えるガキんちょである。
「例えばこの国は第二次世界大戦における敗戦国ですが、後からその事実を戦勝国として塗り替えられると、以降の歴史に価値がなくなります。何故ならそれは日本の敗北という結果を前提に積み重ねられていたはずの歴史が、まるまる別のモノに挿げ替わってしまうからですね。これ自体を指す言葉は特にないようでしたが、これが歴史の虚弱化、脆弱化に繋がります」
「土台にヒビさえ入れれば、全体の崩壊までは容易い……道理ではあ

るわね」
「そうしてゆらぎを生じた可能性を後押しし、そのエネルギーを絞り上げる。人理焼却式、と本人は自称していましたが、それがどういった類のモノなのかは私にはわかりません。でも……」
（……ん？）
　意味深に言葉を濁し、僅かに口を動かして、されど言葉には成立させず何かを飲み込む。何かあるのか、という疑念はあれど、その理由を察することはできない。きっとそれは、彼女の個人的な事情であるからだ。
「いえ、なんでもありません。とにかく、黒幕はただの愉快犯ではなく、確かな確証と、ある種の異様な覚悟を持ってその偉業に取り組んでいた、とだけ」
「……ねえ、ちょっと思ったんだけど、その黒幕とやらがこの世界でも何か企んでいる可能性はないの？」
「断言します、それはあり得ません。もし、もしも、もしかして仮にそうだとしてもこの冬木が特異点にならなければ問題は……というか昨日マキリ云々とイリヤさんが言っていたので思い出しましたが、どうも１８８８年担当だったはずのマキリがまだこの時代に存続しているようですのでおそらくは大丈夫かと」
「は……？」
「いやぁ実は私、慎二さんを初めて見たときからずっと警戒していたんですよね。最初は単なる偶然だろうな、と思っていたんですが、それでもあまりに面影があったものですから。実際のところ、ライダーさんの奇襲を完璧に凌げたのはそういった事情があったわけでして」
「ち、ちょっと待って。流れからして、その１８８８年はそのくぉんたむ……人理定礎という認識でいいのよね？」
　はい。と軽く答えるランサーだが、いや実際に「解決した」のだから彼女にとっては既に終わったこと、つまり大したことではないのかもしれないが、こればっかりは見過ごせない。１８８８年と言えば産業革命か。確かにそれなら人類史としてのターニングポイントにはなるのだろうが、そんなことよりも、

「担当ってどういうこと？　　ちょっと訳が分からないんだけど」
「あ、なるほど……申し訳ありません。それを話すと、次に誰がそれをやったのかまで話さなくてはいけなくなるので、黙秘させていただきます。黒幕を擁護するつもりはありませんが、せめてあの人の名誉のためにも」
（……）
　急に顔を曇らせたランサーに、その先の言葉を紡げず黙り込む。
　もしやとは思うが、知り合い……なのだろうか。もしかしなくても、その黒幕と。わざわざ「あの人」などと分けて表現した理由はわからないが、問い質すのも野暮な気がする。それ以前に、とてもじゃないが聞ける雰囲気ではない。
「ともあれ、今後の予定についてですが」
　かなり強引に。というか何がともあれなのか意味不明な接続詞から、割と重要な話題を切り込むランサー。突貫は槍兵の華だが、こんなところまで猪突猛進である必要は皆無だと私は思う。いや話題そのものは昨日から紆余曲折どころか右往左往しているのだが。
「ひとまず現状において、可及的速やかに対処しなくてはならない障害はない、　そう考えてもいいでしょう。無論、まだ姿を見せないアサシンやあのセイバーさんのことも気掛かりではあるのですが、いずれにしろ、私は一度キャスターさんを訪ねたいと思います」
「キャスター？」
「……遠坂さんの仰る通りです。そもそもからして、あの人たちが私の説得で動くような人ならば、こんな戦争に参加するわけがない――となると論理的に、私はその前提から見直さなくてはなりません」
　魔術師の思考を。魔術師の野望を。魔術師の理念を。彼らがひとでなしであるのなら、私はそれを理解する必要はない。しかし、彼らは外道であっても狂人ではない。であればこそ、その思考には確かなロジックが存在する。ランサーは告げる。
「ゴールは当然『願いを叶える』こと。聖杯やサーヴァントはそのための手段に過ぎません。だからこそ昨日の遠坂さんの前提を覆す発言に対して、彼らが言葉を返すことはなかった……」

「……」
いや、確かに私のあの発言は「じゃあ貴女が聖杯の代わりに願いを叶えれば？（意訳）」というひどい無茶振りだったけど、それに彼らが反応しなかったのはあれ以降貴女が尋常じゃない雰囲気を醸し出していたからで、魔術師としてのロジカルがどうのよりもむしろその真逆、人情的な観点だと思うのだが。無駄に推論を重ねて空回りしてるあたりこの子も何というか相変わらずである。
「であれば、ここが特異点足り得る要因は、『願いがおかしい』か『聖杯がおかしい』の2択。私はこのうち後者が怪しいと睨んでいます」
「……なんで？　私が言うのもあれだけど、『「」に至りたい』を正しく実現した場合、下手したら世界が巻き添えになるかも、なんて考えたことはあるわよ？」
「『あまりに不条理な願いが叶えば漏れ無くその世界は剪定（カット）されるからナイナイ、あったとしても我々に基本観測することはできないので無問題、無問題！　てかそんな那由他の可能性までいちいち無理やり刮ぎ落としてちゃ何も出来なくなるし！』とアトラス院の人が言ってました。私も同意見です。それ以前に、そんな願いが叶うなら先に世界から何らかの干渉があるはずです。あまり抑止力（カウンターガーディアン）を舐めない方がいいです」
「へぇ……」
確かにその通りかもしれない。でも随分と投げ遣りな持論だなと突っ込みたい。しかし流石はアトラス院。内実を暴けば世界が数回滅びるなんて噂が流れてるだけはある。つーかアトラス院の知り合いまでいるのかこのガキンちょは。前は時計塔とも連携しているとか言ってたし、カルデアという組織がどんなものなのか謎が深まるばかりである。
「まあ、いずれにしろまず懸念すべきは聖杯です。というのも、特異点修復においてその起点となる聖杯の探索を主としていた我がカルデアですが、中には不良品といいますか、主にＢＢさんの所為ではありましたが、いわゆる『猿の手』に近いものがいくつかありまして」
「猿の手？　ああ、願いが望まない方向に叶うって？」

「大方が単なる魔力リソースで、そこまで意地の悪いものは数えるほどしかありませんでしたが、ないわけではないのです。むしろ願望器云々は後年の創作による後付けで、本物の聖杯ならそんなよく分からない機能はないはずなので、『黄金の杯（アウレア・ボークラ）』のように、逆に原型からかけ離れていた方が願望器としての信頼度は高いですね」

「……まあ、そうね」

身も蓋も無い考え方だが、一理ある。ＢＢだかアウレア何とかはとにかくとして、確かに最後の晩餐に使用された杯、本物の聖杯ならば魔術師の身勝手な欲望などは叶えてくれないかもしれない。

（……そういえば、これまでの聖杯戦争でどんな願いが叶えられたのか、聞いたことがないわね）

自己完結するような望みだったのか、あるいは聖杯が不良品だったのか。少なくとも現状、確かに聖杯はこの街に存在し、その上で冬木は滞りなく存続して、いや、

（１０年前の大災害は、聖杯戦争のその結果……？）

どんな経緯で大災害が起きたのか、結果だけを言伝でしか聞いていない私は、その詳しい事情を知らない。とはいえ、そんなのは怠慢で、私は本来それをなんとしても把握するべきだったのだ。実際、こうして推論を語られるだけで、私は困り果ててしまっている。ただ「聖杯って本当に願いが叶うの？」というごく当たり前の質問をされているにもかかわらず、だ。

（下手したら目の敵にされて詰んでるわね、これ）

彼女は単に疑問を呈しただけだ。しかし、同様の疑問にもし難癖を付けられた場合、私は完璧に対応できる自信がない。私は景品を用意する側、主催者の一人であるのに。

（そもそも、私は聖杯の炉心が、この街のどこにあるのかすら――）

「百聞は一見に如かず、とこの国では言いますし、ついでに柳洞寺の地下にある大聖杯の様子も確認しましょうか」

「……は？」

「？？　どうしました？」

「いや……」

不思議そうにするランサーを、得体の知れないものを見るような目で眺める。幸い、彼女には気取られなかったらしく、無邪気に首を傾げている。が、私の心は穏やかではいられなかった。
（……なんだこいつ）
よく分からないサーヴァントであるとは常々思っていたが、些か看過できないほどにこちらの事情に詳し過ぎやしないだろうか。
でも、考えてみればそれは当然だ。何故なら彼女は未来の英雄。しかも広義的な解釈をするなら活躍の場はこの冬木でもあるわけで、特異点云々は未だよく分かってはいないけど、そりゃあ人類絶滅の原因になった場所についての調べはついているか。
戦慄する私とは対照的に、夜を隔てたことである程度吹っ切れたのか、あるいは単に空元気なのか、彼女は少なくとも傍目には明るい表情で告げる。
「あとはマスターですね……これは引き摺ってでも連れて行きますよ。いっそソリに乗せて布団ごと持って行きます。それが彼の意思ですので。遠坂さんに他のマスターさん達については、とりあえず誘いはかけますが、聖杯に直接殴り込みをかけるのは客観的に見て卑怯な手段ですので件の監督役さんからの妨害が予想されるといいますか、」
「……アタシも行くわ。アンタを一人にしたら、何があるか分からないし」
ここでロクな葛藤なく首を突っ込もうとしているあたり、アタシもつくづく魔術師としてなっていないと常々思う。とはいえ、懸念があるのにさも当然とばかりに突っ走ろうとしてるこの子も無謀というか、大概……いや、既に完成してこの性分では、この子の方が重症かもしれないのだが。

☆☆☆

「……またぞろ随分と大人数ね」
ランサーからの誘いがあり、何だかんだと色々な思惑とともに、結局はあの場にいた全員引き連れて訪れることとなった柳洞寺。それを迎えたフードを目深に被った妙齢の女性は、開口一番にそう呟く。
あちらもまたぞろ随分と礼儀がなっていない発言ではあるが、それは仕方ない。何せこちらにはランサーの他に三組ものサーヴァント主従がいるのだ。
私にとっては彼女自身、見覚えのない女性であるが、ランサーの言葉が正しいのであれば彼女こそキャスターのサーヴァント。何というかあからさまに如何にもな格好をしていて逆に一般人なんじゃないか、と思わせる容貌は、しかし彼女が身に纏うバーサーカーと比較してなお膨大な魔力によって印象を狂わせる。だが、それでもサーヴァント四騎もの対面となれば警戒は必至だろう。
「というか貴女、色々とギリギリじゃない。その腕とか、中身スカスカなんじゃない？　　なら、ここには治療の依頼にでも来たのかしら。確かにこちらには極力干渉しないようにと言ったけど、それくらいなら仮にも同盟相手なのだから相応の報酬があれば引き受けても構わないわよ」
「あー……と、非常に魅力的な提案なんですけど、今回の話はもっと重要といいますか、下手をするとこの戦争の根幹に関わる話でして」
そんな前置きから、ランサーは朝も私達を相手に語った聖杯への疑念についてを話し始める。その内容は要するに聖杯がどういうものかに対する疑問でもあるのだが、遠坂やマキリの末裔とは違って私は聖杯の仕組みを知っているので、はっきり言えば実はランサーの疑念は的外れな懸念であったりする。
とはいえ、私がそれをランサーに教える義理はないのだが。
「……ふぅん。少し穿った見方ではあるけれど、妥当ではあるわね。隠すつもりもないから言うけど、私としても願いの成就は急務で、その対策を保険として用意してる。と言っても、貴女に咎められた方法を徹底して無害化させただけだから、やり方を変えたわけじゃないし、聖杯と比べて月単位の時間を要するけど」

「聖杯が単に魔力リソースであるならそれでいいんですが、やっぱり不安でして」
「それで、ここの地下にあるって言う炉心を確認に？　　この私が言われるまで気付かないくらいには高度な隠蔽だったけど、こうもあっさり看破してるあたりやっぱり戦士のサーヴァントは侮れないわね。流石、一度とはいえあのヘラクレスを倒しただけあるわ」
「……見てました？」
　むしろ何で監視してないと思ったのか、とキャスターに返されて、ランサーは意外にもそれまで監視されていることを意識していなかったのか、困ったように天井を仰ぐ。
　あまりに露骨に迂闊な態度に正直に言ってかなり驚いたが、そういえば彼女、昨日の罠にもほぼ無反応だったし、見た目詐欺の小賢しい少女に見えてその実はヘラクレスと同様の脳筋なのかもしれない。そもジャンヌ・ダルクは逸話からして頭の出来は良くないので、むしろ今までが出来すぎだったのかもしれない。答えは出ない。
　ランサーの反応を見て、キャスターはフードから覗かせる瞳でじっとランサーを見つめると、１０秒もしないうちに、
「貴女、今も見られてるわね……蟲？　　使い魔かしら。そっちの子が身体に仕込んでいるのと似ているけど、無関係ではないんでしょうね、流石に」
「……え？」
「ああ、そんな気はしていましたが、やっぱりそういう魔術なんですね。ですがまあ、考えてみれば監視されて困ることは何もないですし……特に私、サーヴァントですのでお風呂にもトイレにも無縁でしたし。いえ、だから良い、というわけではありませんが」
　便利そうで何よりです。と、呑気にもどこかズレた発言をするランサーだが、言われた側、つまりマキリの末裔の反応はそれとは実に対照的であり、矛先が向いているかも怪しい現状で、まるで糾弾されたかのように怯えている。
　無理もない、そう思う。マキリの少女が何の目的で彼女に監視を付けていたのかはつい昨日初めて家を訪ねた私にはさっぱりだが、監視

という時点でまずロクな理由じゃないのは想像に難くない。しかもそれがよりにもよってあんな呑気なランサーに見透かされていたとなれば尚更だろう。
（でも、流石は腐ってもサーヴァントといったところかしら。バーサーカーに対してそういった面での愕きを感じたことはないけれど……）
　それでも理論上は核さえ防ぐアインツベルンの結界を障子のように軽々と引き裂いたりと、彼らサーヴァントが規格外であることは重々承知している。そも、伝説を紐解いてもヘラクレスは暴力的な手段を好むだけで別に頭が悪いわけでもない。むしろ賢い。そして彼女は、そのヘラクレスと同等の存在である。
　であればこそ、私の見積もりは単なる甘え。たかが中世後期の英雄のデッドコピーと侮るなかれ、彼女は一度、真正面から当たり前のようにあのヘラクレスを殺しているのだ。たとえ奇抜な格好をしてマスターを布団ごとソリに乗せて引き摺るような滑稽な存在でも、それでも彼女は聖杯に選ばれたサーヴァントなのだから。
「で、どうするの？　貴女がどうしてもと言うのなら、監視の主を豚にするくらいはしてあげなくもないけど」
（……は？）
　と、サーヴァントの脅威を改めて私が再確認していると、微妙な反応をしているランサーの代わりにキャスターがこのように切り出す。
　さらっと言ってるが、これもまたとんでもない発言だ。数秒で監視に気づいたどころかそれが遠見か使い魔によるものかすら看破したのといい、何をどうすればそのような非常識な真似ができるのか何一つさっぱりと理解できない。
　何だろうか。呪いでもかけるのか。豚になるって具体的にはどういうことか。それは頼まれただけで出来るような容易いことなのか。
その申し出にランサーは、
「むー。……多分、放っておいても良いかと。桜さんや慎二さんのものなら今更ですし、この際、誰のものかはともかくとして、今になっても監視だけで済ますような人なら最後まで静観するはずです。

きっと」
「……根拠は？」
「実は私、軍略をD―ランクで保有してます。一対多の状況下において思考が冴え渡るというものです。あとワイバーンとかを使役できます」
「……そう」
（なんで軍略……？）
――微妙。問いかけたトオサカも含め、立場も存在としての規模も違うこの場にいる全員が、その言葉に対して抱いた感想である。

……

……

……

――それは、星を祭る祭壇であった。
天と地を繋げるが如く燃える炎。揺らめく炎身は無明である空洞を照らし、堅く覆いかぶさる天蓋を焦がしている。
しかし、その表現は適切であるとは言えない。宙を繋ぐといっても天は地の底。無明を照らす松明は赤ではなく黒色。空気は濁り、風は死に絶え、壁を伝う雫は悉くが毒の色。
龍が棲むとされる地の国では、その実、巨大な龍の胃袋を模していた。すなわち、この場を訪ねるものはみな人に非ず。
ならば、このような地に救いを求め、このような異界を祭ろうとするモノも、陽の光から逃れる蛇蝎磨羯の類に違いない――
「これは不良品ね。詳しく調べるまでもないわ。呪詛の類で、器が完全に汚染されてる」

「……いえ、ですがこれくらいなら何とかなりませんか？　おそらくですが、これは毒が混入しただけで、元からそういうモノというわけではなさそうです」
「そうね――現代の魔術師なら、１０年もあれば何とか、と言ったところかしら。やり方については、貴女の言葉を借りるなら、その〝毒〟を丁寧に除去して、あとは地道に器を削っていくしかないわねぇ」
　これこそが、冬木が誇る大聖杯。私も話だけしか聞いたことがない、されどその格は明らかな、我ら御三家が誇る最高傑作――――――……って、
「……不良品？」
「ああ、貴女たちが悪いというわけじゃなさそうよ？　一通り解析した限りじゃあ、どうも脱落した英霊を贄に魔力を貯める装置ってだけみたいね。ただ、この儀式の形態だと――」
「……。……まあ控えめに言って恨み辛みが積み重なりそうですね。そのままこの街を利用した蠱毒ですし。私やヘラクレスさん、それにメドゥーサさんのように、アヴェンジャーの適性を持つ英霊が多数混ざればあんな感じになるのではないでしょうか」
「な――」
　キャスター、ランサーともに当然のように貶されて言葉を失う。直前までこの空間の雰囲気に呑まれかけていた私に謝ってほしい。いや確かになんか風景が妙に毒々しいなぁなんて思ったけど！　まさか本当に毒に侵されているだなんて思うわけ無いじゃない！
「アヴェンジャー……とは、何のことでしょうか」
　不意に問いかけたのは、意外や意外。あるいは必然的に、わざわざ霊体化を解いてまで現れたライダー、すなわち先程の話題にも引き合いに出されたメドゥーサ。
　言われてみれば、流しかけていたが、アヴェンジャーとは一体なんなのだろう。話を聞くにどうやらサーヴァントのクラスか特性の一つだと思われるが、さて。
「それは……ええと、そうですね。どうも冬木の聖杯はクラスの基準と言いますか、サーヴァントのステータスやマスター側の介入、あ

るいは単にクラスの空き、そもそも召喚される英霊が聖杯伝説が伝わっている地域限定だったりなんかで結構そのあたりの縛りがキツいみたいですが、本来なら英霊とは剣士なり槍兵なり魔術師なりの一言で括られるような存在ではありません」

そんな台詞を皮切りに、ランサーは困ったように話し始める。彼女も彼女で、自身を英雄のデッドコピーと評するからには、必然、英霊についても詳しいのだろう。淀みなく、惜しげも無く、彼女はそれまでに見聞きしてきた情報を語る。

「例えばそれこそ私、つまりはジャンヌ・ダルクについてですが、私はたまたま槍の扱いが聖杯の基準値に到達していたためにランサーのクラスに当てはめられました。しかし本来、英雄としての彼女はどのクラスが相応しいのでしょうか」

ジャンヌ・ダルクが剣に優れていたという逸話はない。槍や弓の扱いが上手かったという話も私は知らない。馬や戦車に乗っていたという話も聞いたことがない。まして暗殺者であるはずはない。そして彼女は合理的な戦法を好み、キャスターで呼ばれることは絶対にあり得ないだろう。

「私は実際には三騎士やバーサーカーも行けますが、伝承を元に判断するなら基本の七騎のうちジャンヌ・ダルクに該当するクラスはない。主にそんな人を対象に、あるいはクラスさえ左右するほど逸話が強烈な人たちのためのエクストラクラス、その一つが復讐者のサーヴァント、アヴェンジャーです」

「復讐者……ですか」

納得したのかしていないのか、彼女の逸話からして心当たりはありそうだが、とにかく事を荒立てることもなく大人しく引き下がるライダー。しかし、復讐者のサーヴァントとは。サーヴァントは英雄の一側面を写し取る者。ヘラクレスにもそういった逸話は存在するが、それが顕著になるとそんなサーヴァントになるのだろうか。

「私の炎もそうです。我が炎はフランスという国への怨念に満ちています。この聖杯の仕組みについてはつい先程聞いたばかりですが、そんなサーヴァントを燃料にして聖杯に何の影響も出ないとか、それは

ちょっと人間を舐めすぎです」
「……」
「人間ができることに不可能はない――あなた方の目指す魔法使いもそうですし、私が語った人理崩壊の案件も、元を辿れば人の手によるものだった。また少し外れた未来において、殺生院キアラという女性は、ただ一人で人類悪まで成り下がった。この聖杯もそうです。これはヒトの業。ヒトが生み出したもの。魔術師はヒトではないなどと、そんなのは言い訳でしかない――ですので」
立ち止まっていた私達より一歩前に踊り出たランサーが、そのまま進行方向を同じとしていた面々よりも三馬身ほど離れた場所まで進み、先程から引き摺っていたシロウが乗ったソリが我々よりも前方に出た事を確認すると、ソリを消してシロウを担ぎ、踵を返して此方を向き直る。
「我が真名はジャンヌ・ダルク……オルタサンタリリィ。人理の英雄。人理とは星の観測者たる人類の歴史、即ちこの星の碑文に相当する。そして私は、その人理を護るモノ、カルデアの一員です。私の立場は末端ですが、その使命は揺るがない。あんなモノを発見してしまったからには、人類史を守る、そんな当たり前の理念のもと、私はここでアレと戦います。取り返しの付かなくなる前に」
文句があるならかかって来い、と無言で圧力をかけながら、いつのまにか槍を構えたていたランサーは、何をするでもなく徐々に徐々にとじりじり後退していく。
何故、と思う前に気づく。このランサー、構えこそ相変わらず堂に入ったがっしりとしものだが、どこか頼りないというか、はっきり言って昨日のバーサーカーとのそれに比べれば明らかに圧力が足りていない。気迫ならまず間違いなく昨日と同等かそれ以上、ヘラクレスに匹敵する最高峰のものであるのに、だ。
「……」
これはアレだ。おそらくではあるが、彼女の昨日の、いや先程の会話から察するに、ランサーは割と重体のままで、啖呵を切ったはいいが実際に仕掛けられると困るとかそういうやつだろうか。吹けば飛

ぶような、というのは流石に言い過ぎだが、確かに今なら当たればデコピン一発で倒せそうではある。だからこその逃げ腰なのだろうが。
（……）
彼女をここで倒すことは容易だろう。ただでさえぼろぼろな身体で、更に気絶したままのマスターというお荷物まで背負っているのだ。利害が一致しそうな魔術師もいる。まず負ける要素がない。
聖杯の完成はアインツベルンの悲願だ。それがたとえ人理に影響を及ぼすにしても、今を生きる我々にそれを咎められる所以はない。されど私が動けないでいるのは、つい先程の会話があってこそ。
（サーヴァント、アヴェンジャー……）
聞き覚えのないはずだ。如何にヘラクレスに復讐者としての資格があるからと言って、バーサーカーとして現界した以上はそれも無縁のはず。なのにどうして私は、それがこんなにも気になるのだろう。
ランサーの操る炎は知っている。黒く、暗く、闇に染まった炎。この世の怨讐に満ちた、全てを塗り潰す輝きを生まない何か。
無辜の怪物、という概念がある。如何に聖女として祀られようと、それは後の世の話であり、当の本人は罪人として処刑された。であれば最後には祖国を恨んでいたはずだ、という後世の者の勝手な妄想、乃至は思い込み。彼女の炎も、きっとそういう類の妄想から派生したものだろうことは想像に難くない。
彼女の後方、今も僅かに視界に映る大聖杯に視線を向ける。この物体に込められた技術も含めて、とてもこの世のものであるとは思えない。もしもこの器が完全に見せかけで、アレが単なる美術品だったとしても、それでも奪い合いが起きて不思議はないオーパーツ。
アレも元々、誰かの願いを叶えるために生み出されたらしい。だがしかし、今の私にはそれが信じられない。ならばアレがああまで歪みきったのは、この儀式の形態を良しとした者、つまりヒトとしての業に他ならない。
（……）
誤魔化さず、はっきりと言えば、私は恐れているのだろう。私が勝つにせよその逆にせよ、ランサーかバーサーカーか、あるいは罷り間

違ってライダーがこの場で脱落して、その魂が聖杯に注がれるのを、彼女の言葉が現実であると証明されるのを怖れている。聖杯という私の存在意義そのものが、私やアインツベルンの本懐とは無関係な理由で、誰かへの怨讐に染まることを恐れている。

否、認められない、と言うべきか。見ればわかる。あの聖杯は既に手遅れだ。つまり私達は、そんな根本的な問題にさえ気付かず、ありもしない景品を求めて、ただ漫然と殺し合いをしていた――その事実が、その醜さが、ある種の貴族的意識を持つ魔術師には耐え難いことであるが故に。

こうしている間にも、ランサーはじりじりとこちらから距離を離し続けている。が、それを止めようとする者はいない。躊躇いか、利益か、それとも別の思惑か。遠坂とキャスターは何か言いたげではあったが、結局は静観を選んだようで、とりあえずは手を出すつもりは無いようだ。

そう。ここにいる全員も、口には出さないだけで内心では彼女に同意を示している。だから大っぴらには賛同せずとも、彼女の行動を妨げるつもりはない。それでもキャスターならばどうにかできそうだが、キャスターにしても願いの目処は立っているようで、この場でランサーを敵に回してまで取り扱いの難しい危険物を抱き込むつもりはないらしい。

ただ、そうなると問題となるのはその壊し方だ。乱雑に器を破壊すれば、周囲に中身が零れ落ちるは道理。否、彼女は止めると言っただけで、壊すとも言っていない。しかし、その方法はわからない。キャスターは、時間を掛ければ現代の魔術師にも安全に解体は可能だと言ってはいたが、ならば魔術師ではない彼女は、一体どのようにして

――

「……？」

くるん、と不意にそれまでこちらを警戒していた彼女が振り返り、我々の視線の先にある大聖杯を見据える。

まだまだかなり……具体的には５００ｍほど距離があるようにも見えるが、あの場所で立ち止まったということは、つまり射程範囲内

まで辿り着いたということだろうか。何をするつもりかはさっぱりだが、それでも事ここに至っても未だ私は彼女に手を出す気にはなれない。どうやら私は、つい前日に敗北を喫したのが想像以上に精神的に響いているらしい。

もし、それも見越しての無謀とも思える拙速行動なのだとしたら、あるいは彼女は、まさしく天才と呼ぶに相応しい人種なのかもしれない。

ランサーが背中に担いだままだった士郎を割と乱雑に背後へ降ろし、それでも気絶から醒める様子もない彼に、首だけを向けたランサーは微笑んで小さく何かを呟き、再び大聖杯を見据えてから、今度はこちらにも聞こえる声で、

「――主よ。この……ッ」

瞬間。

ランサーの言葉を遮るようなタイミングで真正面から飛来した何かを、ランサーは武装を現界させることさえなくその身体一つで受け止める。

見れば、飛来してきたものは儀礼剣のようで、それを身体で受けたとなると普通はどう考えても致命傷だが、彼女にはそんな心配も無縁らしく、投擲された儀礼剣は彼女の身体に刺さることもなく弾き落とされ、されど無傷なはずの彼女は、先程まではどうにか取り繕っていた体裁もかくや、息を荒げて一点を睨みつける。

「っ、ぅ……これは、黒鍵？　誰です！」

「誰だ、とはとんだご挨拶だ。これでも私は、おそらくはこの場にいる誰よりも、この戦争を円滑に進めようと努力しているのだが」

「っ……。……、せいやっ！」

ランサーの視線の先、つまりは大聖杯の方向から現れた大柄な男は、その身を包む神父服に相応しいゆったりとした佇まいで姿を見せる。が、反射的に反応したランサーがどこからともなくまたも取り出したソリを投げ付けられ、再びその全身を覆い隠され――って、ええ!?

「ちょ、何してるの!?　あの人なんかすごい訳知り顔だったけど!?」

「この際あの人が何者はとにかく、この場であの厄塗れな大聖杯側に立ってる時点でアウトアウトアウトです。そもそも先に攻撃されたのは私です。これでも私は魔力放出が使えるのであの程度どうとでもなりますが、マスターに危害が及んだらどうするつもりですか論理的に」

気絶したままのマスターをここまで連れて来た貴女が言うのか、とは思ったものの、ぶっちゃけ確かにこの局面で大聖杯の側にいたとなると普通に不穏分子ではあるので具体的な反論は返せず、そんな私を余所に彼女は気を取り直して言葉を紡ぐ。

「ですが、ここで立ち塞がるならば容赦はしません。我がなけなしの魔力にこの旗、そして溢れ出す鬱憤を触媒に、この身に許されし最強最大の一撃を以て悉くを呑み込みましょう」

――……主よ。

彼女が紡ぐそれは、その語り出しは、あまりにも有名な台詞。

かつて、彼女のコピー元であるとされるフランスの救世主、かの聖女が火刑に処されるその寸前に呟き、天使の祝福と共にその身を昇華したとされる、オルレアンの乙女としての――

「――主よ。このバカンスを捧げます――宝具解放。『豊穣たる大海よ、歓喜と共に』！」

直後、彼女を中心にごうごうとうねりを伴って溢れ出る水が、洞窟内部の悉くを塗り替える。

「……は？」

思考が停止する。疑問符でさえない間の抜けた声は、どこからともなく鳴り響く波の音によって打ち消される。

どこまでも広がる水平線が、夕暮れに照らされる水面が、波風に揺

れる太陽の心地良さが、現実のものであると認識ができない。
世界が切り替わる感覚と、薄暗い洞窟がまるまる変貌する奇怪な現象。この感覚に覚えはないが、知識としては知っている。世界を騙す魔法に限りなく近い大魔術。人外の存在が操るとされる異界法則。その名も、
「固有結界……？」
あまりに彼女の逸話とかけ離れた光景と、費やされた技術の非常識さ。そして何よりこの光景を宝具として扱うランサーに驚きを禁じ得ない。
正直、これまで私は彼女の話を話半分に、いや、はっきり言ってその大半が虚偽であろうと思っていた。特に真名にかかる部分は露骨に隠していたため、確かにジャンヌ・ダルクとしての要素はあれど、よほど捻じ曲がった存在であろうことは察していた。だが違った。そんな想定は甘すぎた。
一体、この光景のどこがジャンヌ・ダルクであるのか。仮にそうだとして、一体どれだけの改造を加えられたらこんなモノを宝具にするジャンヌ・ダルクなんてキワモノが生まれるのか。
神秘が淘汰される現代、あるいはその先の未来において英雄になるには、どのような軌跡を隔てたらいいのか。
出鱈目だ。非常識だ。摩訶不思議だ。理解不能だ。――しかし、それくらい外れた存在でなくてはヘラクレスに並び立つなど不可能だ。
「……」
我々は、聖杯は、魔術師は、何を生み出して、何を成し遂げて、どれほど世界を狂わせていくのか。あまりに常識からかけ離れた彼女を見て、だんだんとヒトの業の恐ろしさ、その底知れなさが、あの聖杯と同様に、理外の怪物のように感じられる私だった。

☆☆☆

前へ。最初の一歩を、踏み出す。
ただそれだけの動作で、全身が激しく軋みを上げる。酷使しほぼ完全に凍り付いた肉体を無理矢理に前方へと引っ張った影響か、高山への登頂直後のような途方もない疲労感が身体を苛む。脚は棒も同然に固くなり、気を抜くと一瞬でバランスを崩して転倒してしまいそうだ。
それは不味いと、歯を強烈に食い縛って堪える。意地でも体制は維持する。倒れることはできない。次に倒れたら、恐らく今度こそは立ち上がれないだろうから。
「ふ、っ……」
水面を切り、二歩、三歩。抱く違和感。すぐに察する。元よりこの宝具は私のものではない。故にそもそもの構成が甘い。むしろハリボテに近いのだろう。付随されるはずの味方はおらず、染めることが叶うのも外観だけ。周囲を自身(夢)に浸すことで誤魔化したダメージも、そう遠くないうちにツケが回る。被りを振る余裕はなく、でも、と口遊みまた一つ前に。四歩。
(何故――などと今更問いません。どうして、とも言いません。彼がここにいる理由も、その意味も、素性さえも価値はない。でも)
彼の目的がなんであれ、彼はこれを守ろうとしている。それは確実に、彼が私と敵対するということ。であれば私は、踏み砕くのみ。
(ッ――……!)
五歩。霊基が軋みを上げる。
先程から頭痛が収まらない。僅かに身動きする度に酷い痛みが生じ、脳細胞を貫く。ガンガンと頭蓋の内側を鎚で叩かれているかの如き壮絶な感覚に、今すぐにでも全てを投げ出して意識を放り捨てたくなる衝動に駆られる。その抑えがたい欲求は、頭痛の規模と比例して絶えず膨らみ続け、精神を蝕む。心を折り、意思を挫こうという悪意が、蠕動している。
だが、屈しない。その程度では、この歩みは止められない。六、七、八――

「い、っ……！」
痛みから歯を食い縛ると、不意に視線が噛み合う。どうやらここに来てようやく、この宝具を展開したことによる彼の動揺も解けたらしい――この宝具はあくまでサポートで、意図していたわけではないのだが。しかし、もう遅い。
「ハッ――！」
「――ガッ」
彼が口を開く前に、両肩を槍で突き刺す。既に私の腕もボロボロ、投げる動作の起点となる肩にダメージが通れば御の字、程度の目的だったが、どういうことか神父服に刃が通らず、それでも腐ってもサーヴァントの一撃、与えた衝撃で仰け反らせることに成功する。
「――せい！」
低身長を活かして間髪入れず足を横薙ぎし、槍を心臓に突き付ける。これでチェックメイト。いつぞやのアーチャーさんと構図が同じなのは、無論狙っていたわけではないが、やはり私は見かけには相当に侮られ易いからであり、それは同時に、私にとっては得体の知れない仇敵であった彼にも、人間らしい感情が存在していたことを意味する。
「動かないでください……！」
「フ――」
宣言するは、奇しくもあの時と同じ台詞。思い返せば、あの時も魔力が足りなくて短期決戦を挑むしかなかった。アーチャーさん、つまりエミヤさんは立場やその性根から素直に話し合いまで漕ぎ着けることができたが、彼を相手にすると、どうやってもその光景にまで辿り着く気がしない。
「これはこれは――む？」
「動くな、と言ったはずです。それは当然、その口も含まれます。監督役である貴方が私を妨害する所以は分かりますが、ここで現れた、つまり聖杯の現状を知って、それでもなお立ち塞がるというのなら」
やや集中し防刃らしき神父服を浅く切り開き、槍を僅かに肉に沈める。いつまでも慣れない肉を裂く感覚。正直に言えばこの感覚だけ

で耐え難い嫌悪感を抱く。だが、彼も人間ならば、これほど露骨に生死の淵に立たされたら、流石に迂闊な行為は控えるだろう――

「フ――こうも容易く無力化されてしまうとはな」

「……」

嘲弄。単に私が穿った見方をし過ぎ、警戒のし過ぎかもしれない。しかし少なくともそう取れるような余裕のある態度で、私の槍が按摩の如く感じているのか、薄ら笑いを浮かべて彼は語り出す。――が、

「――――」

（……っ、……）

視界が霞む。頭が白く染まっていく。彼の口が動き、何かしら煽られている、致命的な発言をしていると解るのに思考が追いつかない。この状況で容赦無く何かを語れる度胸に感心するよりも先に、ペットボトルでも取り出して中の水を美味しそうに飲み干した方が今の私には甚大なダメージを叩き出すだろう、なんて思考が過ぎるあたり、私も相当に切羽詰まっている。

こうして自分を客観視できるのも、召喚された際に霊基の変質があってこそ。精神と肉体を別々に、その意思だけは譲ることなく、あの人のために、あの人のために。

ああ、マスター、マスター。マスター。……お師匠様。

お師匠様、私は――

『――人を殺すということは、その者の罪を背負うということではありません』

ふと、あの時の台詞が脳裏によぎる。どうしてこのタイミングで、と思う前に、視界の端にある人物が映るのを認識する。

（セイバーさん……？）

あまりに見覚えのある金髪の騎士。どれだけ余裕が無かろうと忘れるはずがない。セイバー、かの有名なアーサー王。その表情を見て、すぐに察する。彼も無策でその場にいたわけではないのだと、すなわち、ずっと気掛かりであったセイバーさんのマスターは彼。監督役などと嘯いて、彼もこの聖杯戦争の参加者であったのだ。

「……っ、」

迫る明白な脅威に、焦燥した頭脳が警鐘を鳴らす。様々な思考が重なり、入り混じり、そして私の最良の選択を導き出そうとする。
でも、それはダメだ。安易な解決法を求めてはダメだ。どうして私は処刑された？　何故私は裏切られた？　決まっている、私が愚かだったからだ。だから、だから、だから。

だから――私には、復讐する権利がある。

（あ――）

思考が染まる。白から黒に。どこまでも苛烈に、まさしく燃え上がるように。

（私は――神父服？　どうして……そうだ、聖職者は、殺さないと――）

理性が、自制が、あらゆる制御が黒に染まる。
それでも頭の奥底から叫ぶ誰かの声を遠く感じながら、私は静かに槍を押し進めた。

紅蓮の聖女・D

「……、……!!」

絡みつくような潮風の匂いで目を覚まし、すぐさま全身を跳ね上げるようにして身を起こす。猛烈なまでの予感が、未だ覚醒し切れていない意識の中でもなお警鐘を鳴らす悪寒がこの身を安寧に誘うことを許さない。

俺は一体、あれからどれほど眠っていた？　眠気は言うに及ばず、不思議なことに、あれだけ感じていた倦怠感も今はない。何が起きているのかはわからない。ただ、俺にはまだできることがあるらしい。なら、こんなところでうかうかしてはいられない。

「……このタイミングで覚醒しますか。運が良いのか、悪いのか。ある意味『持って』はいるのでしょうが、僥倖とは口が裂けても言えませんね」

「――！　アンタは……」

まずは状況を把握すべく、周囲を見渡す――その前に、いつか聞き覚えのある声が、かつてとは異なる響きを持って俺に投げかけられる。

時代錯誤な格好をした金髪の少女騎士。慌ただしい日々を経ても彼女のことは忘れるはずもない。あの時、俺がこの聖杯戦争に関わるきっかけを生んだあの日――深夜の学校で、目撃者である俺に傷を負わせた、おそらくはセイバーのサーヴァント。

（っ……）

警戒を露わにする。あの時はランサーの介入があって見逃されたが、今回はそうはいかないだろう。何せ今の俺の側には戦闘だけは頼りになるあのサーヴァントがいない。あれほど過保護だったランサーがどうして、という疑問も浮かぶが、それよりもこの状況はどういうことなのか。何故俺はこんな浅瀬の海岸で布団に包まって眠っていたのか。何もかもが理解できない。

困惑する俺を見兼ねてか、それとも別の思惑があるのか、少なくとも表面上は穏やかに敵意を見せることもなく、推定セイバーはどうし

てか宥め賺すように俺へ語りかける。
「結論から申しますと、貴方はここで何もかもを見て見ぬ振りして逃げてしまった方がいい。巻き込んでしまった私が言うのも妙な話ではありますが、それでも、この地に眠る聖杯とやらは、もはや看過できないほどに――……っ！」
瞬間。
ぼこっ、と鍋が突沸したような音とともに、不意に身を躱した少女騎士のすぐ側へ黒いヘドロのような何かが飛来する。あまりに突然のことながらも、絶景とも言える海景色の中でそれはあからさまに浮いていて、そもそも何故俺がこんな海岸線に推定セイバーと居たのかも相まってまるで現実味が感じられない。
「……は？」
まじまじと飛来した謎の物体を見つめる。見覚えはないはずなのに、ひどく既視感のある暗黒物質。これは。
（……？）
何だ、これは。いや、どうして俺はこんなものに既視感を抱いている？　こんな明らかに異常な、まるでどす黒い感情を抽出し煮詰めて固めたような、何一つとして輝きを生まない――
（――……）
既視感の正体に思い至る。と、同時に改めて周囲を見渡し――すぐに諦める。改めて見るまでもなく、視界の先には見渡す限りの大海原しか存在しない。今更だが、ここは何処なんだ。どうして俺はこんなところにいる。しかも布団ごとセイバーらしき少女と共に。何が起きたらこんな事態になる？
「ここはおそらく、心象風景を具現化する魔術、固有結界――と呼称される空間の一部、いえ、その『果て』とでも言うべきでしょうか。この表現が適切かも分かりませんが……」
「果て……？」
どうにも嫌な予感が拭えない。そんな予感に違わず、波打ち際ギリギリのところの海岸線で佇むセイバーが夕日に顔を照らされながら不穏に切り出す。当然、疑問符を浮かべる俺に、夕日の真下、海岸線

のその先を見つめる。
「こういった閉鎖空間には珍しいですが、この固有結界は術者を中心としてではなく、どうにもこの場所を起点として広がっているようです。害意や悪意の類も感じられず、何かしらの仕掛けもない。あくまで推測の域は出ませんが、この固有結界はここから見える風景、すなわち『どこまでも広がる大海原』であることに意味があって、それ以上の意図は無い――そのように私は考えています」
心象風景――そう言われ、不思議と納得する。というのも、このあまりに異様な状況下において、それでもどこか心の奥底では安堵のような柔らかい感情を覚えることを疑問に思っていたからだ。それについて、この空間自体が誰かの心象風景、心の中であるとするなら、理屈を抜きに納得できるものがある。
そして、と彼女は一度言葉を区切り、彼女につられて海を眺めていた俺へ指し示すよう人差し指をある一点に固定して告げる。
「あの先……水平線の向こうに貴方のサーヴァントがいます。しかし同時に、あそこにはその少女が自身ごと隔離した私のマスターが存在する。
彼女が貴方をこの場所、波打ち際まで移動させたのは、貴方に覚醒を促し、ここから脱出させるためでしょう。この場所からそう遠くない高台に単体で設置されている不自然な扉があります。おそらくですが、海に背を向けその扉を解放すること。それがこの固有結界の脱出方法です」
私を諸共に移動させた理由こそ不明ですが、と締めくくり、隔離されたマスターのことも特にそれ以上語ることはなく、また彼女は俺に危害を加える様子もなく佇んでいる。今一つ彼女の動機はつかめないが、どうも彼女は俺の行動に干渉するつもりはないらしい。これは本当に有難い。
「分かった。……感謝する」
「いえ……」
理由はどうあれ親切にされたので礼を告げると、どこか歯切れの悪そうに返答する少女騎士。もしやと思うが、目撃者を始末しようとし

ていたあの日のことを彼女も彼女で気にしていたのだろうか。分からない、が、彼女の言葉は実直で、嘘をついている様子はない。そもそも彼女が俺に危害を加えるつもりなら既に俺の命はない。なら、敵であれある程度は信用してもいいのだろう。

（どうすべきか。いや……）

事情は大まかに把握した。要するに現状は、ランサーのいつもの先駆けの結果だろう。勇往邁進、と言えば聞こえはいいが、ランサーはいささか先走りすぎるきらいがある。否、ランサーはランサーなりの確とした行動原理があり、一般人である俺がそれについていけていないだけだが、ある種の命綱である俺をこうまで蔑ろ……にはしていないんだろうが、なんだろう。彼女自身は過保護なんだがどこか致命的に噛み合っていないというか、そうだ、多分、

（……慣れていない、あるいは経験がない？）

本人の言が正しければ、ランサーは厳密にはジャンヌダルクではない。そしてランサーの思い出話には常に、彼女を導いていた一人の少年の姿があった。ならば彼女に指導者としての経験などあるはずもなく、あったとしてそれはおそらくランサー本人の経験ではない。今俺がいるランサーの固有結界とやらにも、どうにもジャンヌダルクの逸話と噛み合わない。ならばこれは、きっとリリィの心象風景。

（海を見たかった……とか？　あいつは自分を擬似サーヴァントだの実験室のキメラだのと言っていた。ずっとカルデアの施設内で過ごしていたようなことも仄めかしていた。だからだろうか？　当の本人がここにいない以上、どこまでも予想にしかならないけど……）

無くはない、レベルの話だ。しかしあのジャンヌダルクオルタリリィのこと。逆にどんな経験をしていてもおかしくない。そもそも、そんなことは重要じゃない。今必要なのは、これから俺はどうするべきか、どうしたいのか、という話。

（この手の話題に正答はない。どれが一般的には正しくても、結局は俺の意思一つに左右される）

考える。考える。考える。何をするべきか。何がしたいのか。何

も分からないまま、それでいいのかと自問し続ける。
進路も退路も理解した。推奨された道も納得はした。しかし、それでも。まだ俺にはできることがある。いや、俺にできることが何も無くたって、このまま手をこまねいているのは、嫌だ。
足を海へと踏み出す。数歩進んですぐに違和感に気づく。水深が浅い、浅すぎる。今も足を踏み出し続けているのに、もう２０は足を踏み入れたはずなのに、まだ脛にすら水面が到達していない。しかもその上で足元は深い青に染まり、それなりの白波が立っている。明らかに自然ではない。しかし、今はそんなことよりも、と思い直し、まずはこの先の水面もこの調子なのかを確かめるべく、そのままセイバーが指差す方向へと駆け出そうとして――
「――やはり、貴方はそちらへ向かいますか。どうしてでしょう。不条理な選択のはずが、不思議と納得している私がいます」
「――……？」
足を止める。足が止まる。呼び止められたわけでも、まして咎められたわけでない。なのに、不思議と耳を傾けてしまう。
「先程の泥を見ましたか？　あれはおそらく――聖杯の中身、いえ、正体と呼ぶべきもの。この冬木の地で争い殺しあったサーヴァントの怨念や悔恨が泥の形で顕現した人の悪性の結晶です」
「な――」
「ランサーはこれを『ケイオスタイド』と呼称していました。この国の言葉では渾沌の海、と言ったところでしょうか。ただ見た目やこの固有結界との連想から安直にそう名付けたわけではなさそうでしたが――ひとまず、まずは一度深呼吸でもして冷静に、改めて貴方が立っている地面（そこ）をよくよく見つめ直すべきかと」
「え……」
押し寄せる不安に、這い寄る悪寒に、進めようとした片足が固まり、そのまま力無く浅瀬を踏みしめ、そこから地面がぐずりと崩れ落ちる。
「ッ……!?」
反射的に後方へと飛び退ける。海月を踏みつけた。そんなわけが

ない。そもこの固有結界に人以外の生物の気配は感じられない。海というものの厳しさを押し出した、奇妙なほど厳格で閑静とした――

「――原初の光景。世界の果てが如く広がり続ける大海原。全てを覆う潮騒は、波は、底に眠るその邪悪を、塗り潰し押し流し包み隠し書き換えてなおも美しい」

ぼごり。ごぼ。ぼこぼこ。ごうごうと吹き荒れる風を、ざあざあと音を立てる波を、地球という生き物が主張する激しさを、海面のそこかしこで沸き立つ黒いナニカが台無しにする。

ランサーの心象風景――彼女の心に刻まれた、セイバー曰く『どこまでも広がる大海原』にはあまりに似つかわしくない異物――すなわち、聖杯の中身。正体……悪性の結晶。

「ま、さか……」

認識した途端、爪先から得体の知れない恐怖が躙り寄る。そうだ――この固有結界とやらが大海原であるのなら、どうしてここはこんなにも浅い？　そして、ここにいるセイバーはどうして自分のマスターが海岸線の先にいると理解しているのに、頑なに海へ足を踏み入れようとしない？　どうして。どうして。

まさか、まさか――つまり、この海は、単に〝そういうもの〟として浅いわけではなく、既に。もうここまで。最早こんなところにまで。海岸線のその先にある、この結界の中心から――

「私がこの固有結界に囚われてから半刻ほど、〝それ〟はランサーのいるこの結界の中心から2分に1キロ前後のペースで結界を汚染し、現状、つまり現在、海面が泥を押し留めているこの状態から既に5分が経過――ただでさえ飽和寸前、その倍は見込めないでしょう」

「な――」

「それでも、この結界の中にいる限り、貴方への呪詛は全て術者であるランサーが引き受けます。どうにも、この固有結界にはそういった性質があるようで。自己犠牲の精神――いえ、流石に敵である私には適用されないようですが」

ともあれ、と呟いて、武装を解き、何故か素足の状態となったセイバーは、そのまま流れるように海面に足を踏み入れる。が、どういう

手品か、すらりとしたその足は水中に沈むことはなく、かといってアメンボのように水を弾いているわけでもなく、水面が大地であるかの如く堂々と。状況からしてきっと、真下にあるそれを避けていたはずなのに、そんなものをおくびにも出さず、セイバーはその白魚のような手を俺に差し伸べる。そう、まるで俺を導くように。

「貴方はランサーの真名を知っていますか？」

「え？　あ、ああ……」

「でしたら、その逸話についてもご存知でしょう――人々に裏切られ、ついには魔女として焼かれた聖女の逸話を。

曰く、この風景は彼女が処刑される寸前、フランス北部に位置するル・クロトワを通過した際にようやく叶った幼き日の夢。それを具象化したものである。彼女はそう告げました。そして、」

そして、ならば、しかしそれ故に、この風景は彼女が望めば即座に次の段階へと移行する。ひとときの夢は覚め現実に引き戻される。それはあまりにも有名な逸話。彼女が後の世に聖女として祭り上げられた、その元凶とも言える悲劇。

「宝具名を『紅蓮の聖女（ラ・ピュセル）』――この世全ての悪、この地の聖杯が齎す邪悪を、その身を捧げこの固有結界諸共に打ち払う、いわゆる心中宝具です」

「っ……!?」

何故、セイバーはそれを知っているのか。どうしてセイバーはその上で足を踏み出そうとしているのか。こちらに差し伸べたその手を、俺はどうすればいいのか。

「行きましょう。既に、猶予はあまり残されていない」

そんな言葉と共に告げられた導きは、いつか夢で見た少年の立場になったようで。

しかし、それでも、これまで独りでがむしゃらに突っ走ってきた俺は、誰かを頼ると（義）いうごく当たり前のことさえも、俺がどうにかするべき（正）だという強迫観念（味）に囚われて、素直に頷けない俺だった。（方）

……

……

……

「そういえば、これどういった理屈で立ってるんだ？　魔術の一種なのか？」

「ああ――……ランサーのマスター、私の真名については……」

「知らない。心当たりどころか、そのための判断材料も持っていない。あと俺の名前は衛宮士郎だ。士郎でいい」

「ではシロウと。……この際、隠し立てはしませんが、私は湖の妖精であるヴィヴィアンより水にまつわるいくつかの加護を授かっています。水の上に立つ、というのもその一つ。まあ尤も、生前に特技と言えるほど使用する機会はありませんでしたが」

「へぇ……ん？」

不安を押し殺すため、努めて穏やかに会話をするも、改めて、妙なことになったものだと実感する。

かつては殺し殺されかけた間柄。それを防いだランサーの手によって共にこの空間に囚われて、しかも争いのきっかけとなった聖杯に脅かされ、今はどういうことか手を組み同じ方向へ向かっている。

正直言って、俺はこの状況を理解しているとは言えない。ランサーの現状や聖杯の真実云々についてもつい先程セイバーに聞いた情報のみ。騙されてるだけ、流されているだけだと言われても否定はできない。でも。

（騙される気はしない……というか、今も丁寧に運んでくれてるし、そういうことを得手しているようには見えないんだよな）

これも言ってしまえば単なる楽観だろう。もしくは、そうであってほしいと、人の善性を信じたい俺の願望。先の質問にも素直に答えて

くれたのも助長しているのかもしれない。でも結局は単なる勘だ。ただなんとなく、彼女はそういうことをしないだろうと。
とはいえ、丁寧に運んでくれるのはいいんだが流石にお姫様抱っこは恥ずかしいというか何というか。いや贅沢を言えるような立場じゃないんだが。でも、いや、
（言い訳ばっかだな、俺……）
正義の味方への拘りといい、我儘でこんな悪趣味な戦争に首を突っ込むと決めたわけで、このザマでこの街に今まで我ながらよく五体満足でいられたなと自嘲する。
今だって、敢えて悪い表現をするならば俺の身柄はセイバーの手中に収まっているわけで。彼女が少しでも機嫌を損ねれば、俺はそのままお陀仏だろう――そこまで考えて、不意にセイバーが口を開く。
「……きっかけは、ランサーが私のマスターである言峰綺礼の心臓を貫いたことです」
「……？」
「彼は１０年前の戦争の被害者でした。いや、あるいは加害者であったのか、彼が殺された今ではもはや真偽は不明ですが、事実として、彼はどうやら１０年前の時点で聖杯の中身、ケイオスタイドに全身を汚染され、呪いをその身にたっぷりと蓄えていたようです」
「――」
１０年前。被害。呪い。容易に自身の身に起きたあの出来事を連想するその言葉に身構える。浮かんだ疑問は即座に戦慄へと切り替わり、何かを言おうと震えた唇も気づけばその先を促す身動ぎへと変化していた。
「魔術とは縁です。金属をそれに近い性質を持つ物体へと置換する錬金術を代表に、その対象を連想させる道具、所作、空間と言ったように、大半の魔術はそれらの繋がりを重要視します。
ランサーが彼を貫いたその時、彼がその身に蓄えた呪いは同様の性質を持った聖杯のそれに呼応し、あるいは全く同一のものであったが故に共鳴し、結果として双方から溢れ出した泥は、驚くべき速度でこの結界を埋め尽くしました」

「……」
セイバーはそう言いながら、出発前に指し示した方向を眺める。既に随分と進んだように思えるが、未だ目的地らしき場所は見えない。とはいえまだ距離にして1キロ程度、セイバーは水平線の更にその先、と言っていたので、10キロほどは見込んだ方がいいのかもしれない。
いや、そういえば、セイバーの証言では泥はこの結界を約25分で飽和、そのペースは2分に1キロだったか。なら単純計算で中央から端までは12～13キロほど。そしてその面積は、学園を中心に俺や桜に遠坂の家をすっぽりと包む、つまり深山町の大半を占める広さに相当する。
この泥が人体にどのような影響を及ぼすのか、具体的には定かではない、ないが、サーヴァントであるセイバーさえも避ける悪性の結晶。そんなものが大量にこの街へ放出される可能性があったと考えるとぞっとする。
（……いや、それこそが10年前の――）
冬木市を襲った未曾有の大火災。今も脳裏に浮かぶあの光景。あれは単なる火事にしては妙なところが多々あった。考えてもみれば、遠坂さえも敬遠するような魔術師である爺さんが、たかが火事であれだけ必死に、泣きべそを掻いてまで生存者を追い求めるはずはないのだ。
つまり、現状、結論はと言えば、何をするにせよ失敗はすなわち10年前の大災害に相当する被害が出る。
「……」
セイバーが何をするつもりなのか。どうして俺を連れて来たのか。まさかただの善意であるはずもなし、彼女は何を考えているのか。そもそもどうにかする手段があるのか。わからない、わからない。無い無い尽くしだが、嘆いてもいられない。
「……時間です」
「は？」
「いえ、訂正します――限界です。届くか……？　いえ、既に他の選

択肢はない――」
　言うや否や、セイバーの靴裏に閃光が走る。のと同時、それまで表層は穏やかだった海面が瞬時に黒く染まり、そして即座に燃え上がる。
　一面の火の海。しかしその色はそれまでランサーが身に纏っていた輝かない黒とも、泥が醸す混沌の闇とも違う、あまりに鮮やかな――〝紅蓮〟。
「――」
　これが、この光景こそ、人々に裏切られたはずの彼女が最期に見たもの。こんな状況でもなければ、至った理由を知らなければ、その由来がわからないなら、ただ俺が、何も考えずにこの光景に見惚れていられたならば、それはどれほど良かったのか。しかし、それでも関わり続けると、それを選択したのもまた自分であるのだ。
　その時、ふと、前方の水平線の際――水面に揺れる太陽とは別の方向に位置する、されど太陽にも匹敵するであろう巨大な火柱が天を衝いてるのが見える。
「あれは――」
「シロウ、時間がない――真偽は後、すぐに突入します……！」
「え？　――っ、うわっ……!?」
　あれが目的地だろう。そんな予感はあったが、セイバーはその場所を視認するや否や、脇目も振らず火柱に向かって宣言する。
　すると如何なるスキルの効果だろうか。垂直に跳び上がったはずの俺たちはどこからともなく吹き荒れる突風により方向転換し、勢いのまま火柱を突き破ってその中心に降り立つ。
　紅蓮の火の粉が雪のように舞い散るそこにいるのは、ここ数日ですっかり見慣れてしまった自称サンタ服を着た少女――ではなく、彼女に非常に酷似した容姿を持つ、俺と同じか、一つ二つ年上であろう女性がそこにいた。
「ここは……どうして、ここだけは無事で……」
「――この場所は処刑台。かつて私、ジャンヌ・ダルクが処刑されたルーアンの広場……尤も、ただ本来の宝具の座標ではそうであるとい

うだけで、我が固有結界、『海（ラ・ノブレス・カルデアス）への扉』とは無関係ではありますが」
妖精の加護により水面に着地した俺たちに対し、これまた当たり前のように水面に立っているその女性は、十字が刻まれた紺色のマントをたなびかせながら告げる。
紅蓮に彩られた柔らかな微笑みは、かくも気高く美しい。が、纏う雰囲気、容姿を含む数々のパーツ、何よりもその発言からしておそらく彼女は、
「之よりは地獄の片道切符。故に贈る言葉はただ一つ。即ち、」
ようこそ諸君。早速だが死に給え――と、女性はどこか尊大な口調で語り、しかし流石に無理があると思ったのか、すぐに顔を赤らめて目を背ける。そして改めて、努めていつもの口調で語り始める。
「――という冗談はさておき、どうしてまだ此処にいるんですかセイバーさん。そして、マスター……」
「どうしてって、それは……」
「ええ。無論、貴女の訴えは理解しました。――だがそれを、敵である私が受け入れるかは別の話。貴女が全ての憎しみを背負う――その志は立派ですが、しかし現状、どのようなイカサマか、手遅れだったマスターと違い、貴女はまだ〝あれ〟に汚染されていないように見える」
「っ……」
言い淀んだ俺を庇うように、セイバーは堂々と発言する。けれど女性――ランサーも今度は視線を逸らすことはなく、それでも先程よりかはやや辛そうな表情で、とんでもないことを。
「……この固有結界に満ちる〝あれ〟は、既にこの地に眠っていた聖杯の呪いとは別物です」
「……む？」
「この空間は私の夢――私の妄想より出づるもの。したがって、ここに侵入したあらゆるものには私の勝手なイメージが先行し、等しくその影響を受けます。それはあなた方も例外ではありません。瀕死だったはずのマスターがそうして平然と活動できるように。聖杯の呪詛だろうとも、マスターであるからという理由だけでここに満ちた

毒の影響を受けないように。そんな地獄のような状況下にあってなお、この海は誰にとっても美しいように」

ここに満ちた毒。さらりと告げられたとんでもない情報に戦慄する。海中に沈んだ泥さえ俺は認識出来なかった。どころか俺は、この固有結界を単なる大海原としか見ていなかった。思い返せば、セイバーは不自然なほどこの固有結界について言及していたのに。

「セイバーさんのマスター……言峰神父は、変質した泥に耐えられず崩壊しました。あの人も敢えて泥をその身に蓄えていたからには、あれを御する理由なり手段なりを用意してはいたのでしょうが、あくまで人間でしかない彼に、妄想の産物とはいえ原初の海（ケイオスタイド）の誘惑は抗えない。

そしてそれは、結界のあるじである私も同じ、いえ、本質が夢そのものであるこの私は、よりダイレクトにその影響を受ける」

それでもランサーが正気を保っていられるのは、呑まれた場合の恐怖が身に染みているため。つまるところ、心的外傷（トラウマ）による忌避感が先行しているからである。ランサーは告げる。しかし、でも、それも徐々に、徐々に誘惑に引きずられている、だから、

「既に紅蓮の聖女（本来の宝具）の方にも異常が発生しています。悪を断つという大前提だけはどうにか機能しているようですが、どうして私が無事でいるのか、この宝具の前提を踏まえると不自然極まりなく、またその理由もわかりません。ですが、それを好都合だと受け取ってこのまま脱出するのは明らかにまずい――これはスキルも持たない私の直感でしかありませんが、あの聖杯の呪詛に、そんな抜け道が残されているとは思えないのです」

「……」

笑顔を崩し、真顔でランサーはそう訴える。彼女だって、不本意な選択ではあるのだろう。あんなものと心中するなど、誰だって避けたいに決まってる。けれど現状、それが一番丸く収まる選択であるのもきっとまた事実。故に、推測でしかないはずのランサーの言葉に、セイバーは苦虫を噛み潰したような表情で沈黙している。

――でも、それでも。

それでも俺は、まだ。
「本当に、どうにもならないのか……？」
「逆に、どうするつもりですか。この姿を見ればわかるように、私もあの泥に全身を汚染されています。オルタのオルタであるが故にこの私――まあ、このあたりの事情はさておき、今私をこの結界から引きずり出せば、私を中心にケイオスタイドが流れ出します。
いえ、そもそも発動した宝具（処刑）を私は止められない――こうして話している間にも、いつ私がこの結界に焼かれるか分からない。急がないと、貴方たちも巻き添えに」
「この結界をどうにかして――」
「無理です。仮に出来たとして、それは私を結界の出口から引きずり出すのと同義、まるで意味がありません」
「その泥か毒を取り除けば――」
「それは現在進行形で行なっています。完了すれば晴れて私も昇天ですね。……すみません、流石に冗談が過ぎました」
「あれが聖杯の中身だって話なら、願望器としての機能が――」
「あると思いますか……？　いや本気で」
「くっ……」
最後のは当然ながら、パッと思いついた方法が悉く否定され尽くして絶望する。何かないのかと頭を回しても、そもそも俺は魔術の造形に詳しいわけじゃない。そもそも、俺は先程告げた案すら実行できる立場にない。
どうすればいい――いや、そもそも何が正解で有るのか。彼女があれを引き受けるのなら、それを止めるのは本当に正しいのか？　でも、それは嫌だ。しかし、なら、それは正義の味方として。俺は――
「論理的に考えて、物語のように都合よく全てが解決する手段はそう簡単に転がっていない、ということです。正義の味方とは結果論。現実はベストがハッピーと等号で結ばれる事件などそうそうない。間に合わない、どうにもならないは日常茶飯事です」
ですので。そう区切り、彼女は結論を述べる。これまでの戦争の評価を語るように、もうこれで終わりなのだと、俺に対して言い聞かせ

るように。
「総評、不合格。これに懲りたら、ロクな理由もなく厄介ごとに首を突っ込むのはやめましょう。ただひたすらに後味が悪いだけ……そんなもの、士郎さんだって嫌でしょう？
しかし、正義とは得てしてこういうもの。誰もが納得する結果などあり得ない。特に魔術に関わるなら、こんな事態はザラにある。ですので、その、あれです……」
微妙な表情で首を傾げ、頬の下をぽりぽりと掻きながら歯切れ悪くランサーは続ける。その子どもっぽい仕草に、少しあっけに取られる。
「……おかしいですね。諭しているつもりが、どうにも愚痴っぽくなってしまいます。
今回のことは残念でしたが、というか私も普通に無念ではありますが、これが嫌だと目を逸らすのも、奮起して立ち上がるのもまた貴方の選択です。
悩むのです、若人よ。それはきっと、巡り巡って貴女の糧となる――これは受け売りですが、これほど貴方に相応しい言葉もありません」
一瞬だけ誰かを思い出すかのように紅蓮舞う天を見上げたランサーは、また再び微笑んで、
「最後に一つだけ。無理はいけません。貴方の手が届く範囲は有限。常軌を逸してその領分を超え、全てを掬い上げられる人物に至れば、それはすなわち独善であり、誰かにとっても脅威でしかないのですから」
人の出来ることに不可能はない――いつか彼女が言った言葉。だがしかし、全能な存在はヒトであると言い難い。彼女は魔術師を、魔法使いを嫌う。それ故の言葉。でも、
「なあ、ランサー。もし、俺が本当の意味でランサーのマスターだったなら、こんな結末には……」
「……。いや、流石に無理じゃないですかね……言いたいことはまあ分かりますが、今回に限れば最初から詰んでいたようなも

のですし。まあ――」
未練がましく後ろ髪を引かれる俺に、律儀にもランサーは思案する。こんな問答をしている場合じゃないのは理解しているのに、いつまでも答えを出せずにうじうじとする自分が情けなくなる。
諦めの悪さではない、単なる格好の悪さ。駄々を捏ねる子どもと何ら変わりないその最期のやり取りが、関係するのかしないのか――
「万事解決、となると、金ぴかの王様でもいなくては――」
「――ほう？」
その言葉と同時に、それまで俺たちを囲んでいた紅蓮の火柱が討ち払われ、そこから黄金の英雄が現れる。
黄金の鎧を身に纏う、全てを見下した態度の金髪と赤目の青年。まさしくランサーが告げた人物評と寸分違わぬ何者かは、まるでこの世の全てを把握しているかのように確信を問いた。
「な――」
「我（オレ）がいれば、貴様はそう言うか、雑種。ならば申してみよ。何故貴様にとってティアマト（こんなもの）の権能（トラウマ）が脅威であるのかも含め、慰み程度に聞いてやろう」
その言葉に、あまりに都合の良い登場に、噂をすれば影がさす――それまでは単に諺としか認識してなかったそれに、魔術的な意味が含まれているのではないかと疑い始める俺なのだった。

[redacted]：EX

ギルガメッシュという人物について、私が語れることは驚くほど少ない。

偉大な人物である、ということは知っている。とはいえその事実についても、カルデアのデータベースからの引用、しかもそれを調べたのはリリィとしての私ではなく、すなわち又聞きの情報であり、当然ながら私にその実感はない。

更に言うなら、生前の、否、世に名だたる聖女としてのこの「私」は、生前に彼の逸話も、また彼の名前さえも聞いたことはなかった。古き良き時代の、と言えば聞こえは良いけれど、それはつまり黴の生えた昔話。現代とは違い保存技術の発達していない神代において、やはり完全な状態で物語を残すのは不可能に等しく、まして識字率もそこまでではない時代で、国も時代も遥か異なる英雄譚を知る者など、かつてあの私が過ごしたフランス全土を見渡してもおそらく片手で事足りるだろう。

実際の人物としても、賢王としての彼ならともかく、英雄王としての彼は、かつてカルデアで関わった限りではどうにも掴み所がなく、はっきり言って非常に取っ付き辛い人種だった。とはいえこれも責められないだろう。そもそも気難しい彼の気質や尊大な態度を除いても、下手に機嫌を損ねれば生命のみならず世界の危機にまで直結する人物が相手なのだ。ありとあらゆる時代の英雄から一目置かれていたあのマスターでさえ、彼と会話するときには無意識に一歩引いていた、となると、その面倒臭さは伝わるだろうか?

と、言うより、あくまで私の、ジャンヌリリィとしての彼の印象はと言うと、それはそれは散々なものとなる。理由はわかる。彼は何らかのスキルによってこの世のありとあらゆるものを見透かしていて、そして私が誕生した経緯が経緯だ。故に、彼はいつも私を視界に入れると含み笑いを漏らしていた。果てしなく失礼である。

彼は子どもには優しいらしい。らしい。あんな性格なのに。あんなにも偉そうなのに。それ以前に子どもとか畜生同然とか言って普

通に見下してそうなのに。しかし、私がそれを実感したことは一度もない。その程度、そのくらいの付き合いしかないような関係だ。
でも。それでも彼はカルデアにおいて特別な扱いをされていた。確かに面倒な人物ではあったが、それに相応しいくらいの立ち振る舞いを見せた。己が世界の頂点であると自惚れている困ったさんではあったが、そのように錯覚してしまうだけの能力があった。
先程、自然と名前を出してしまったのは、以上を踏まえてもなお、彼の持つその超然とした雰囲気が私の目にも留まっていたからだ。もしかすると彼なら――言ってしまえば、その程度の期待。いや、単なる願望で、期待ですらないのかもしれない。でも不思議と、私の内の正しい私（ジャンヌ）は、さほど交流があったわけでもないはずなのに、何故か彼のことを一目置いていた。だから。だから。
「っ……」
でも。それでも私は――
「許可なく乙女の心を土足で踏み荒すなんて、相変わらずデリカシーがありませんね。英雄王ギルガメッシュ」
「――ハッ」
口が動く。殆ど反射的に、私たちの意見を統合するよりも前に、彼に対する苦手意識からか、つい辛辣な言葉が口に出る。
無論、彼に対して聞きたいこと、言いたいことはいくつかある。具体的にはなんで今鼻で笑ったのかとか、本当に許可なくしてどうやって当然のようにこの場に現れたのか、とか。しかし、彼については考えるだけ無駄だと本能が訴えている。だからこそ私は、ジャンヌは、この状況で彼の名前を挙げたのだから。
「ギルガメッシュ……？」
「察するに、この黄金のアーチャーの真名でしょう――しかし英雄王とは……いえ、なるほど、ギルガメッシュ。ギルガメッシュとは人類史に遺された最古の英雄譚の王。つまり英雄の原点と言っても過言ではない。あの無数の宝具はすなわち、英雄の王として、あらゆる宝具の原典を所有しているということですね」
「……その話、私も生前に聞いたことはありますが、色々とおかし

くありません？　　いえ、彼こそが『英雄』の源流である、という理屈はわかるんですが、そこで世界を統べたからと言って、現在過去未来まで、しかも他人が生み出したものを含め財宝であれば己がもの、というのは些か理解が及ばないと申しますか」
「――は。そういう無茶を通してこそ、神代の英雄というものよ。貴様らこの時代の人間が我（オレ）をどの程度と侮ろうが、我（オレ）は常にその上を征く」
「……」
　無茶苦茶な理屈を強引な屁理屈で押し通そうとする英雄王。しかしどれだけ偉ぶったところで、私にとって彼が理解不能な存在であることに変わりはない。そもそも、彼はどうしてこの時代に現界しているのか。如何に今の私が彼の目に余るほどの脅威だとしても、流石にわざわざビーストみたいに墓穴から這い上がってくるのは彼の心情的に嫌だと思うのだが（不可能だとは思ってない）。
「それで、こうして割り込んできたからには、何か――いや、貴方は意外と気分屋でしたね。なら私としましては、なるべく早くそちらの二人を連れて脱出することをおすすめしますが……ああ、そうです。いい機会ですし、私から貴方に言いたいことが」
　ただ一つ。湧き上がる感情に任せてその言葉を吐き出す。爪先と心臓から溢れ出す不快感が、彼に見透かされている現状の嫌悪感が、何より汚染された精神性が醸し出す暴力性が気持ち悪くて。否定したくて。
　私は既に復讐者としては落第なのに、外見だけを取り繕っても、それでも私はサーヴァントとして、クラスという縛りからは逃れられなくて。せめて口で発散しようとして、それでも、それさえも気持ち悪くて堪らない。
「お節介が過ぎますね。気持ち悪いったらありゃしない。聞いてやろう？　　白々しい。そんなだからロクに友達もいないのよ、悪趣味男」
「――言うではないか、雑種。されど、王とはすなわち、森羅万象全てを俯瞰する者。故に、時には見たくもないものを見てしまうこともあ

る。そこな己すら見失いそうな雑種とは違ってな」
「っ……」
けれど、やっぱり私（リリィ）では役者不足で、彼にしては随分と生温い反撃に黙り込んでしまう。恨まれるとは、悪態を吐くとはなんて難しいことか。黒い私ならここで更に煽ったりするのだろうか。それさえも分からない。できない。頭が痛い。
――結局のところ、どこまで行っても私は未熟者のリリィで、泥に染まって復讐者として世界を呪うのも、その真逆、聖女として我が身を犠牲に世界を救うのも、あるいは何もかもを投げ捨て、原初の海に溺れて獣に堕ちるのも、そのどれもが未熟故にできない。
士郎さんの説得に関しても、結局は彼が何を求めているのかが分からず。彼が心の奥底では言葉とは違うことを求めていることは分かっても、それはあくまで推測の域は超えず、だからこそ説得も支離滅裂となる。
お師匠様なら、あるいは目の前の王様なら、彼の望みを理解できるのかな――などと嘆いても、この場に師匠はおらず、だからと言ってそれで目の前の王様に問いかけるのは、これは普通に不敬であろう。私ですら不躾だと思うのだから。
「……」
（……どいつも、こいつも……）
しかし、理性が訴えかけるものと心に湧き上がるものは、今の私に限っては一致することはない。ああ苛々する。気持ち悪い。血管が切れそうだ。
思えば、召喚されて最初からそうだった。そもそも私は、誰かを率先して率いることには向いていない。友達の前では偉ぶっていても、それはマスターの真似事の域を出ず、そもそも私はサーヴァントであって、ならばやっぱり今の私は、どこか色々とおかしいのだろう。
気づけば、服装の一部が黒く変化している。全身から吐き気にも似た不快感が込み上げる。目の前のこいつらを、すぐにここから追い出したくて仕方ない。実のところ、マスターやセイバーさんを無理矢理ここの出口にまで追い遣ったのは、そういった面での理由がなかった

わけじゃないのだ。
「……」
今、この瞬間にもじわり、じわりと思考が黒く染まっていく。ふと深夜に厨房に忍び込んで摘み食いをしたくなるような、そんな昏い誘惑が沸き上がる。尤も、コレは本来、摘み食いなどという生易しいものではないのだろうが、そういうところも、私が未熟者である証左だろうか。
幸運なのは、今の私が、かつての私がアヴェンジャーである故に思考が黒く染まろうとロジックそのものにさほど影響はないことと、侵食速度よりも私の破滅の方が早そうだ、という気休めにもならないこの状況か。
「……――ふぅ」
ため息を一つ。でも、まるで気分が落ち着いた気がしない。いずれにしろ、この調子では今の私にまともな話し合いなど出来そうにない。ただでさえ油断ならない相手に加え、自身の内側にまで気を張らなくちゃいけないとなると、やはり私には荷が重すぎる。気持ち悪い。気色悪い。吐き気がする。
それでも目を逸らすわけにはいかないと、どうしたものかと思考していると、意外にも、あるいは必然的に。当然、私の事情なんて無視して、誰にも憚ることはないとばかりに、目の前の王様は語り出す。
「やはり解せぬな。如何な固有結界内のこととはいえ、貴様の生み出した原初の海が我の知るものと同一であるならば、それが偽物とて、人の手でこのように燃え盛るとは、想像上ですらあるはずはない――道理に合わぬ。ならば」
「違います。貴方にとってのケイオスタイドが如何なるものだとして、私にとってこれは燃やせるもの、燃えて当然のものでしかない。実際、私は本物のこれが燃えたところを視認しています。仮に実際には不可能な理だとして、その事実が私にとって揺るがなきものであれば、世界なんて幾らでも誤魔化せる。それが私の強みであり、弱点でもあります。身の程知らず、と言われたらそこまでですが」
「何……？」

（……？）
無意識に紡いだ棘のある回答。そして掠める違和感。それは会話の中身ではなく、そもそも彼に対し、質疑応答という形式が成立したことに関して。しかしその疑問も、彼と会話を交わすごとに加速度的に肥大化する嫌悪感と忌避感、何より沸き立つ誘惑によって即座に引き剥がされ、更に、改めて彼を視認し、ここに来てようやく気づいた異常に私は驚愕する。
「な――」
（この感じ……まさか、彼も黒化して――既に、どうして……？
私の泥は、まだ誰も……いえ、それ以前に……）
「その霊基――その泥。貴方ほどの英霊が、どうして――いえ、それは、いつから……まさか、貴方は、もう正気では――」
「見縊るなよ、雑種。この程度の呪い、飲み干せなくて何が英雄か。この世全ての悪？　は、我を染めたければその三倍は持ってこいというのだ」
「――」
あまりに堂々と告げられた暴論に絶句する。何故ここでアンリマユさんのことを引き合いにしたのかはともかく、問答無用で納得しかねない何かよく分からない凄みがある。
しかし、彼が嘘を言っている様子もないし、これだけの泥を蓄えてなお受け答えは成立している。ならばそれは事実なのだろう。思い返せば、言峰神父も同等かそれ以上の泥を蓄えてなお正気だったように思えたし、一応はこの私の例だってある。ならば、アライメントが悪寄りのメンタル化け物みたいな怪物なら、この泥にもある程度は耐えられるのだろうか？
「そう、ですか……でも」
とはいえ、彼が私と同じ状況、この様子では、彼がどこか気が立っているように見えたのも錯覚じゃなさそうで、その原因が泥にあるのかはこの際おいておくとして、いずれにしろ、やはりこの人に頼ることはあり得ない。結局のところ、どう足掻いてもこの人は私にとって、決して信用していい人じゃない。今も私の精神を蝕んでいる、言

峰神父と同等のものを身に宿している彼は。でも、それでも。
それでも、その上で。彼は未熟な私とは違い、確実にこの事態にケリをつけられる。
ヘラクレスさんと戦った時にも感じた感覚。つまり、どちらがより脅威になり得るかという話。確かに彼は危険な思想を持つ人物なのかもしれない。しかし、彼は曲がりなりにも、この状態のままおそらくは前回の戦争から世を乱すこともなく生き延びてきた実績がある。
私はどうだろう。私はこんな短時間で、既にこの泥が、こんな穢らわしい混沌が愛おしくて堪らない。そも、私と彼ではその規模が違う、余さず取り込んだ私とは違い、彼はただ染まっただけ。けれど、そういう要素があったとして、ならばより影響が低い彼を優先すべきなのは明白。
なら、なら、そうであれば、私は。どうしよう。どうしよう。ああ、マスター、マスター、マスター。
――……お師匠様。
（っ……）

「……む？」
「ランサー？」
「……？」
ゆらり、両の手を持ち上げる。目指すは一点、自らの内に眠る物。我が固有結界の起点として取り込んだ、この光景の元凶とも呼べるもの。
どこか遠くから声が聞こえる。否、あらゆるものが遠くに感じる。そのくせ身体を焦がす熱が、内側を満たす泥がより鮮明に実感できて目眩がする。もはや一刻の猶予もない現状で、走馬灯のように過ぎったのは、いつだって私を導いてくれた、あの人の言葉。
『願わくばその力が、正しく世界を救うことを信じて――』
それはかつてあの人が起こした奇跡の再現。その指向性を更に限定的にしたもの。空想の存在である私だからこそ扱える、

彼にとっての理想の力。しかして彼のそれとは異なる、聖杯により形を成した私が、聖杯を起源として現界する私が想い描く彼の理想。彼がかつて民草に信じさせた曖昧な奇跡とは真逆、即物的かつ具体的。すなわち、聖杯を操るためだけの力。その真名を――

「宝具解放――『双腕（ツインアーム）・聖杯掌握（リトルクランチ）』」

☆☆☆

間桐桜は錯乱していた。

「あ……」

〝それ〟が再び私たちの目の前に姿を現したのは、突如として彼女を筆頭に洞窟の一角ごと数多の人達が消え果ててから実に３０分が経過してからのこと。

漏れ出た声は、安堵。それはようやく状況が動いたことに対する反応ではなく、単純に私がいい加減この空間にいることに居た堪れなくなっていたから。キャスターさん曰く先輩やランサーちゃんの生命反応は明白で、加えて緊張で張り詰めていたから体感の時間としてはいつかの頃よりかは長くは感じなかったけれど、やはり実際に現場を確認できないでいるのは不安極まりなく、更に直前の出来事もあって居心地が悪いことこの上ない。

幸い、と言っていいのかはわからないけど、この場にいる誰もがそのことで私を責めたりはしなかった。むしろキャスターさんが定期的に挟む現状報告のようなもの以外は誰も言葉を挟まなかった。

理由についてはおそらく誰も明言しないけど、それだけの何かが、逆に３０分もの間まったく状況が動かなかったにもかかわらず誰も離脱を試みなかったほど惹きつける何かが、もっと言えば「ここから目を離すわけにはいかない」という理屈を抜きにした漫然とした恐怖が、サーヴァントであるライダーたちさえ注視せざるを得ない脅威

が、今まさに目の前で繰り広げられていたとしたら。
「何ですって……？」
当然と言うべきか自然にと表現するべきか、それまで沈黙を保っていた面子の中で唯一、内部の気配を探ってその結果を随時報告していたキャスターさんが怪訝な声を上げる。
それを疑問に思うより前に、どこからともなく私たちの前方に降り立った人物に着目する。まず何よりも目を惹くのは、黄金の鎧に身を包んだ金髪の男性。明らかにサーヴァントだとわかる、しかしこれまでに一度も存在を見せなかったされど異様な存在感を誇るその男は、如何にも不可思議、というような顔をして。
「よもや此処まで聞き分けがないとは。童の癇癪に付き合うのも億劫よ」
これまた見た目に違わず如何にも、という尊大な態度で呟いた彼は、事情は知らないが貴方がそんな態度だから相手も聞き分けが悪いのでは、と至極同然に疑問に思う私に、というよりこの場に集った誰にも視線を向けることはなく、ただ一点を見つめている。
（あの方向は……〝あれ〟があった場所……？）
あれ、とはすなわちこの地に眠っていた聖杯のこと。確かにあれは現物がない現在でもそこにあるかのような存在感を誇っているが、今はランサーちゃんの固有結界とやらに取り込まれて不自然な空白地帯と化しているその場所が。
（タイミングや方角的に、おそらくはその固有結界から脱出してきただろう彼がそれを分からないはずがない……ならどうして？）
いや、固有結界の説明を聞いた感じだと、内部がどのようになっているのかは千差万別かつ一切不明で、脱出出来たからといって何もわからない可能性は勿論あるのだが。
とはいえ、その真偽を図る暇もなく、件の黄金のサーヴァントとはまた別に、しかし優雅に降り立った彼とは違ってこの上なく無様に、けれどもそれ故に身近で、そして私が一番心配していた人物が文字通りに転び出る。
「――っが、」

くぐもった悲鳴。巻き上がる土煙と転がって来る何か。それが人間であると認識できたのはその人物が私の目の前で勢いを止めたが故であり、また同時にその人物の存在は、私の思考を止めるには十分過ぎた。

「……なっ、先輩!?　その怪我は……!」

「う……?　さ、桜……?」

意識はある。というよりよくよく見れば全身が土で汚れているだけで怪我も擦り傷がせいぜいと言ったところ。ただし状況がまるで掴めない。何故、先輩がこのタイミングで、ッ――……!?!!

「――ひ、」

背筋が粟立つ。訳もなく悪寒がする。それが単なる気のせいではない証拠に、身体中の蟲があのお爺様の統率さえも無視して身体の中を無秩序に這い回る。

反射的に視線を黄金の彼と同じ方向へ向ける。――そこには、いつの間にか〝彼女〟が立ち尽くしていた。

「なんなの、あれ――」

姉さんの声。その意は困惑。無理もない。訳が分からない。でもそれ以上に恐ろしい。私はそれが見えているはずなのに、何一つとして理解ができない。

見覚えのある顔のはずだ。否、良く見れば随分と風体が変貌している。しかし、面影はある。けれど不思議と別人とは思えない。服装はともかく背格好がまるで別人のものだと言うのに。

ならば、何故。何故私は彼女に萎縮している?　いや、私がサーヴァントに萎縮するのは当然のことだ。何なら私はライダーにさえ時々本能的に怯えてしまう。だからこの場でのこれはそういう意味ではない。

姉の言葉――正しく優秀な魔術師である遠坂凛の言葉は実に的を射ている。あれは何だ。サーヴァントではない。人間ではない。お爺様のような怪物ともまた違う。それこそ、その方向性は真逆だが、異質さで言うなら先ほど現れたこの黄金の男に近しいものを感じる。

「あの……」

「……む？」
思わず口に出してしまったそんな呼び掛けに、どういうわけか件の黄金の青年は反応する。指向性すら定かではないそれを当然のように自分への呼び掛けだと断定したのは不気味だが、今はあまり関係がないと放っておく。
「彼女は――いえ、あれは一体、何なの、ですか……？」
「……」
ゆっくりとその男が振り向く。整い過ぎたその容姿と、あまりに透き通った瞳に射抜かれて視線を逸らしそうになる、が、ここで視線を逸らせば彼の機嫌を損ねると本能的に察し、そのまま見つめ合うことしばし。
やがて話しかけたこと自体が拙いと気づくも既に遅し、逃れようもない死の恐怖に私が怯えながらその瞳を見つめていると、不意に、
「――アレはまさに、この地に巣食う呪いそのものよ」
とだけ告げる。意外だった。独り言のような呟きとはいえ、まさか返答が返って来るとは思わなかった。ただ、彼が物凄く不機嫌そうに見えるのは今の私のせいではないと信じたい。加えて内容も良く分からない。つまりはどういうことなのだろう。訳知り顔ではあるが、これ以上は僅かでも踏み込めば殺される気がして聞き出せない。
「桜……」
すぐ隣にいた兄が私の手を握る。どういう風の吹き回しだろうか。不思議なことに、普段は感じる肉体的接触に伴う嫌悪感は感じなかった。それは兄の手がかすかに震えているからか、私が目の前の光景を見て感覚が麻痺してしまっているのか。それまた別の理由か、分からない。しかし、やはり私がどれほど足踏みしようとも、時間というものは誰にも平等に紡がれる。
それは当然、目の前の彼女、異様な変貌を遂げたランサーちゃんも例外ではない。しかし彼女は聖杯のあったその場所に佇んだまま俯き、奇妙に不自然に、まるで時間が止まったかのようにピクリともしない。
「――シロウ！」

さほども経たず、また新しい声が一つ洞窟に鳴り響く。声の主である中学生くらいの少女は先輩や黄金の彼と同一の方向からまた不意に現れて、倒れた先輩を彼女から庇うようにして抱き寄せ、息があることを確認するや否やすぐさま反転しランサーちゃんへ向き直り、私たちに向けて大きな声で呼び掛けてから、

「――私ごとで構いません！　対城クラスの宝具をお持ちでしたら、今すぐ彼女に向けて解放してください！」

「は？　いや、貴女誰？　いえ、サーヴァント？　何をいきなり――」

「早く！　既にもう、アレに彼女の人格は残されていない――!!」

次の瞬間。

異様に緩慢な動作で、問題の彼女が首を起こす。

「っ……!?」

それに呼応するように彼女から噴き出した瘴気に身体が反応する。蟲蔵なんか目じゃないくらいに原始的な恐怖を煽るそれは、わけもなく錯乱している様子である金髪の少女への信憑性を高めるものだった。

「……！」

洞窟が震撼する。ゆらり、と覚束ない様子で周囲を見渡す彼女に悪寒が止まらない。そのままランサーちゃんは一番左に立つライダー、私、兄さん、倒れた先輩、遠坂先輩――と視線を向け、やがてある一点でその動作を止める。

（え……？）

視線の先――イリヤスフィールと名乗った白い少女はその視線に瞬き、けれど私同様に思考がまだ追いついていないのか、良く見れば僅かに震える身体を動かすこともできずに棒立ちで立ち竦む。

しかし、

「――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．」

そんな詠唱がどこから響いたのか、私には認識することができなかった。

詠唱、となると先ず最初に詠唱者（キャスター）であるフードの女性のことを思い

出すが、それでも出処が不確かであったのは、その声が明らかに男性のものであったこと。その上でさらに、私にはその詠唱が、例えば姉さんやお爺様のように、とても魔術の工程の一部とは思えないくらいに独特なものであったからだ。
「……アーチャー？」
　真っ先に違和感に気づいたのは、遠坂先輩。今度ははっきりと脳に刻まれている声色が示すその人物を見やると、そこには矢を番える白髪の赤い弓兵の姿が。どうやら状況からして、先ほどの声の主はこの大男だったらしい。
「ちょ、アンタ、何を勝手に」
「確かにそこのセイバーに対しての不信はあるが、それを押してもその内容には信憑性があると私は判断する」
「だからって、それは。それにアンタ、記憶が――ってそういう……ホント、アンタってば性格腐り果ててるわね」
「……」
　アーチャーさんはその言葉に複雑そうな表情をするが、それも一瞬。良く見ると矢とはとても表現できない捻れた剣のような何かを弓に番え、そのまま彼女へ狙いを定める。
「――『偽・螺旋剣（カラドボルグII）』！」
　音を切り裂く衝撃。正確に彼女の頭部へ向かって進む弓兵の宝具は、しかし彼女の頭部に接触するも轟音と共に砕け散り、傍目には彼女にダメージを受けた様子はない。
「なっ――そんな馬鹿な、あんなのモロに食らって仰け反りさえしないとか全身が鋼鉄だとしても色々とおかしいでしょ!?」
「……いや、ランサーはダメージそのものを夢だと誤認することができる。あの攻撃が彼女にとっての夢であるなら、当然、それは現実に影響を及ぼすことはない――」
「はぁ!?　だったら何、今のあの子は無敵だって言いたいの!?」
「違う――アレはあくまで、問題を先延ばしにしているだけだ。効いていないわけじゃない。夢はいずれ醒めるもの。彼女が現実を再認識すれば、それまでの攻撃のツケが回る。だから――セイバー！」

「ええ、シロウ！」
だから彼女の目を覚まさせるほどの一撃があればいい、と先輩は告げる。そしてそのハードルはさほど高くはないのだと。何故なら、そもそもあんな非常識な防御手段があるのなら、彼女があの防御宝具を多用する理由も、全身をボロボロにしてまで戦う必要もないのだから。
いっそ単純に長時間弾幕を張るだけで事は済む、と先輩は言う。要は彼女に現実へ意識を向けさせればいいだけで、衝撃の多寡は無関係であるが故に。
しかし、やはり、攻撃の威力は即ち存在感の高さとも言える。迫力という言葉があるように、力強さはそれすなわち存在感の強さとして現実に轍を刻む。だからこそ、如何な彼女とはいえ、この一撃から目を逸らすことは叶わない――！
「――束ねるは星の息吹。輝ける命の奔流」
それは星に轍を刻む剣。人々の想いを重ねた最強の幻想。魔術世界ではあまりに有名な、聖剣というカテゴリーの中において頂点に立つ最強の聖剣。その真名を。
『約束（エクスカリバー）された勝利の剣』！！」
膨大な熱量が視界を覆う。洞窟の雰囲気を塗り替える閃光が迸る。……余波だけで、私の内に潜む蟲がいくらかが魔力に当てられて朽ちていく。
「……！」
光が満ちる。光に飲み込まれる。纏った瘴気ごと、聖剣の光が彼女の存在を蹂躙する。
しかし。
「……」
（無、傷――）

「……そんな――」
しかし、それでは足りないと、その程度では彼女の歩みを止めるに至らないでも言うように、彼女は僅かに後退しただけで、怯むことも臆することも身動ぎさえもすることはなく、受ける直前と一切の変化がないままに――
「――いえ、サクラ。これでチェックメイトです」
「ライダー……？」
不意に呟かれたその言葉に顔を向けると、いつのまにか普段から装着している両目を覆い隠すバイザーを取ったライダーが、その宝石のような瞳でランサーを睨みながら佇む。その事実に怯む私を安心させるような柔らかな口調で、彼女は私の疑問に回答する。
「というより、おそらくはきっと、最初から……そうですね。アレは抜け殻に近いものだったように感じます」
「抜け殻……？」
「あの彼女は、私の『石化の魔眼（キュベレイ）』の影響を一切受け付けていませんでした。いえ、あの様子を見るに、それ自体に驚きはないのですが……それ以前に、今の彼女からは血の気配をまるで感じません」
「え……？」
ライダーがそう告げたのとほぼ同時に、前触れもなく彼女の身体がドロドロに溶け落ちていく。比喩ではなく、全身が急に液体と化したような不自然さで。
「ひっ、……え？」
「や、やったのか……？」
兄さんの声。それはフラグだからやめて欲しい、と思うより先に、まるで出来の悪い映画のＣＧのような現実味のない光景が、逆に異様な不安感を煽る。
まさかこれで終わるはずがないという予感が、悪寒が。これっぽっちも湧かないその実感が私を脅かす。震えが止まらない。歯がガタガタして噛み合わない。確かに、彼女は今、目の前でその器を失ったというのに――
「……ああ、終わりだ。マスター（俺）にはわかる。ランサーは今、逝っ

た。結局、俺は何も――」
「……そうか」
（……え？）
「あ――」
だから、直ぐ側で行われたやりとりにもすぐには実感が湧かなくて、それでも確かに先輩が告げたその言葉にようやく力が緩み、がくんと体勢と共に気が抜ける。
そうだ。考えてみれば先輩に聞けばそれで良かったのだ。先輩の手に残された令呪。つまり彼がランサーのマスターであることは明白であり、ならば当然、彼女が消滅したか否かをその繋がりから否応なしに理解できる。それこそ、かつての私のように。
配慮がどうとか、遠慮がどうとか関係なく、そんなことさえ私は頭から抜け落ちていた。何がなんだかわからなくても、それだけさっきのアレ――否、彼女が強烈だったのもあるが、今となっては、それも、

「――娘。貴様は先刻、我（オレ）に対し、アレを何だと訊ねたな」

鋭い声が静寂を破る。冷たい視線が私を射抜く。それは今にも気が抜けきって崩れ落ちそうな私を激するように、あまりに眩く、気高い言葉。
当然の返答にびくりと身体を震わせる私に対し、黄金の英雄は私とは対照的に堂々と、なおも不安に怯える私を笑い飛ばすように続けた。
「始めに言った通りだ――アレはこの地に巣食う呪いそのもの。故に、その清算は貴様らが為さねばならん」
「――！」
（な――!?）
――どくん、と。
まるでタイミングを見計らったように洞窟が鳴動し、霧散したはず

の、否、未だ漂ったままだった瘴気が、悪意が、呪いが、彼女の残骸である泥に取り込まれ、徐々に一つの形を成す。
輪郭が形成されるにつれ、それまで抱いていた漫然とした不安が、恐怖が、絶望が這い上がる。それは、どこまでも暗く深い底無しの沼のように。
「気張れよ雑種。アレこそが、あの小娘にとって最大の〝悪〟――人の業が生み出した災厄の獣。あやつが分かり易い形に纏めた、貴様らが積み上げた負積だ。
なればこそ、貴様らがこの地の管理人を名乗るなら、見事、アレを己が全霊を以て打倒してみせよ」
黄金の英雄は宣告する。その言葉はまさしく英雄としての理論であり――同時にそれは、魔術師（負債者）である我々にとって、あまりに受け入れ難い最後通牒でもあった。

優雅に歌え、かの聖誕を・Ａ＋

――気づいた時には、何もない地平へと立たされていた。

「……？」

辺り一面は、一筋の光さえもない暗闇。いつか授業か何かで一度だけ訪れたことがある小学校の暗室も、この光景と比較すれば白夜に匹敵することだろう。

何もない。上も下も、見渡す限りが闇の中に包まれている。しかし実際に光が無いのかと言えばそれも否で、そんな空間の中にいて俺は、どういうわけか自身の手の指先からそこにある毛穴まで、しっかりはっきりと認識することができていた。

画用紙に描かれた絵の上に乗せられた人形のように、テレビ画面にマジックで書いた落書きのように。確かにその場所に俺はいるはずなのにそこには居ない。一歩引いた視界で俯瞰するように。そう。それはまさしくこの場所との隔絶であり、決定的なまでの拒絶であった。

異様な感覚に戸惑う俺に、どこからか響く声が、あまりに聞き覚えのある幼い言葉が、いないはずの彼女が、当たり前のように現れて。それはいつかの再現（初対面の時）のごとく、どこからともなく、訳知り顔で、相変わらず唐突に、いつものように非常識な言葉を紡ぐ。

「――凄まじい違和感と嫌悪感を感じるやもしれませんが、まさかここに適応させるわけにもいかないのでご容赦ください」

「ランサー……？」

「はい。久しぶり、というほどではありませんね。どうして、という疑問はさておき、先に結論を申し上げますと、貴方が今いるこの場所は、ずばり冬木の聖杯の内部です」

「……!?」

聖杯の内部。端的に告げられたその単語にぎょっとする。流石の俺でも、これまでの経験から、既にこの地に眠っていた聖杯とやらがろくでもないものだろうことは察している。経緯はさておき俺はその中に居るのだと告げられた。動揺するのも無理はない。

「ここでの居心地は、すなわちこの場所と貴方の親和性の程度を示しています。不快に思う、というのは、まだ貴方が手遅れでないという証明。でありばこそ、一刻も早くここから脱出すべき――――なのですが、そうもいかないのが現状です」
「……」
　黙り込む。そう、考えるまでもないこと。ここに俺がいる経緯はとにかく、どう見てもこの空間はそうやすやすと脱出可能な場所には見えない。既に消滅したはずの――――曰く、聖杯の燃料にされたはずのランサーがここにいる。それはつまり、俺も似たような状況下に陥っているか、あるいはこれ自体がただの夢か、あるいは、
「……覚えていない？　　そんなはずは、って、ああ――――思い出したくないのね。あの女の誘惑は精神を犯す。だからこそ、彼女は人類悪として成り下がったのだから」
「……」
（……？）
　掠める違和感。話の内容も理解ができないが、理解させるつもりもない呟きではあるのだろうが、それ以上に。あまりにらしくない彼女の口調に戸惑う。
（いや、違う。そうだ、あの時も――）
　忘れるはずもない、彼女の心象風景。人類史に刻まれたジャンヌダルクの末路をあっさりと切り裂いて現れた黄金の男。あの男に対峙したその時、彼女の様子は明らかにおかしかった。
　それに加えて、今の彼女の様子。背格好そのものは先の固有結界の内で見かけたものと相違無いようだが、よくよく見れば衣装が全体的に黒く染まっている。そもそも、どうして俺はこんな暗闇の中で彼女を視認できるのか。何もかもがわからないまま、そんな俺を敢えて突き放すように、一切の説明も何もないまま、何事もなかったかのように、彼女はいつもの口調で語り始める。
「ひとまず、貴方がここに来た経緯は一旦置いておきます。何よりも私が貴方に伝えるべきなのは、これから貴方はどうすべきかという一点」

「どうすべきか……？」
「ええ。……私はこれから、貴方にとても残酷なことを言います。お願いします。無視してください。聞き流してください。目を背けてください。逃げてください。しかし、これは、貴方にしかできないことです」
「……」
　そう告げて、たっぷりと間を開け、それでもやや躊躇うような仕草をしてから彼女はかぶりを振って、
「まずは前提として、貴方がどこまで覚えているか……あの泥から、私じゃない女性が現れたのは覚えていますか？」
「……覚えてる。瘴気に塗れて風貌はハッキリと見えなかったけど、あれは確かにランサーとは別人だった」
「それだけ覚えているなら充分です。――彼女の名は殺生院キアラ。我がうたかたの夢より迷い出た悪夢。そして同時に、今後貴方の人生において最大のトラウマとなる人物です」
「……。……」
（……え？）
　目を見開き、ランサーを改めて見返す。その表情は真剣そのもので、一欠片の遊びも残されてはいない。衝撃的な発言、しかしその実感は薄い。当然だ、俺はまだ、この期に及んで彼女が何を言っているのかさえ今ひとつ理解できていないのだから。
「未来の貴方は、悪である彼女を殺すために無辜の民に手をかけた――そう聞き及んでいます。尤も、私も単純な未来から訪れたわけではなく、遠坂さんの仰っていた第二魔法の件にもあるように、未来とはそれ一本で決まるものでもなし、あくまで可能性の一つではありますが、それに、ええと、」
　それからランサーは矢継ぎ早に、おそらく自分の思いつく限りの理屈と根拠、クオンタムがどうだのサーヴァントシステムだの魔術的な要素も含めて語り続け、しかし芳しくない反応しかできない俺に、ある程度話したところで埒があかないと判断したのか、かなり強引に「とにかく」と区切りを入れて、

「脱落したサーヴァントは例外なく聖杯に取り込まれる。私は脱落の直前、そのシステムを利用して聖杯に干渉し、内部に溜まった毒を排出しようとしました。毒を取り出し、器を洗浄して再発しないようシステムにいくらかのプロテクトを仕込む。その試み自体はまあ成功したと言っていいでしょう。我ながらこれ以上はないと断言できるような、単純に目的だけを達成するならば完璧な仕事を私は熟しました。ですが、それがいけなかった」

「それは……？」

「作業が完璧過ぎたのです。具体的には、私が霊基の中、固有結界の奥底に隠した聖杯の毒を書き換えた聖杯に感知され、座に還ることそれ自体を聖杯に弾かれました。これがサーヴァントシステムと妙な干渉を起こし、私と入れ替わる形で泥そのものをサーヴァントとして現界させるに至った。

――つまり、まあ、要するに。あれは私の代理のサーヴァントということになります」

「……代理」

「そう。そしてご存知の通り、私には自身の代理のサーヴァントを座から呼び出せるようなスキル及び宝具を所持していない。否、正確には一つ、辛うじてそうでっち上げることが出来なくもないスキルを私は保有していました」

それがランサーの持つユニークスキル、うたかたの夢。ランサーの持つスキルの中でも特異極まる、ランサーの存在そのものの根幹とも言えるモノ。現実を虚構に、虚構を現実に。妄想を実現する技能。曖昧かつ不確定であるがゆえに、無限の可能性を秘めたスキル。

「姿がああなってしまった理由はいくつか推測はできますが、おそらくは大した理由はなく単純にあの人が私にとっての、あるいはマスターにとっての悪を具現化したような人型であると言うだけで、肝心の人格や宝具も再現し切れてはいないので、それ自体はまあいいのですけど」

しかし、あの泥が特級の呪詛であることには変わりなく、なまじ外観だけ中途半端に宝具を再現している分、本来とは別の意味で拙い。

と彼女は言う。
『周囲の生物を無差別に取り込む』。言ってしまえばアレの能力はそれだけのこと。しかし、忘れてはならないのが、アレは聖杯の泥から生まれた存在であるということです。触れただけで侵食される呪詛に、既存の魔術とはまるでアプローチが異なる電脳術式（コードキャスト）をベースとした宝具は控えめに言ってマズいです。初見殺しであるというなら、これに勝るものはそうそうありません」
「――……」
「それでも当然のように無効化していた王様と、初見で対応したメディアさんは流石だとは思いますが、それ以外はちょっと……ですかね。サーヴァントは元より聖杯から召喚されているので取り込まれた段階でアウトですし、それでもどうにかマスターである士郎さんは辛うじて保護できたんですけど、だからこそ、こうして私は――」
「……」
（何を……）
何を、言っているんだろう。彼女は俺に、何をさせたいのだろう。
奔流の如き情報の雨。専門用語がふんだんに盛り込まれた長文。しかし、俺にはわからない。俺には、彼女が何を言っているのか、何が言いたいのかが理解できない。
（……）
ただ、彼女の生み出した悪夢は、聖杯に溜まった毒は、この地に秘められた呪詛は、もはや彼女の妄想の域には収まり切らない脅威であり、最早どうにもならないようなものであるのはなんとなくわかる。だからこそ解せない。そんなものを相手に、彼女から直々に戦力外通告をされた俺が、何をできると言うのだろうか――
（……？）
握り締めようとした拳が、悴んだように力が入らない。それを疑問に思うより先に、ランサーは俺に語りかける。
「――士郎さん？」
「……！」
びくり、身体が震える。どこか朦朧げだった意識が引き戻される。

何だ。何を言われるんだ。俺に何が出来るんだ。彼女は俺に、何をさせるつもりだ。いや、違う。俺は――
（俺は、何がしたいんだ……？）
　先程から、身体の震えが止まらない。寒い、暗い、気持ち悪い。示される道は明白なのに、吐き気に近い違和感がそれを拒む。なんだ、これは、こんなことは、今まで。いや、でも。
「……」
　気づいた時には、ランサーに無言で見据えられていた。だが、そんな測るような視線さえ今の俺には気にならない。何が起きた。俺は一体、なぜ、どうしてこんなにも、ヘラクレスと相対した時でさえ、これほどでは――
「……英雄王ギルガメッシュは、決して人間の味方じゃない」
「……？」
「彼ならば、確かにあの泥を完膚なきまでにこの地から消し去ることも可能でしょう。いえ、それどころか、あの状態の聖杯を普通に使用して、その上であそこにいた全員の望みを叶えることだってできるかもしれない。でも、彼は決してそれをしない」
　何故なら。彼は正しく王であり、暴君であり、まさしく人類の裁定者足る偉大なる人物。しかし、彼は体裁として人間であっても、その精神性は神に近い。むしろ現代の価値観に照らし合わせれば、彼は犯罪者とまでは言わないが、間違いなく不良や悪い大人とかそう言ったカテゴリに分類される。
　でも、それでも。
「そう、それでも。それでも彼は原初の英雄として神話に語られ、数多の信仰によってその存在を認められている。それは何故か。わかりますか。衛宮さん。エミヤシロウさん。正義の味方さん」
「……」
　奇妙なイントネーションで、何を揶揄するようにランサーは詰め寄る。
　だが、分からない。答えられない。質問が抽象的すぎるのもそうだが、彼女がどんな回答を求めているのかが見当も付かない。

「何故なら、英雄とは――」
「……」
いや、分かるのだ。否、普通は分かるはずなのだ。その答えは。仮に間違っていたとして、ここで俺は声高に自分の意見を主張するべきなのだ。
だって、何故なら、それは彼が英雄となるために何をしたかと言う話であって、
それはすなわち、俺の人生の目標と言っても過言ではないのだから。
「英雄とは、正義の味方とは単なる結果論。自身がそう在るのではなく、他人が勝手に称するもの。
故に、『目指す』ことがそもそもの誤り。だからこそ、貴方には私のような偽物（ハリボテ）の英霊が相応しい」
「……！」
何も答えられなかった俺に、感動もドラマもなく、ただ事実としてあっさりと彼女はその結論を語り、しかし付け加えられた言葉があまりに異様で、ハリボテなどと、彼女が誰かをそのように表現することが信じられなくて、いつの間にか下がっていた視線を上げると、彼女は、
「魔術とは縁。貴方がこの私を呼んだことは、決してただの偶然ではない」
それはいつかセイバーが告げた言葉。あの固有結界の中、状況と沈黙に耐え切れなかった俺が切り出した世間話の一つ。大半の魔術は繋がりを重要視する。ならば当然、召喚術式であるこの聖杯戦争もその例に漏れることはない。
「我が名はジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリィ。聖杯の力で創り上げたジャンヌ・ダルクの別側面（オルタナティブ）を非常識な手段でリリィ化し、その上で英霊足り得る霊基を補強しでっち上げた英雄のまがいもの――そして、」
「……!?」
突如として、ランサーの姿がぶれる。ブラウン管の映りが悪くなっ

たかのように、闇に紛れて見えなくなる。
　現実味がない、と言えば今の現状こそがそうなのだが、まさかカメラが切り替わったように目の前の人物が入れ替わるなんて、一体誰が予想できようか――。
「それは即ち、それこそが貴様の本質だ。衛宮士郎」
「お前は――」
　現れた人物――厳格な雰囲気で語りかけてきた人物だが、一瞬、疑問符がよぎってしまったのも無理はない。
　いや、むしろ最初は「誰だろう」とすら思ってしまった。流石にその特徴的な姿を見れば否応なく思い出すが、何故ここで彼が何の関わりもないだろう俺の前に現れる。
　思い出すと言っても俺はこの男の名前も知らない。アーチャー、と呼ばれていたが、その呼称が正しいのかすら分からない。会話をしたことがあったのかも怪しい。
　――赤い外套の大男、アーチャー。この聖杯戦争の参加者の一人であり、遠坂凛のサーヴァントであった彼は、当たり前のようにそこに佇んでいた。
「――何のことはない。この場所が聖杯の内部、というのは彼女も言っていたことだろう。ならば、脱落したサーヴァントがここに集うは道理。例外は貴様だ。サーヴァントではない貴様がこの場で意識を保てるのは、貴様がランサーのマスターであるからに他ならない」
「そう、か……」
　いや待て。ならこの男、さっきの会話を聞いていたのか。しかもその上でこんなタイミングで平然と話に混ざってきたのか。なんて図々しい奴なんだ。……いや、そんなことはどうでもいい。重要なのは、どうして彼がここで出張るのかという一点。
　同盟者ということで曲がりなりにも戦友と言っていい彼だが、言ったらアレだがそれでも彼と俺との関係性は他人に近い。なのに、何故？
「……私にも、お前のような時期があった」
「……？」

「己が理想に燃えていた。目に見える全てを救うのだと、この世の悪を駆逐するのだと息巻いて、生涯を戦場に置き、紛争地域を我武者羅に駆け回った」

「――」

いきなり何を――という当然の疑問は、不思議と口から出ることは無かった。唐突な独白に、俺は口を挟むことが出来ずにいた。それは、俺自身を指して告げられた言葉だからだろうか、彼の寂しそうな表情を見てしまったからだろうか。……俺には、分からない。何も。

「しかし、その結果は悲惨なものだ。無心と言えば聞こえはいいが、あの場において心身を賭した奉仕は、その姿は傍目には異様でしかない。怪しまれ、訝しまれ、疑われ、気味悪がられ、ついには助けた当人からも拒絶されるようになった。最初は抱いたはずの『何故』『どうして』という疑問も、それでも、と突き進むうちにいつしか抱かなくなっていた。私は……俺は、何も分かっちゃいなかった」

「……！」

その言葉に、吐き捨てられたその諦観に、思わず彼の顔を見上げる。が、いつのまにか、彼の表情そのものが認識出来なくなっていたことに今更ながら気づき目を瞬かせる。

否、そもそもがこの空間で互いに面識が成立すること自体おかしなことなのだ。この空間がどんな理屈で成り立っているのかはさっぱりだが、拒絶されたら認識できなくなるというのは特段おかしな因果関係ではない。しかし。

「……」

何故だろうか。言葉が出ない。いや、そもそも俺は何を過剰に反応していたのか。こいつが突然意味不明な独り言を漏らしたところで、それが俺に何の関係がある。

「正義の味方が客観に依るものならば、私の結果は既に私がどうこうできるものではない。だが……いや、そうだ。それは無論、貴様自身にも当て嵌まる。故に。

――衛宮士郎。もしも貴様が、それでも正義を志すなら、正義を

為すために動くのであれば、それに貴様の理念や信念を宿らせるな」
「……は？」
「なに、単なるお節介だ。従うも無視するも貴様の自由、そもそも最早私にできることなど何もない。ただ――――」
不意に視界にノイズが走る。目の錯覚かと袖で拭う。しかし、
「――ただ、そうですね。貴方、そのままでいるつもりなら、『正義の味方』どころか、単なる自殺志願者にしかなりませんよ」
「――――!?」
惚ける思考に畳み掛けるように、またも唐突に目の前の人物が入れ替わるのを間近で見てしまい、いよいよ頭がおかしくなりそうになる。
両眼を覆うバイザーに、長身で紫色の髪をしたボンテージの……確か彼女は、慎二のサーヴァントだったライダー……――――否、メデューサ、だったか。会話をしたのは多分これが初めてだが、怪物として語られる割に丁寧な口調の人なんだな、などと無意味な思考が脳裏によぎる。
「今、ここにいる私たちは、ランサーの夢によってどうにかカタチだけを保っている残滓のようなもの。それ故に、不躾ではありますが、貴方がたのこれまでのやり取りを僅かばかり覗かせて戴きました。……あの聖杯が、どういうものであるかも含めて」
「！」
「貴方はその片鱗を垣間見、その上でアレに立ち向かうと決めた。義憤、と言えば聞こえはいいですし、正直、私個人からの印象は中々ですが、しかし既にこの現状では、それは蛮勇とさえ呼べない状況まで陥っていますね」
「……」
「ですが」
またも目の前の人物。つまりライダーの姿がぶれる。が、今度は別人に変わることはなく、何故か上唇を舌舐めずりをしたライダーは、押し黙る俺を吟味するように、
「貴方はその過程を、これからの結果で覆すつもりのようで。であれ

ば、これ以上の言葉は無粋でしょう。あの子は怒りそうですが、仮に最善の過程を踏んでも、それが最良の結果になるかはまた別の話。逆に、過程が如何なるものであっても、結果さえ良ければ私の時代では許容されます」

メデューサが女神としてよりも怪物として語られるように、ヘラクレスが賢者よりかは勇者として語られるように、メディアが王女ではなく魔女として語られるように。

一人の殺害は犯罪者を生み、百万の殺害は英雄を生む。とある映画の一節であるが、それはつまり、如何なる事件もやり方次第で取り繕えるということ。

流石に英雄云々は飛躍しすぎではあるが、それでも仮に、通りすがりにこの状況を綺麗に治められる人物がいるとしたら、俺はその人物に土下座でもなんでも、それこそできることはなんだってするのだろう。それでもし、その人物が頷いたとする。

「……」

そうして、その場を治めた人物は周りから崇められる。しかし当然、そいつに信念や理念など欠片も無い。否、もしかするとその人物は、俺が支払う対価に釣られただけの俗人かもしれない。それでも、俺にとってのその誰かは英雄でしかないのだ。

（……結果、か）

たいへんよくがんばりました。は評価はされても見向きはされない。注目されても、価値が無ければ意味がない。そしてその結果が如何に立派なものであっても、後世の都合で容易く塗り変えられる。

なるほど。確かに正義の味方とは目指すようなものじゃない。そして、なろうとしてなるものでもない――そう、それこそ。それは、まるで。今の俺のように、逃れられない状況下で、否応なく……押し付けられる、ような――でも、それでは、何一つ、

（――）

――いや、そうか、そうだ。そうなら……なら、俺は、どんなに馬鹿なことを。いや、でも、それでも。

視界がぶれる。世界が揺れる。泡沫のように、揺蕩う波のように、

次々と言葉が浮かんでは消えていく、
「……ま、お前の葛藤なんてぶっちゃけどうでもいいけどさ。まだそれでも、なんて言うつもりなら、せめて間桐家の問題くらいはなんとかしてもらいたいね」
「慎二……？」
「貴方はいずれ、折れてしまうかもしれない。まだ聖杯そのものがどうにかなったわけじゃない。聖杯が汚染された理由も知らない。この地に潜む魔術師たちのことも理解していない。先輩や私の身体のことも何一つ分かってはいない」
「桜……！」
「私も私で色々と衝撃の真実を知って頭が痛いけど……まあ確かに、あの子が言う通り、衛宮くんは今すぐに逃げるべきでしょうね」
「遠坂……」
――でも、それでも？
最後にそんな問いかけが、既にここ数日で聴き慣れてしまった、あの舌足らずなソプラノ口調で再現される。
ジャンヌ・ダルク。15世紀におけるフランスの国民的英雄。しかし、1431年に行われた異端審問で有罪判決になり、「魔女」としての汚名を着せられ処刑された女性。
彼女の風評が改善されたのは、彼女が処刑されてから随分と後の話になる。故に、ここで俺が何をしたとして、魔術師だからと迫害されるのはむしろ当然のことだ。
正義の味方になるために、理念や信念など必要ない。その行いが善である理由さえない。ただそれが、大多数にとってその方が都合が良いから、そうでっち上げられるだけなのだ。
「――そう。だからこそ私のトナカイ（マスター）さんは、あれほどの偉業を成し遂げてなお、決して自身を誇ることはなかった。とはいえ、あの人の場合は他に理由があるような気もしますが、それでも。……それでも、あの人は決して、望んで世界を救ったわけではないのです」
今度は決して幻聴ではない、ランサーの声がはっきりと聞こえる。姿も見える。固有結界内で見た姿とも違う、出会った時のそのままの

姿。最初に話していたときには成長した姿だった気がするのだが、どうもここはランサーがスキルで聖杯の内部に創り上げた夢の世界のようなので、そのあたりの定義は曖昧なのだろう。
「この際、直接この戦争と関係あるかは置いておきまして、既に死者に絞っても１０人以上、キャスターさんの件も含めると１０００人近い被害者がこの街で発生しています。故に、貴方がこの案件をどう治めても貴方の評価が加害者の立場から覆ることはなく、関与を疑われた時点で、ますます貴方の夢は遠ざかる……」
だから貴方は、逃げるべきだ。それも、今すぐ。と続け、しかし。
――それでも？　という疑問は、敢えて彼女の口から紡がれる事はなかった。だが、確かに胸に響いた。ここが夢の中だからだろうか？
分からない。が、この決断が俺の人生を左右するだろうことは、否応無しに理解した。
（俺は――）
俺は、正義の味方になりたかった。俺にとっての魔術とは、そのための手段の一つに過ぎなかった。しかし、そもそも正義の味方になるためには魔術に関わるべきではなく、この戦争に首を突っ込んでもいけなかった。
――つまり。
――正義の定義が、あくまで結果論でしかないのなら。
――俺はもう既に、正義の味方だと認められることはないのだ。
（――――）
思考が白く染まる。今更ながらに実感した事実に、その衝撃に眩暈がする。
気づいていたはずだった。これまでも、それよりも前にも、それこ

そ爺さんが生きていた頃から、ずっと散々諭されていたのだ。気付かないはずはない。
　分かってはいた。分かってはいたのだ。ただ、目を逸らしていただけで。
「先程、あの泥のモデル……殺生院キアラと呼ばれた女性が、貴方のトラウマだと言う話をしましたね」
「……え？」
「アレは、逆です。あの人は、彼女の行いはきっと誰よりも『悪』であるのに、それが人の目にあまりにも綺麗に映るから、結果的にその行いを肯定されていた。しかし、貴方には、それが理解できなかった。貴方にとって、彼女は悪でしかなかった。
　――貴方にとって、彼女の行いは、あまりにも自分の理想とかけ離れていて目障りなものでしかなかった」
「それは、どういう――」
「今回も、この先も、貴方はいずれ、無数の『嫌なもの』を見る羽目になる。それは貴方に限らず誰しもに平等に訪れ、けれど貴方は、それを決して見過ごせない。
　たかがカルト教団のトップなんて、見て見ぬ振りをすればよかった。名前も顔も知らない人に、貴方がそうまでする理由はなかった。結果として、貴方は折れ、彼女を殺した罪から悪人として投獄された。貴方の正義は、彼女によって喰い荒らされた」
「――――!?」
「私は知っている。貴方の結末を、貴方の未来を知っている。だから私は嫌だった。貴方がこの戦争に参加することが。むしろ魔術に関わることすら嫌で、嫌で嫌で。でも、でも、でも」
　バキン、と不穏な破砕音が耳に届く。彼女が握っていたボロボロな旗、既に魔力の一欠片も感じられない旗、それでも頑なに廃棄しようとはせずにいた彼女の象徴が、彼女自身の膂力によって握り潰される。
「……でも、私は、その行いがあまりに眩いことを。素晴らしいことであると知っている。それがたとえ世間からどう思われても、その

行為は紛れもなく、それが貴方にとっての正義であったと知っている」
　そう告げ、何故か次いで取り出した黒い旗も続けざまに握り潰した彼女は、流石に絶句する他ない俺を尻目に、更に畳み掛けるように彼女が普段使いしている槍、クリスマスカラーである赤と緑のリボンが非常に特徴的な槍を取り出す。
　まさかそれも破壊するつもりでは、と内心戦々恐々する俺だが、今度は強く握り締めるだけで何をするわけでもない。それでも人外の膂力からか、持ち手の部分が僅かに歪んでいるような気がする。
「最後に、ここまで聞いて、まだ貴方が折れていないなら、あるいはもっと単純にこの街を見捨てられないと思うのであれば、ならばせめてその命だけは、我が身を賭して守護いたしましょう」
　それでも、内心の激情を胸に秘め、彼女は柔らかくにっこりと微笑む。その姿は、どれほどチグハグな姿をしていても、如何に年齢が不釣り合いでも、こんな暗黒の世界にいてもなお。彼女が冠する肩書のごとく美しく。
「ただ、それが叶うのは今回だけです。貴方が今後、それでも、と突き進むつもりでしたら、命の保証はもちろんありません。いえ、むしろ今回の件ですら、命の保証はできないと言っていいでしょう。一応、貴方は私のマスターであり、アレが私の代理である以上勝てるはず……ですが、いや、私が脱落したはずなのに令呪が遺されているのはつまりそういうことなんですが、ええと、あれ？　そもそも脱落しても令呪は遺される？　え、マジですか。ふむぅ、再契約……なるほど。ですがまあ、多分、きっと大丈夫でしょう。ええ、私の感覚ではまだ……ですので、ええ、９９．９％勝ちます。勝たせますので、はい」
「……」
　そして、最後に全てを台無しにするあたり、あくまで彼女がハリボテでしかないことを、俺は深く実感するのだった。

☆☆☆

『聖杯の中、と申しましても、この空間は士郎さんが想像するようなものは少し異なりまして――』
目を覚ますと同時に、それまで身体が無意識のうちに支えていたであろう姿勢に妙な力が加わったのか、体勢を崩してよろける。ランサーが言っていたように、どこからか弾き出されたような、いわゆる反動の類は一切見受けられず、本当にさっきまでのあれが夢であったかの如く覚醒する。
『あと2、3年もすると、クラウドと呼ばれるネットワークシステムが一般家庭にも普及するようになります。ざっくりと当て嵌めるとこの場合の共有サーバーが聖杯、個々の意識がスマ、もとい、携帯端末と言ったところでしょうか。ネットの回線さえ繋げてない士郎さんにはちょっとピンと来ないかもしれませんが、まあ、とにかく、要はここにいる士郎さんは魂だけで、肉体は現実に取り残されたままであるということです』
「……！」
「いきなり覚醒した……？　って、ちょっ――アナタ、何を……!?」
幸いにも、倒れた方向は真正面。震脚の要領で足を深く大地に踏み込み、脇目も振らず正面へ駆け出す。
その時、誰かの慌てた声が聞こえた気がしたが、意図して無視する。震えが止まらない。恐ろしくて堪らない。文字通り、全身を震い立たせでもしなければ、立つことすらもままならないほどに。
アレを視認したのはまだ2回目。アレが現れて即座に呑まれたのと、先程方向だけを確認するための一瞬。なのにどうしてか目を合わせることさえ叶わず、姿を視界に入れることさえ魂の奥底から拒絶している。つまり、やはり、ランサーの言葉は、彼女が俺のトラウマだという話は真実なのだろう。
「……」
『なら、接続さえどうにかすれば、とお思いかもしれませんが、それはそれで問題があります。というのも、貴方の魂は既に聖杯に取り込ま

れました。池に垂らしたワインの一滴を掬えないように、貴方の魂もこの聖杯に溶け込んでいる――――』

魔術は繋がりを重視する。

金属の持つ性質を抽出して照らし合わせることで別の金属へ置換したり、特定の所作を道具や動物に結び付けて誰かに呪いを掛けたり、地形や状況を逸話に見立てて何かしらを呼び出したり、友達の友達を6度重ねれば世界中の人に巡り会うように、時にその繋がりは、予想もつかないところでブレイクスルーを引き起こすこともある。

『ですが幸いにも、聖杯に取り込まれたということは、言い換えると、聖杯に接続しているということ。むしろ状態としては接続の方が適切な呼び方ですし、それはすなわち座にも干渉しているということです。ですので』

しかし当然、奇跡を起こすならばそれ相応の理由がいる。例えばこの聖杯戦争のように、何をどうすれば過去の英雄を呼び出したりできるのか、という無理難題も、ランサー曰く、何でも地球の防衛機能を模したものであるらしい。

『――これから私は、貴方の精神を残された貴方の身体に召喚します。貴方もご存知のように、聖杯にはそのための機能がある。そして貴方には、紛れもなく英雄としての資格がある。ああ、ご安心ください。どういう意味かはすぐにわかります。否応無しに、貴方を自身の因果に括らせてもらいます』

「……っ、」

因果応報、という言葉はあるが、これはかなり珍しい例だろう。見覚えのない光景が脳裏に過ぎる。聞き覚えのない罵倒が耳に響く。あるはずのない視線が気に障る。

多分、今、立ち止まってしまったら。この状態に馴染んでしまったら。俺はもう、そこから立ち上がることができなくなる。未来の俺は、失敗した俺も、この重圧に耐えられなかったのだろうか。ただ口だけの、何の経験も持たない俺には、それさえも理解することはできない。

『残酷なことを言いますが、今の貴方が彼女の前に飛び出したところ

で何の役にも立ちません。貴方は立場上、彼女に対する鬼札ではありますが、そもそもサーヴァントを相手にただの人間が一矢報いるなどと烏滸がましい。それは貴方が一番良く理解していると思います』

「投影（トレース・オン）、開始――」

激痛。

日頃の鍛錬の数十倍では利かない痛み、苦痛。遠坂に窘められ、是正された魔術回路が燃え上がるように熱くなる。血液が沸騰する。視界が赤く染まる。未だ震える足と合わせて転びそうになる。

（っ、と――）

よろめく足。咄嗟に進行方向から右側に一歩分ズレる形になるが、どうにか転ばずに堪える。直後、頬を掠めるようにして左側に黒いナニカが着弾する。冷や汗が湯水の如く流れ出る。確認する余裕はない。が、これが無意識によるものであるならば、俺の身体に何が起こっているというのか。

『これまでも、これからも。魔術なんて可能なら関わるべきじゃない。ですがそれでも。それでも、貴方が「それでも」と言うのなら。そんなんじゃダメだと、より良い未来を想うなら』

「――あ、ぁぁぁぁぁぁアアアア!!!」

無我夢中で駆ける。時折、迎撃で飛来する黒いナニカは不思議と命中することはない。そのことに内心で慄いている暇もなく、突き動かされるように、急かされるように動く身体は、これまでとは比較にもならない、かつてない精度で投影した槍を構えて――

『この武器を――我が宝具を。私の夢を、理想を、妄想を。現実を塗り潰すその力を。喜んで、貴方に預けます――』

ぎゅっと目を瞑る。辛い現実から逃れるために。優しい幻想へ逃げるために。現実を虚構に、虚構を現実に。世にも恐ろしい怪物から、大切な誰かを救うために。だから、俺は、こんな巫山戯た結果を否定する。

「――『優雅に歌え、かの聖誕を（ラ・グラス・フィーユ・ノエル）』!!」

俺は徹底して相手を視認せずにいた。故に、突き出した槍は当然のように空を裂く。

しかし、この宝具に命中の概念はない。威力の定義もない。範囲という括りもない。通じるか、通じないかの２択。それは正しく矛盾の否定、だからこそ、その強度は、どちらがより強く未来（幻想）を望めるかという一点のみに左右される。

（どれほど空虚でも、既に破綻していても、その力が及ばなくても――）

空間に溶け込んだ槍を起点に、世界が光に包まれる。それが単なる眩暈なのか、宝具の効果によるものなのかも理解できない。確かめようにも、酷使し過ぎて動かない足も、焼けるように熱い回路も、どうも脱臼したらしい両手では触れることさえ叶わない。

なんて無様。叩き込まれた経験では、如何にフィルターを通してもこの程度児戯だろうに、どこまで身の程知らずなんだ、俺は。でも、それでも。

それでも、そんな俺であっても。いや、誰であろうとも、それでも。

（それでも、ただ夢を見るくらいなら、それは誰だって自由だ――なあ、そうだろう？　ジャンヌ・ダルク・オルタ、サン、タ……）

（……やっぱり締まらないな、この真名……）

いや、俺だって、決められるところではピシャリと締めたいんだが。

でも、だからこそ、彼女が俺に選ばれたと考えると、それもまた悪くないような気はする。きっと気の迷いだろう。どうしてこうなった。一体何が悪かったのか。……多分、おそらく、最初から、なんだろうな、うん。

薄れ行く意識の中、最後に浮かんだものは、そんなランサーが真名を告げた時に見せた、困ったような微笑みだった。

霊基復元・ＥＸ

「……ぅ、くっ……」

意識が覚醒する。何よりもまずそのことに驚く。

視界は朦朧としていて、軽く拳を握るとそれだけで激痛が走る。どうやら今はうつ伏せの状態のようだが、立ち上がれる気がまるでしない。どころか何もしなくても全身がとても痛い。間違っても霊基が万全だとは言えないが、それが逆に先の出来事がゆめまぼろしの類ではないことを証明している。

一体、何が起きたらこのような事態に陥るのか。実のところ、推測はできる。できるが、それだけだ。私が予想するそれはただの願望でしかなく、そんな都合の良い話などあるはずはない。

だが、しかし。まさか、まさかまさか本当にそれが真実であるのなら、私は何を押してでも、為さねばならないことがある。

「あ、っ、ぐっ、ぅ……」

立てない。痛みもそうだが、そもそもそういう次元の話ではなく力むための力が入らない。実はこの体勢でいるのも割と辛いのに寝返りさえ打てる気がしない。

でも、不幸中の幸いか、痛みで意識ははっきりしている。意識さえ無事なら、夢を見ることができる。そうであるなら、私はまだ戦える。

「……ふぅ」

身体を組み替え、ムクッと立ち上がり、パンパンと服に付いた砂を払う。……手に付いた血によって余計に服が汚れてしまった。痛みや負担を無視出来るのは良いことだけど、どうにも夢という仕様上実感が薄くなるというか、触覚が鈍るのだけは勘弁してほしい。槍がすっぽ抜ける可能性があるから。

「貴女、どうして……」

「……遠坂さん？　ああ――無事で、何よりです」

そうこうしていると、不意に投げかけられた声。それに反応すれば、そこにいたのは目を見開いてこちらを見る遠坂さんの姿。見たところ外傷はなく、私の記憶が正しければ彼女もあの聖杯の中に飲まれ

ていたと思うのだが、ここにいるということはつまりそういうことなのだろうか。なら、なおさら引くわけにはいかない。
「いえ、そうじゃなくて……さっきまであんな、そんな有様で、どうやって突然……」
「……」
しどろもどろな発言。……見られていたのか。そんな余裕は無かったとは言え、傍目にはどう足掻いても異様な光景にしか映らないのでなるべく見せたくはなかったのだが。
「……そういえばアンタ、バーサーカーとの戦いの後も、いつのまにか外観だけはいくらかマシになっていたわね」
ぎくり。
（そこに気づきましたか……）
そう、よく考えなくても、あの時の私の回復能力は宝具によるそれを遥かに凌駕している。
あの時はまだ私の真名も明かしておらず、それ故に『そういう宝具』を持っているで誤魔化せたのだが、いや、実際にそういう回復宝具は保有していたのだがあれはせいぜいが止血ぐらいで、ってそれはともかく。というか今になってそんなことを掘り出されても困る。今更そんな追求をして何のつもりなのだ。
「……何をするつもり？」
「……」
核心を突く一言。やや唐突な話題にも思えるが、まどろっこしいのが苦手な彼女らしくはある。現状、万が一にも妨害の可能性を鑑みるなら、私はそれに答える筋合いはないしその余裕もない。しかしその質問は、どうしてか私に、はぐらかすことをとても躊躇わせた。
「私がここにいるということは、つまり、聖杯が正常な動作を始めたということ――それは、すなわち」
まだ戦いは終わってはいない――そう告げ、彼女に背を向けて歩き出すと、驚くほどの力を以て肩を掴まれ無理やり振り向かされる。否、私がロクな抵抗も出来ずに為すがままとなる。
「くぁ、っ……」

「……ああ、キャスターの言ってた『スカスカ』ってのはそういう。あの時は鋼鉄かってくらい硬かったのに、今なら魔力無しでも握り潰せそうじゃない？」
「……」
あの時、とはライダーさんとの戦いの直後のことを言っているのだろうか。いや、そうでなくても、こうして直接触られてしまっては、明らかに感触がおかしいことには気付くだろう。
夢の本質とは、現実から逃避することにある。したがって、誰かの夢より生まれ出た私は、たとえ如何なる状況下においても、外観だけは綺麗に取り繕うことができる。……そのためのリソースをどこから持って来ているのかは、もはや言う必要もないだろう。
「……」
周囲を見渡せば、そこはまさに死屍累々と表現すべき状況。あたり一面が瘴気に染まり、強大な力を持つサーヴァントの半数が消滅し、そのマスターであった魔術師も一様に倒れ伏している。例外は私と、キャスターさん、王様、そして――目の前の女性、遠坂凛。
「もう、いいでしょう？」
不意に告げられたのは、そんな一言。それは、何を指しての言葉なのか、どういった意図の台詞であるのか。
視線が重なる。ボヤけた視界の中、彼女の瞳の輝きだけが強調される。分からない。私には分からない。彼女が何を求めているのか理解できない。でも、それでも。
（この眼は、あの人と同じ――）
彼女の瞳に、私の知るあの人、底無しのお人好し、誰よりも優しい彼の姿が重なる。
「……」
彼女は言う。もう大丈夫だと。貴女の役目は終わったのだと。
柔らかな口調で、その胸の内の不安を押し殺しながら。大丈夫なはずはないのに、それこそ彼女は私に気遣う理由なんてないのに、それ以前に、今更彼女が何をしようともはや手遅れなのに、それでも。
それでも彼女は、気丈に微笑む。私の大好きな、あの優しい笑顔で。

ひとでなしの魔術師である彼女と、どう足掻いても人としての括りから外れない彼。性別から役職から何から何まで異なるはずなのに、根っこの部分でこれほどに酷似する。
（ああ――――）
これこそが、人間。押し寄せる矛盾、溢れ出る不条理をごちゃ混ぜにしてなおも足掻く。あまりに見苦しく、それ故に愛おしい。
最初から完全なる存在と望まれた私には、その姿はとても眩く、けれども非常に疎ましくて――――でも。だからこそ。
だからこそ私は、聖杯に。あの万能の願望器に。それを守りたいと願ったのだ。
「……心配せずとも、見ての通り、まだ私は槍を構えるだけの力は」
「嘘。なら、どうしてとっとと私を振り解かないのかしら？」
「……ええ、嘘です。虚言です。誤魔化しです。ですが、それは」
「それは衛宮くんのためこの街のため私のため。良かれと思って、だから見逃して欲しい。そんな理屈が通るとでも？」
真摯な瞳が私を射抜く。それがあまりに眩し過ぎて目を逸らしてしまう。
どれほど力量が隔絶していても、偽物の私に本物の輝きは放てない。そんなこと、わかり切っていたはずなのに。
「……どうして」
「ん？」
それは正しく愚問。思わずこぼしてしまった愚痴。問いた段階で納得する答えなど帰って来ないと明白にわかる質問。否、既に答えなど分かり切っているそれは、最早問いかけでさえない。
「どうして、こんな、私なんかに……」
「……あのね」
頭に手を当て、溜息を吐く。特に注目する理由もないはずのその自然な動作は、不思議と私の目を惹きつける。
「私が貴女にちょっかいかけて、困ることなんてないでしょう？」
「でも、それは論理的ではありません。合理性もありません。理屈にも合いません。感情としても、魔術師である貴女には……」

言い訳だ。分かっている。彼女がいわゆる一般的な魔術師とは違うことなんて。
「確かに、貴女の本質は嘘かもしれない。はっきり言って、私は未だに貴女が何を求めているのかも分かってない。でも、貴女が私達を想うその気持ちに、その行動に嘘はないでしょう？」
「……」
そして、その通り。彼女なら――――あの人なら、迷いなく告げるだろうそんな善性の台詞に、私は返す言葉もなく押し黙る。
もはや大勢は決した。否、既に分かっていた。巻き込むことが迷惑になるなんて、理屈ではない、そんなことよりも大切な信念が彼女の中にはあるのだから。
観念して、話し始める。実のところ、彼女が思う以上にこちらには余裕が残されていないのだ。
「一つだけ、この状況を打開できるかもしれない策はあります」
「へぇ……？」
「まず前提として、今の私はマスターの見るうたかたの夢であり、２０１５年の時点で、ヒトは眠るとき、レム睡眠ノンレム睡眠とは無関係に一晩に数回、断続的な夢を見ることが判明しています」
「……は？」
「とはいえ夢を見る具体的な時間、その長さについては未だ明かされていない部分も多く、それは一瞬とも１５分とも一時間前後とも寝てる間全てではないかとも言われていますが、私の場合はレム睡眠時における夢を採用していて、時間にして最長で約２０～３０分、これが今の私が存在できる時間になります」
「……。……意外と長いわね」
難しい顔で遠坂さんが呟く。それが最初の反応なのもどうなんだろうと思いつつも、私自身かなり唐突な話題転換をした自覚はあるのでそれに反応はせずに「ですが」と続けて、
「当然、夢が現実になることなんてあってはならない――であれば、それを引き起こすためには何らかの力がいる。そして、それは」
「……ああ。ただでさえ魔術師としては未熟な上に、今のぼろぼ

ろな衛宮くんじゃ最長の時間まで魔力が追っ付かないし、加えて貴女が衛宮くんの見る夢だってんなら私が肩代わりすることも出来ないって？」

「……はい」

がくりと項垂れて答える。認めたくはないのだが、ここを誤魔化してもどうしようもない。実際、勝算があって活動していたわけでもない。どちらかといえば強迫観念に近いだろうか。いや、もっと単純に、早くなんとかしないとという焦り、か。

「それで、打開策ってのは？」

「……」

遠坂さんが発言を促す。そう、ここまではただの前提。本題となるのはこの先の話だ。

「問題なのは、今の私が通常の契約状態とは異なること。ただサーヴァントを維持するだけなら今の彼にもできる。だったら、どうにかして今の私の状態を、元のサーヴァントのものに復元すればいい――」

――『霊基復元』

召喚反応――霊基グラフをデータとして保存できるカルデアならではの反則技。

聖杯の内部で私が士郎さんに対して行ったそれとは真逆、精神をそのままに肉体を再契約（再召喚）することで文字通りの復元を行う。

しかし、それには、そのためには。

「令呪三画――それが最低条件。その上で、霊基グラフの解析が可能――それこそ、あの汚染された状態の聖杯で正しく願いを叶えられるくらい、魔術についての造詣も深くなくてはならない」

「――！」

私達と出会う頃には、既に令呪を一画消費していた遠坂さん。魔術については言うまでもなく、あんな物を現代の魔術師に扱えるはずがない。

確かに策はある。いや、あった――しかし、それはあくまで机上の空論でしかない。

結局、全てに都合良く物事が進むことなんて、それこそ抑止力の影響でも受けていたのではないかと疑うあの人くらいのもので、そんなあの人でさえ取りこぼしたものは無数に存在する。
私はどうだろうか。運は良かったと思う。今はマスターに引き摺られてだいぶ下降しているが、生前（？）の私の幸運のランクはＡ＋＋。これはサーヴァントの中でも上澄みの上澄み、トップクラスの数値に該当し、私の他にはあのアルジュナさんくらいのもので、けれどそんな彼でさえ、むしろそれ以上の幸運を持つ彼ら彼女らとて数え切れないくらい取りこぼしたものはあるのだ。
「……離してください。もう、時間がありません」
「……」
気付けば肩の拘束は解けていた。そのまま肩に乗ったままの手を振り払って踵を返す。
そうだ。だからといって諦めるのは違う。間違っている。この状況を見過ごすわけにはいかない。ロジカルじゃないし、単なる意地、見栄の類だとは自覚しているけど。
でも、それでも、私にとっては譲れないことなのだ。

「……話が纏まったところ、悪いけど――」
「え――」
不意に、気怠げな声を掛けられる。どこか艶のある、大人の魅力に溢れたその声の主は、これ以上にないタイミングで、彼女が持つ肩書きのごとく、まるで御伽噺の魔女のように都合良くこう告げた。
「それは例えば、あのヘラクレスを一度殺すより簡単なことかしら？」

☆☆☆

その腕は、哀れな程に震えていた。
その目は、明らかに焦点が合っていなかった。
その槍は、もはや持ち上げることさえ叶わずにいた。
しかし、その足は、その歩みは、間違いなく我の方へと向いていた。
「……」
槍の先端が床に擦れる擦過音。がりがりと喧しいそれとはまた別に眉を顰める。
サーヴァント、アヴェンジャー。聖杯により生まれ出た偽りのサーヴァント、ジャンヌ・ダルク・オルタ。此奴は一見にして我とは無関係に思えるが、魔術とは縁。故にこの女がこの地に召喚されたのは、此奴が生まれた経緯からその関係を否定できない。
とはいえ、それがどうした、という話。例えどこかで奴と我とで関わりがあったとて、それは今の我とはまるで関係がない。むしろ我の財宝より派生した形態であるならば、首を垂れて感謝を告げるべきであろうに。
しかし現実に、この女はこんな無様な有様で、それでも外見だけは小綺麗に、敵意を以って我と対峙する。
その意は義憤――即ち、義理人情の類。肩書が示す身を焦がすような怨念も、張り裂けるような怨讐も、奴の歩みを止める理由にはなり得ない。まさに不可解。それ故に興味深い。
やがて我の眼前に立ち止まった女は言う。お前は邪魔だと。裁定者は現代には不要だと。臆することはなく、感情からではなく理性からそう告げる。
まあ――尤もな話。もはやこれほど神秘が薄れたこの時代、我のような超越者は疎まれるであろうことは容易に想像がつく。だが、
「それは、貴様が決めることではない」
「……ご尤もです」
回答を予想していたのだろう。引き摺っていた槍をこちらへ向け、
「では、いざ尋常に」などと戯言を吐かす此奴をじろじろと見つめる。
「……なんです？」
「いや、なに。我ながら随分と愉快な生き物を生み出したものだ、と

な」
一通り視たかぎり、どうも我の関与はごく一部らしいが、ここまで摩訶不思議なナマモノが生まれたというのならば貴重な霊薬を使った甲斐もあるというもの。武器を突き付けられている現状は不敬であるが、道化であれば小道具として剣や懐刀を扱うのはむしろ当然でもある。
くつくつと思わず含み笑いをすれば、只でさえ仏頂面をした道化がますます不機嫌になる。道化とは常にへらへら笑っているものであろうに、この程度の煽りで精神を乱すとは。
だが、感情的であることは恥ではない。我を排除する理由など、「気に入らないから」で事足りる。結局、此奴は小難しい理屈を盾にして、己が抱いた悪意を誤魔化そうとしているのだろう。
なんともまあ、人間のフリが上手いモノだ。言峰と並べたら、よほど此奴の方が人間らしいと評されるであろう。
「だが――不敬であるぞ、雑種。何の権利があって、我にソレを向けている」
「……ふふ。ああ、この感じ、懐かしいですね」
疾く失せよ――そう告げれば、雑種は不可解にも嬉しそうに微笑う。構えた槍を収めることもなく、むしろ無駄に戦意を滾らせて手に力を込める。
元より素直に従うとも思わなかったが、些か不愉快なその反応に少々面食らう。この雑種が我を知るのは視た通り。が、ここまではっきりと侮られれば腹も立つ。
（……）
しかし、それでも我は王として、少なくとも現時点で剣を抜くつもりはない。それはこの雑種も理解していることだろう。だからこそ、此奴は堂々と我に対峙する。
「――フン」
不機嫌を隠すことなく声に出し、まずは小手調べと宝物庫より比較的価値の低い宝剣を二振り投擲する。
「――ハァッ！」

――キキィン、と甲高い擦過音と共に、ほぼ同時のタイミングで我が財宝が地へと突き刺さる。半ば見えていた結果だが、実際に目にすると、これが存外――……

「……」

舌打ちを一つ。次いで４本、更に８本と同様に繰り返す。

弾く、躱す、逸す、落す。弾き逸し落し弾き躱し躱し切り裂き――弾き返す。

「……ハ」

こちらへと飛来した一振りの宝剣は、意識を向けるまでもなく地へ落ちる。攻撃の切れ目、最後の一振りを利用して行われたそれは無論、偶然による結果などではなく、明らかに狙ったモノ。

成果はどうあれ、明らかに対応が初見ではない。はっきり言えば、模擬戦とはいえ我と此奴が割と頻繁に戦っていたというのは眉唾物であったが、疲労困憊の状態でこれならば、にわかには信じ難いギル祭りとやらの経験も嘘ではなさそうである。

（……七つの人類悪、か。よもやここまで早く現れるとはな）

この聖杯戦争が何を模したものなのかは理解していた。模擬とはいえ儀式が成立したからには、近々それが必要になる事態に陥る可能性があることも。だが、それでも。

（……）

我は冠位のサーヴァントなどではない。故にそれが顕現する兆しは察すれど理解はできない。ありとあらゆるものを見通す眼も、人理焼却の影響やそも此奴の世界がこの世界と平行でないのも相俟ってはっきりとは見通せない。

だが、ビーストとは、人類悪とは本来、人類種そのものの自浄作用のようなものであり、現界した時点で到底抗えるようなものではない。

したがって、この女がそれを退けたというならば。

すなわちそれは、この女が、あるいはこの女が所属していた組織は、人理すら歪めかねない、極めて例外的な存在であるという証明である。

そう――それこそ。その有り様は、今の此奴のクラス同様、あまりに歪で。我の眼でさえも見通せないほどに。
「……」
（……よかろう。ならば）
剣を抜く。
その剣に銘は無い。大層な逸話も由来も持たない。ごく一般的な外観をした、ただ良く切れるだけの、悪く言えば凡庸な剣。
しかし――そうは言っても、この剣はこの我が自らの宝物庫に収めるに相応しいと認めたモノ。価値自体は数ある宝剣の平均に届くかも怪しいが、これは確かに我の剣に違いない。
そして、この剣を選んだのにも理由はない。たまたま取り出し易い位置にあって、気紛れでそれを掴んだだけのこと。決して、手心を加えようなどとは微塵も考えていない。
「――我が引導を渡してくれる」
「……！」
思えば、この思考自体が傲りであったのか、あるいは初めから、この女は勝利など求めてはいなかったのか。
限界を迎えていたアヴェンジャーは、振るった剣を避けることも叶わず、元より見えていた結果（勝利）を決定付ける一撃がアヴェンジャーの霊核を貫き――
「ああ――ほんとうに」
その瞬間。
精も根も尽き果てた女が、突き立てた剣に倒れ込みながら呟く。
同時に、まるで縋るように右手を両手で絡め取られる。流石に違和感を抱き咄嗟に身を引こうとするが、それを制するようなタイミングで、
「本当に、お優しいんですね――ギルガメッシュ王」
「何……？」
不可解な言葉。先程までの敵意は何処へやら、なんならそのまま

「ありがとう」とでも告げそうなほど柔らかい口調。その意を掴む間、こんな状況でもなければ気づかないくらい微かな力で、されどその意思だけは、我の腕を握り潰すかのように苛烈に、
「――『この世（アンリ・マユ）、全ての悪』」
「――……な」
一言。それが真名解放の言葉であると気づくも既に遅し。炉から火の粉が溢れ出すように、貫いた霊核から剣を通して黒いナニカが侵食し――我の意識は、そこで途絶えた。

☆☆☆

「……ねぇ、生きてる？」
恐る恐る、そう話し掛ける。大丈夫？と聞かなかったのは、どう見ても彼女が大丈夫ではないからだ。
『霊基復元』とやらによって、彼女の身体は修復された。しかし、そうは言っても、彼女がサーヴァントである限りそのポテンシャルは魔力に依存する。キャスターが行ったのは契約を正常にすることで、そもそも衛宮くんがあの有様では、いずれにしろ先は長くないとわかり切っていた。
でも、返事が返って来なかった場合のことは考えなかった。単なる希望的観測、あるいは甘えではあったが、それくらいは夢見てもいいだろう、と。
「もう、２度とあの人とは戦いません……」
しばらく待つと、こふ、という咳き込みと共に、やはりというか非常識なことに、割と余裕のありそうな声でランサーは呟く。
「……まあ、見るからに玉砕戦法だったしね」
その返答に、やや呆れながら私は答える。どうやったのかは見当も付かないが、直前の戦いで彼女が何をしたのかはわかる。すなわち、

サーヴァントに対する毒である聖杯の泥を、彼女の身体を通して直接ぶつける。それはもはや戦術として破綻している、手榴弾を持って特攻するのと大差ない愚行である。
「あの人はその気になれば過去でも未来でも何でも見えるらしいのですが、そのせいか、どうも彼は潔癖症のきらいがありまして……」
故に、見たくないものは見ない。聖杯の泥は、極まれば彼すら汚染しかねない猛毒だが、それさえも容易く退けるほど万能であればこそ、彼はそれを脅威としてではなく、あくまで穢れたモノとしか扱わない。だから正確には、なるべくなら見ようとしない。であれば、根底から汚染された私に対し、対応が僅かに遅れるのも無理はないだろう、と。
「……あとは、まあ、そうですね。あの人、は、女性の心理を覗くのは、無粋と思っている、みたいですし……あの人に限らず……普通は、私の、戦歴、なんかより――――経歴、とか。そういうのの方が、興味が、湧きそうですし……」
そこまで聞いて、しばし沈黙が場を支配する。見れば、既に彼女の四肢は大地を透過し始めている。魔力の都合かダメージの問題か、もはや現界を保てなくなっているのだろう。
「……どうやら、限界、みたいです。というより、実は今の姿も幻覚で、既に私はヒトの形を保てていません。そのことに、思うところはありますが……」
なんかさらっととんでもないことを暴露したランサーであったが、それ以上にある種の納得をする私。いや、だって、今の彼女はボロボロであるが、まさしく消滅寸前の状態だが、それよりもあんなものを扱っては、下手しなくてもあの金ぴか諸共融けてしまっておかしくなかったからである。
「色々ありましたが……とりあえずなんとかなりましたね」
「……そうね」
アンタはなんとかなってないでしょうに、とよほど突っ込みたかったが、敢えて同意する。ここで無粋な真似をする趣味はない。
「更に言えば、七人で行う聖杯戦争ですが、聖杯は七騎の魂を捧げなけ

れば完成しないという、その実態はどこまでも魔術師のための悪辣な儀式でした。とはいえ、キャスターさんくらいの技量と願いであれば、完成を待つ必要も、七騎分の魂も不要でしょう」
「……アンタがここでいなくなったら、アサシンはどうなるのよ」
「ああ……そうでした。それが、ありましたね。――――……困りました。何も対抗策がありません……」
「おい」
「ま、まあ、こればっかりは、アサシンさんが一枚上手だったと……ごめんなさい。後はキャスターさんにお任せします……」
「……思ってはいたんだけど、アンタはどうしてそんなキャスターを信頼しているのよ。アレ裏切りの魔女よ？」
　普通に私より信頼しているっぽいのが腹立たしい。付き合いの長さは隔絶しているとかそんなレベルじゃないのに、つーか今でも普通に敵なのに何故だろうか。
　そんな当然の発露に、彼女は如何にも予想外です、という顔をして、しばらく考え込んだ後に、
「……サーヴァント化の弊害ですかね。どうも生前の感覚が抜けず……だからメディアさんにも、アーチャーさんにも、マスターにもあんな態度で……」
「そうね。貴女にとってどうだか知らないけど、私からすればたかだか数回顔を合わせた程度の魔術師に身を預けるなんて、はっきり言って正気の沙汰ではないわ」
「メディア、さん――――」
「っ……！」
　唐突に割り込んできた声に思わず身構える。陰口に近いことを話していたこともあるだろう。もはや状況からしてキャスターは味方側のはずであるが、それでも魔術師の端くれとして、私よりも遥かに位の高い神代の魔術師を警戒するなと言うのが無理な話だ。
「メディアさん、ね。名乗った覚えはないはずなのに、貴女はそれを確信して言っている。確かにそれを否定はした覚えもないけれど、それは貴女を騙るためかもしれない。でも、違うのでしょう？」

「……そう、ですね。迂闊でした」
「そうそう、迂闊と言えば、ご懸念のアサシンのマスターはこの私よ。ただでさえ景品があのザマなのに、まさかこっちのルール違反を咎める気はないわよね？」
「……な」
　絶句する。キャスターが何かを企んでいる予感はしていたが、そこまでの横紙破りをしていたとは想像もしていなかった。どうりであれだけ簡単に重過ぎる契約を結ぶはずだ。いざとなれば生命線を暗殺できる手札を隠していたならば、あの従順な態度も頷ける。
　そして、今になってそれを明かしたということは、いや、それ以前に、今のランサーに急襲を防ぐ手立てはない。衛宮くんは言わずもがな、所詮は人間でしかない私だって不可能だし、さっきから何故か倒れ伏しているあのアインツベルンでさえ、神代の魔女が相手では荷が重いなんてものじゃないだろう。
「……時間もないようだし、本題よ。ここで貴女を出し抜くのは容易い。そもそも私が手を下すまでもなく実質的に勝者はこの私。景品の不具合も貴女が是正してくれたし、それ以前に私はあの状態の聖杯からでも願望器としての機能を引き出せる」
「……」
「けれど、この結果に漕ぎ着けたのは間違いなく貴女のお蔭。加えて私は貴女に一つの恩がある。そして、英霊が受肉を果たすのに、七騎分もの魂は必要ない――」
　だから、これは貴女の成果よ――そう告げて、キャスターは今まで隠していたのだろう令呪を手に浮かび上がらせて、あることを願う。その内容に驚く私を他所に、キャスターはランサーに問う。
「今、アサシンを自害させたわ――これで五騎分。これだけの容量があれば、万能とまではいかなくても、大抵の願いは叶えられる。
　願いなさい、ランサー。貴女もこんな戦争に参加したからには、譲れないものがあったのでしょう？」
「願、い――？」
　呆然とランサーは呟く。まるでその言葉の意味を理解していない

かのように。そんなはずはないのに、それだけ自分を擦り減らした少女は迷う。
「ああ、安心なさい。貴女はともかく、貴女が取り込んだその魂は超級のもの。おそらくはそれだけで受肉には十二分だわ」
「そう、ですか……」
無論、その言葉に安心したわけではないだろう。しかし、幻覚であろうと幾分か和らいだ表情を見せたランサーは、ぼそぼそと力の抜けた声を漏らす。

「――……そう、ですね。私の、願いは――」

やがて、ランサーは告げる。意地っ張りなこの子が秘めていた、こんな状況でもなければ吐露するはずもなかったであろう、その願いを。

エピローグ

サンタクロースを信じなくなったのは、果たしていつ頃のことだっただろう。

正確な時期は覚えていない。が、同年代の友人と比較しても相当早い段階であったように思う。そもそもそんなものに縁がある生活をしていなかったし、現実の重みがそれを許さなかったからだ。

両親……特に父親は当然ながらそんな催しには無縁だったし、母を含むそれ以外、つまり今まで関わった人間はほぼ例外なく悪い意味で現実的な人間だった。だからこそ、そんな幻想はいつしか忘我の彼方へと消え果ててしまったのかもしれない。

しかしまあ、そんなことはなんら珍しいことでもない。私のように特殊な家系に生まれずとも、そんな幻想は存在しないことは直ぐに実感する。現実的な話、そんな誰の得にもならない行為に耽る阿保が、この残酷な世界にいるはずもないからだ。

信じるものが救われず、情けは仇となって自らを襲い、好意は悪意によって食い破られる。そんな現実を、私はこの地の管理人として飽きるほど見てきた。

だから、今回のこれも、そのうちの一つ。単に対象が身内だというだけで、魔術師なんぞが世に蔓延る限りこんな悲劇はありふれたものでしかない。嘆くのは間違っている。憤るのは間違っている。何故なら私もそれと同じ、ロクデナシ（人間以下魔術師）のひとでなしなのだから。

「……とはいえ、そう簡単に解決したら苦労しないわよね」

漁夫の利を狙う、という、単純ながらも脅威である予想された展開は意外なことに訪れなかった。

これについてはそもそもその心配が懸念だった、なんてことは当然なく、おそらくは生き残ったのがよりにもよってキャスターであったからだと思われる。

この状況で襲撃をするとなると、必然としてキャスターの真名やそ

の実力も窺える状況下にあるということ。であれば現代の魔術師が、まさか間違ってもキャスター相手にどうにかできるはずもない。

「……」

あの時点で既に、その襲撃者（予定）の目星はついていた。仮に私が魔術師でなくても、あれだけ露骨に匂わされたら分からないはずがない。そして今、当然の流れとして、私はそれの対応に追われている。

いっそキャスターに丸投げするのも一つの手だったが、私はランサーと違ってキャスターをそこまで信用し切れなかった。それでもキャスターの力は破格なのでとりあえず対価を求められない程度のお願いはしてみたが、それで全てが解決するとは到底思えない。まあそれで何かが変われば御の字、といった感じで、結局は私の抱える問題なのだから、私がどうにかするのがスジである、と。

――あれから１０ヶ月。世間はもう、恋人たちがクリスマスに向けて準備を進めるような時期。それだけの時を経ても、私は問題を何一つ解決できずにいた。

☆☆☆

「……また、やってるの？」

放課後、玄関を訪ねても不在であったため、どうせいつもの土倉だろうと当たりを付けて扉を開け放つと、彼――衛宮士郎は悪戯を咎められた子どものようにびくっと震えてこちらを見つめ返す。

そして、表現に語弊があるようだが咎められたという言葉も強ち間違いではない。何だかんだあの時から継続している師弟関係の中でも、彼のそれについては特別デリケートな問題だからだ。

「言ったわよね？　貴方のそれは明らかに貴方の力量と釣り合っていない。だからどんな代償を支払っているのか分からないって。原因こそ貴方に埋め込まれた聖遺物だろうと予測はついても、それさえも間違っているかもしれないんだから、一度時計塔（伝承科）の方で診てもらうま

では厳禁だって」
「だけど、遠坂……」
「だけど、じゃない。宝具の投影なんて、どう考えても普通の人間にできっこないんだから。あのキャスターですら理解不能だってサジを投げたのよ？　あっちも『現存する聖遺物の解析ができるなんて』って諸手を挙げて協力してくれるってのに、どうしてあとたった数ヶ月が待てないのよ」
　これがその問題。すなわち、戦争中に発覚した衛宮士郎という弟子に埋め込まれた聖遺物の存在について。
　これはランサーがいつしか言及していたが、その場はそれどころじゃないと流してしまい、結局はそれきり聞く機会を失ってしまったもの。例の頭がおかしくなった彼の養父が彼に埋め込んだらしいそれは、どうもあのアーサー王が失ったはずの鞘であるらしい。
　なんでこんなど素人にそんな超一級の聖遺物が埋め込まれていたのかとか、何を思って埋め込んだのかとか、そもそも埋め込む意味はとか、同年代にそんな異常な存在がいて気付かなかった事実とか、何もかもが馬鹿馬鹿しくなっていて、今はその理由についてを考えるのはやめている。
　重要なのは、今後彼が間違いなく狙われる立場にあるということ。エクスカリバーの鞘なんてもはや歴史的な価値だけでも計り知れない。魔術的には言わずもがな、伝承科にも色んな伝手やギアススクロールなんかで過剰なほど情報を規制してその上で当日はキャスターにも随伴願うくらいだと言えば多少は想像もつくだろうか。とにかく、あらゆる意味で凄まじい地雷なのだ。
「うたく……」
　溜息と共に、土倉に転がる剣の一つを手に取る。ずっしりとした重量と、思わず見惚れるほどの刃紋。前回彼の投影を見たのはほぼ同様のシチュエーションで半年くらい前になるが、成長が早過ぎて寒気がする。存在を知られただけで、封印指定は確実だと確信するほどには。
　いっそこの剣を突き立てて楽にしてあげた方が彼のためではない

か。なんて危険な思考も過ぎるが、流石にそれはないとかぶりを振って彼を問い詰める。どうせ動機なんて丸わかりだ。それでも私は、彼の師として弟子の暴走を諌めなくてはならない。
「まだ、アインツベルンのことを気にしてるの？」
「……」
　無言。そして苦虫を噛み潰したような表情。つまりは図星。返す言葉もないという有り様。半年前とまるで同じ反応に頭が痛くなる。そもそもどうして彼はそんなにアインツベルンにご執心なのか。ガチで対立していた記憶くらいしかないだろうに。
「あのね。前も言ったけど、あの子はもともと短命なホムンクルスだったのよ？　そのことを死ぬ直前に伝えられて、それをどうにも出来なかったから悔いるって、そりゃあ確かに悲しいことかもしれないけど、いい加減割り切りなさいよ」
「……」
　返答は無い。表情も変わらない。頑固として譲らない構え。慣れてしまった自分が嫌になる。何だかんだと、そんな彼を見捨てられない私自身にも。
（……こいつ、今後もちょっと会話しただけの知人が死ぬたびにこんな無茶をするのかしら）
　内心では冗談めかして言ってるが、おそらくこれは真実だろう。でなければ、この彼があそこまで変貌するとは、今でも到底思えないのだから。
（アーチャーの正体が、まさかねぇ……）
　魔術の副作用か、色素が狂って色黒くなってきた肌。身長はまるで似つかないが、身長なんてそれこそ魔術とは無関係に伸びる奴は伸びる。白髪については知人が死ぬたびにこんなことしてるんじゃ、それはまあストレスでハゲるくらいはありそうだなと。
「……」
　ランサーに取り込まれたことで知ってしまったアーチャーの正体。私はそれを、衛宮くんには伝えていない。けれど、彼も馬鹿だが頭は悪くない。身長が伸び始める頃には気付くだろう。いや、今も薄々と

察しているのかもしれない。
彼を見て私は思う。アーチャーが初対面の時に告げた願い。あれは本気のそれだったのではないのか、と。
彼のクラスメイトが旅行中に事故で死んだ話は聞いた。確かに嘆かわしいことだし、悲しくもある。来世を祈るくらいはする。けれどそれに事件性はなかった。本当に単なる偶然の産物だ。こんなありふれた悲劇にいちいち突っ掛かってどうなるというのだ。
（ああ、その結論が抑止力（カウンターガーディアン）の化身ってわけ……笑えないわよ）
殴っても彼は止まらないだろう。というか前回殴られたはずなのにちっともこいつは懲りてない。そのくせ足元にあるもう一つの問題には気づいてもいない。いや、これは私があの子の名誉のために全力で隠蔽しているのだが、でも。だからって、それでも。
でも、それでも。

（……それでも、私にどうすればいいのよ）

それから一月後、間桐のご老公が亡くなった。否、私が明白な殺意を以て始末した。想像以上に抵抗が激しく、多くの市民に巻き添えが出た。それでも、なんとか穏便に自然死や事故という形で辻褄を合わせた。しかし、衛宮くんは、その犠牲者に紛れるように、いつの間にか姿を消していた。

☆☆☆

最近になって、どうしてランサーがキャスターをあれほど信頼していたのかが理解できた気がする。
（まさか、本当に借りられるとはね……）
手に持った歪な短剣。かつての戦争では披露されることも、その能力が明かされることもなかったキャスターの宝具。思い返せば何故

かアーチャーが持っていたような気がするこれは真名を『破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）』と言い、ありとあらゆる魔術を初期化する特性を持つ対魔術宝具である。

「……」

今日は藤村教諭の結婚式だ。お相手がどのような方なのか私は知らないが、遠目には誠実そうな人物に見えた。藤村教諭は行方を晦ませた衛宮くんのことを相当気に病んでいたが、彼と付き合うようになってからは笑顔も増えたと聞いている。

同窓会は当然のこと、慎二の結婚式にも、綾子の結婚式にも、藤村の代表の葬式にさえ衛宮くんは姿を見せることはなかった。今回も例に漏れず、私の試みは無駄に終わるのかもしれない。

しかし、今回ばかりはという期待もあった。家族同然だった彼女の結婚式であれば、遠目にも様子を見にくるはずであると。何よりも、桜はそうであることを望んでいる。私もそうだ。何処の誰ともしれない人を救うことを慰めとするより、身近な人の幸せを喜ぶだろうと。

「あ――」

その姿を見てしまった時、思わずあの皮肉屋の名前を叫びそうになる。

事前に警戒していなくては気づかなかっただろうその視線。それはいつかの私と同じ、ここ冬木でも一際高いビルの屋上から、地上の人を見下ろす鋭い視線。けれど人によっては冷たい印象を受けるだろうその鷹の眼も、今回ばかりは優しげに感じられた。

「……

Ｇｅｗｉｃｈｔ（重），ｕｍ（圧） ｚｕ Ｖｅｒｄｏｐｐｅｌｕｎｇ（束）（縛）」

即座に、街中の至るところに仕掛けて置いた罠の一つを作動させる。直ぐに気付かれるだろうが、私は彼の対魔力が全盛期でもＤ程度であったことを知っている。

それでも時間があれば彼の特殊性からいずれ何らかの反則で抜けられるだろうが、私が駆けつけるまでの足止めにはなるだろう。

「……久しぶりね、衛宮くん？」

「人違い――……。……いや、まさか。知っていたのか？」
意外にも、到着した時点であと一時間くらいは拘束できそうに見えた彼の姿に、やや呆れながらも納得する。何故なら今の彼は、あの特徴的な赤い外套も、それどころかなんら魔術的な防護も施していない、ただの一般人にしか見えなかったからだ。
「顔は出してあげないの？」
「……」
返答はせず、反撃のように問い掛けながらも、その内容に自嘲する。その言葉は違うだろうと。それは押し付けちゃダメだろうと。
彼を殴って止める役目は、師である私以外にはあり得ない。たとえ藤村教諭が彼にとってそれほど特別な存在でも、彼のようなひとでなしに、彼女たち一般人を巻き込むわけにはいかないのだ。
衛宮くんがダンマリを決め込んだことで、場に奇妙な沈黙が降りて、そのまましばらく無言で藤村教諭の式を眺める。ここからでは距離にしてのべ1キロは離れているが、魔術師である私ならば肉眼でもその幸せそうな顔が窺える。それは衛宮くんも同様だろう。しかめっつらではあるものの、その表情は幾分か安らかに見える。
でも。
「……羨ましい、とか、思わないの？」
「は？」
思わず、そんな言葉が漏れ出る。けれど、返答はある意味では予想通りの疑問符。その心底不思議そうな答えに、無駄だと思っても、感情が抑えられずに続ける。
「貴方にとって一番身近にいた女性が、こうしてわざわざ姿を見せてまで執着するほどの人物が、あんな誰とも知れない男のモノになるなんて、悔しいとは思わないの？」
「――」
「本来、あの場所にいるべきなのは、きっと貴方でしょう？　姉代わりだからそういう目で見れないってんなら桜でも綾子でも、いっそアインツベルンのガキんちょでもランサーでも誰とでも、その程度の人並みの幸福では満足できないの？」

「……」
一瞬、ランサーという単語に彼はピクッと身体を震わせる。もちろん、それは結婚相手云々が理由ではなく、彼も彼で、あの子には思うところがあるからだろう。
あの子の最後を、彼は知らない。それを彼は、行方を晦ます直前までずっと悩んでいた。否、この様子だと、今でも悩んでいるのだろう。だからこそ、彼は今もこうして足掻いている。おそらくは、常人には理解できない漫然な理由で。
「……まあ、いいわ。で？　そんなになるまで暴れたんだから、代償くらいは分かったんでしょ？」
「……。……。……俺の投影は、俺自身の心象風景からまろび出たモノだ。だが、その心象は、俺の中にある鞘に由来する。すなわち、その機能は無限に剣を登録し、内包するというもの。それだけなら、大した問題にはならないが……」
「心象を現実に、って、まさか――」
心象風景を現実に侵食させる魔術。魔法に最も近いと呼ばれる技法――固有結界。魔術師の到達点の一つであるその大魔術を、こいつは断片的にでも扱えるというのか。
「剣を記録するたびに、俺の身体は剣を納める鞘としての機能ものへと変質する。骨子は剣に。血潮は鉄に。また、必要としない機能は削ぎ落とされていく――」
「つまりあいつの記憶喪失は、文字通り身から出た錆ってわけだ。……なーんて、笑えないわね」
無理に茶化そうとして失敗する。渇いた笑いさえも出せない。起源が『剣』の時点である程度予想はついていたが、思った以上に彼の聖遺物は彼の根幹にまで浸透しているらしい。
「……あの子は言ってたわ。私が何をしたところで、貴方の道は変わらないだろうって」
ぽつり、ぽつりと雨が降る。天を仰ぐも雲は薄く、これを狐の嫁入りと呼ぶのだったか。まあ、こんな気まぐれの通り雨なんて、直ぐにでも止むことだろう。

「ジャンヌ・ダルクのコピーとして生まれた彼女は、元になった女性の心が理解できなかった。その行為は合理的じゃないと、論理的じゃないと常に不思議に思っていた。全ての人の幸せを願うなんて、狂っているとさえ思っていた」

『だって、そうじゃないですか――死んだら全てが終わるのに、それを、投げ捨ててまで、他人のために尽くすなんて……それがまだ、恋人だとか、家族……とか、で、あるならばまだしも、リリイ（子ども）である私には……それは、あまりにも難しい難題（ロジカル）でした』

けれど、彼女は『ジャンヌ・ダルク』として召喚されたせいで、その心の一端に触れた。その心理を己がモノとして獲得した。故に、彼女は最後に願ったのだ。彼女が憧れた生き様と、彼女が夢見たその願いを。

『信ずるものは救われる――そんな世の中を夢に見て、叶えようと足掻く愚者（わたし）がここにいる。だから私は、そんな人たちに……その願いは一人きりのものじゃないと、貴方は孤独じゃないんだと伝えたい』

「全ての人に等しくなんて自分にはできないけれど、それでも、自分にとって大切な人たちに祝福あれ――そう言って、彼女はいなくなった。どんな効果があるのか、具体的な内容についてはその時点では分からなかったけど、おそらくは、こういうことだと思う」

「な――遠坂……？」

そう言って、未だ拘束されている衛宮くんの元へ、キャスターから借り受けた短剣を懐から取り出しながらゆっくりと歩く。突然の凶行に衛宮くんは驚愕するも、今の今まで害はなさそうだと油断し切って拘束状態に甘んじていた彼に私の行動は止められない。

「――『破戒すべき全ての符（ルーレイカー）』」

「……！」

短剣を肩に突き立てた時、一瞬だけ人体にはあり得ない硬い感触が走るも、すぐにこの剣は肉を僅かに食い破る。それに一番驚愕したのは受けた当人だろう――彼の体質か小癪にも防御しようとしたのかは知らないが、彼を戒めていた拘束魔術を含めて、あらゆる魔術的な

効果が無効化されたのだから。
　そして、それは、即ち――
「ふーん……？」
からんからん、と、彼の身体から吐き出された鞘を、呆然とする彼よりも先に拾い上げる。
「この場合はこうなるのね――……宝具には効かないって話だったから、肉体の状態をリセットできれば御の字ってところだったけど、それほど――」
「何を――したんだ……？」
　分かっているだろうに、私の持つ鞘を凝視しながら、衛宮くんは震える声で問う。……そんなに怯えられるようなことをしただろうか？　いや、拘束して短剣を突き立てたら十分かもしれないけど。
「祝福なんて言ったら大袈裟だけど、それってつまり幸運ってことだろうって。だから私はあの子の願いは、私たちの『総合的な幸運値の上昇』であると思ってる」
「幸運値の上昇……？」
「そ。ただこの場合の幸運ってのは、単に宝くじに当たり易いとかそういうのじゃなくて、運命だとか、そういった意味のね。結末は変えられなくても、せめてその道中に救いがあるように――なんて。泣かせるじゃない」
「……」
　嘘だ。私はおそらく、結末が悲劇であるなら笑えない人間だ。だからこうして、わざわざこんな場所にまで出張っているのだから。
　しかし、そんなことは噯気にも出さず、私は彼から取り出した鞘をそのまま彼へと投げ渡す。咄嗟にそれを受け止めて、キョトンとする彼に、私は告げる。
「ま、今のでだいぶ後の話になったかもしれないけど、いつかどっかでアンタがくたばっても、骨くらいは拾ってあげるわ――あの子の祝福が本物なら、偶然、そんな場面に巡り合えるかもしれないしね」
　返事はなかった。私もそれを求めなかった。遠くで祝福の鐘が鳴る。隣の馬鹿が求めなかったもの。あの子が守りたかったその光景

を遠く見つめる。
　彼はきっと、止まらないだろう。本物であるこの男に、偽物の彼女が勝る道理はない。けれど、それでも、叶う可能性はゼロじゃない。なら、それを夢に見てもいいだろう。何故なら彼には、いつだってあの子が見守っているから。
「……雨、止んだわね」
「そう、だな――」
　穏やかな日差しが、小雨で濡れた身体を癒す。祝福の鐘が、空を彩る虹を飾る。そんな光景を、私たちはいつまでも眺め続けていた。